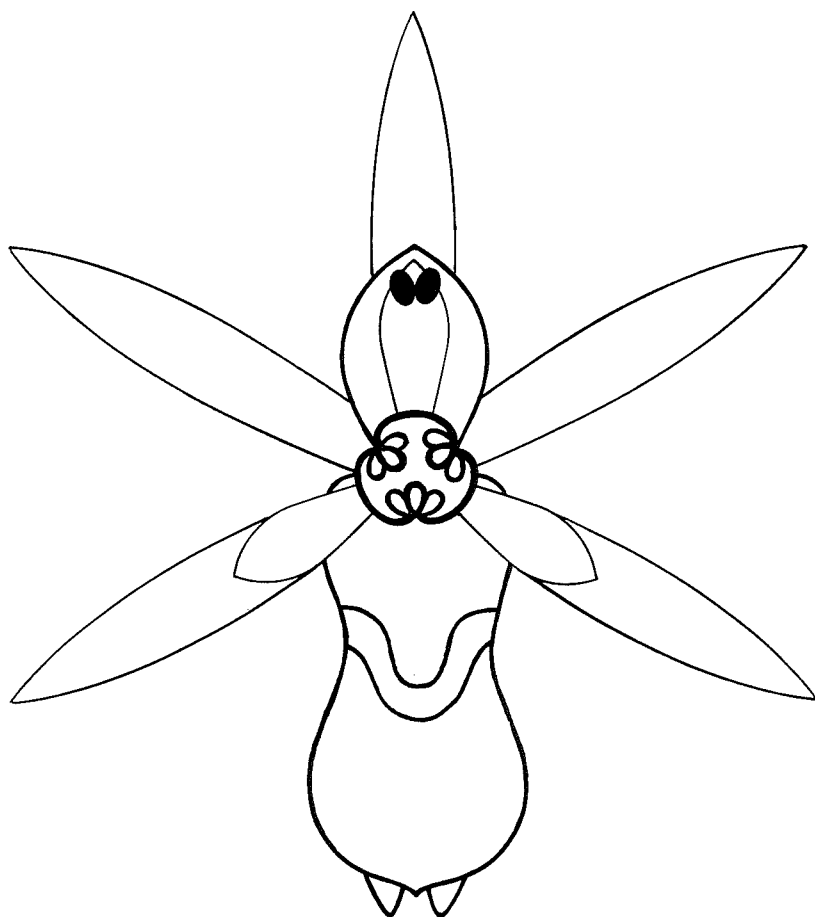


写真と記録

青森県の のラン

●花と山のガイド

沼田 俊三



表紙は青森県の代表的ランであるヒメホテイランの白花です。中扉の図はヒメホテイランの花式図を図案化したものです。

すいせんのことば

細井 幸兵衛

自然保護運動が次第に活発となってから、多くの人々が山野草に興味を持つようになった。一部には茶道人口の増加も茶花を求めて進出してきたので、近年は戦後最大の山草ブームとなり、それに呼応するようにランの写真集も次々と出版された。これらのことが、心ない人達による野生ランをはじめとする山野草の乱掘として現れてきたのも事実である。

巷間に見る野生ランの写真集とは別に、正宗巖敬先生の『日本の自生蘭』は専門家によるはじめての解剖写真を伴った解説書であり、目下第5集まで刊行され、引き続き第6集が出版の予定である。

蘭といえば何となく気品があって高価な花を想像され勝ちであるが、それらは観賞価値の高い、東洋ランといわれる支那シュンラン、カンラン、シュンラン等と、熱帯・亜熱帯産の洋ランと呼ばれるカトレア、シンビジウム、オンシジウム、デンドロビウム、バンダ等の多数の園芸種を指すことが多い。一方、我が国の野生ランは洋ランにはない野趣あふれる中にも気品を備えた美花を開くものが多く、本県でもエビネ類、ウチョウラン類、アツモリソウ類に人気がある。それがまた乱掘の因にもなっている。しかしまたヤチラン、ミスズラン、クシロチドリのように学術的には貴重種でありながら、何とも見栄えのしない種類もある。

本県のラン科植物については、昭和16年故村井三郎先生によって最初のリストが作成され、それには現在知られている大部分のものが収録されている。39年原子一男・柿崎敬一両氏がラン科植物の分布資料を発表され、その他にも野生ランのことは新聞紙上で紹介されたりもした。

今回、『写真と記録・青森県のラン』を著された沼田氏とその協力者の角田氏とは、時々撮影にさそっていただいたり、また撮影の苦労話を聞いたりしている趣味の仲間であり、私もその熱心さに脱帽している一人である。その努力が本県では初めての記録となったムカゴソウ、ミスズランの写真であろう。他にフガクスズムシ、フジチドリ、ベニシュスラン、クゲヌマラン等の本県が北限記録の貴重な写真が載せられており、本県ラン科植物の集大成として多くの方におすすめしたい。

本書に掲載した写真は私が撮影した青森県産のラン73種です。名称は前川文夫：『原色日本のラン』によりました。

撮影場所と時期は、写真と解説で示しましたが、なかには保護のため簡単に記したのもあります。別名は一般的なもののみカッコ内に併記しました。

はじめに

ランは滅びかけている植物の一つだと思います。少なくとも、このままの日本ではそうだと思います。もともと数が少なく、繊弱で繁殖率の悪い種類が多いうえ、開発と心ない人の乱掘がそうしているのです。私が角田充氏をはじめ各地の友人の協力を得て青森県のランを調べ、今のうちに写真で記録を残そうとしたのは、以上の理由によります。

現在日本には、沖縄もふくめて二百数十種のランがあるといわれています。青森県には今回の調査で73種を確認しました。将来調査が進めばさらに若干、新分布が確認されるでしょう。

73種のなかには東北地方では初めてとなったミスズラン、本県と北海道のごく一部に見られるクシロチドリ、本州では尾瀬付近と本県に見られるヒメミズトンボ、昭和8～10年村井三郎氏の報告以来幻となっていたヒロハツリシュスラン、トケンラン、ブナ林伐採により絶滅寸前のヒナチドリ、フジチドリ、フガクスズムシ、そして海辺開発により滅びゆくクゲヌマランなどたいへん珍しい、貴重なランが含まれています。

植物の撮影で最も問題なのは、「いかにしてその自生地を探すか」ということです。とくにランはまれなものが多く、生育するところも原野、湿原、山林、岩壁、樹上、さらに高山と極めて変化に富んでいます。これらのすべてを探し出し、撮影するのですから容易ではありません。しかも、写真による記録は花が咲いているか、果実となり特徴がよく分かることが望ましいのです。また、できるだけ生育環境や背景も入れたいものです。したがって一つの種類を撮影するのにうまくいって2～3年、多くは5～6年におよびました。現地に足をはこぶことも、数度から十数度におよんだのがほとんどでした。

私がこの調査と写真撮影で切実に感じたこと、それはやはりランは滅びかけているということです。以前に撮影した場所を再び訪れるとき、これが単なる杞憂でないのにしばしば愕然としました。ふえたものはまずなく、多くは開発と心ない人の乱掘により消滅しています。人類の存続、国家の繁栄のためとはいえ自然は急激に失われており、滅んでゆく動植物は哀れです。

も く じ

すいせんのことば	細井 幸兵衛
はじめに	1
写真と解説	5
アツモリソウ属	6
クマガイソウ	
アツモリソウ	
コアツモリソウ	
ミズトンボ属	12
ミズトンボ	
ヒメミズトンボ	
ハクサンチドリ属	16
ハクサンチドリ	
ウチョウラン属	18
ヒナチドリ	
ウチョウラン	
ヒナラン属	24
コアニチドリ	
ミヤマモジズリ属	26
フジチドリ	
ミヤマモジズリ	
チドリソウ属	31
ノビネチドリ	
ムカゴソウ属	32
ムカゴソウ	
アオチドリ属	34
アオチドリ	
クシロチドリ	
ミスズラン属	40
ミスズラン	
トンボソウ属	42
トンボソウ	
イイヌマムカゴ	
ソレサギソウ属	46
ツレサギソウ	
ミズチドリ	
ジンバイソウ	
キソチドリ	
ヤマサギソウ	
ホソバノキソチドリ	
コバノトンボソウ	
オオヤマサギソウ	
タカネトンボ	
オニノヤガラ属	58
オニノヤガラ	
アオテンマ	
キンラン属	60
キンラン	
ギンラン	
ササバギンラン	
クゲヌマラン	
ユウシュンラン	
カキラン属	68
カキラン	
エゾスズラン	
ハマカキラン	
ショウキラン属	71
ショウキラン	
フタバラン属	73
フタバラン	
アオフタバラン	
ミヤマフタバラン	

ツチアケビ属……………	76	コイチヨウラン属……………	106
ツチアケビ		コイチヨウラン	
トキソウ属……………	78	ヤチラン属……………	107
トキソウ		ヤチラン	
ヤマトキソウ		サワラン属……………	108
サカネラン属……………	81	サワラン	
サカネラン		クモキリソウ属……………	109
ネジバナ属……………	82	クモキリソウ	
ネジバナ		スズムシソウ	
シュスラン属……………	84	セイタカスズムシソウ	
ヒロハツリシュスラン		フガクスズムシ	
アケボノシュスラン		ギボウシラン	
ミヤマウズラ		ジガバチソウ	
ヒメミヤマウズラ		エビネ属……………	118
ベニシュスラン		サルメンエビネ	
アリドオシラン属……………	94	ナツエビネ	
アリドオシラン		キンセイラン	
ハクウンラン属……………	95	エビネ	
ハクウンラン		イシヅチ	
ホテイラン属……………	96	サイハイラン属……………	130
ヒメホテイラン		サイハイラン	
コケイラン属……………	102	トケンラン属……………	132
コケイラン		トケンラン	
ヒトツボクロ属……………	103	シュンラン属……………	134
ヒトツボクロ		シュンラン	
イチヨウラン属……………	104		
イチヨウラン			
ランの花の基礎知識……………	137		
花と山のガイド……………	147		
植物写真をはじめたい人のために……………	197		
出会いということ……………	201		
さくいん……………	204		
参考文献……………	207		

写真と解説



イチヨウラン（青森市）

解説はなるべく分かりやすくしました。補足したいところは「メモ」欄をもうけ、私の感想をつけ加えたところもあります。「ランの花の基礎知識」を参考に、理解していただきたいと思います。



写真1 クマガイソウ



写真2 クマガイソウ 花

クマガイソウ

1. 1984年6月上旬。弘前市
2. 1982年5月下旬。東津軽郡平内町。

クマガイソウは日本を代表する名花の一つである。しわのある大きなうちわ葉を2枚つけ、渋い鶏卵大の淡紅花を1つ咲かせる。まさにランの王様として貫禄十分。比較的低山のスギ林、ヒバ林に生えるが、青森県内の生育地は多くない。地下茎で繁殖するのでしばしば群落をつくる。しかし最近では乱掘されて非常に少なくなった。写真1のような群落は、今ではたいへん珍しいといえる。昔、青森県の田舎では、女性性器の方言で表現したと記録にある。和名は唇弁を源平合戦の熊谷直実が背負った髪に見立てたもの。



写真3 アツモリソウ



アツモリソウ

3. 1985年6月。三戸郡田子町。

山の草原や日のさす疎林に生える。郭公が鳴く頃咲くためカッコバナとも。人目をひく花で採取の難に遭いやすく、青森県では絶滅の危機に瀕している。かつては県内にやや広く分布していて、南津軽郡大鰐町・碓ヶ関村、北津軽郡中里町、上北郡六ヶ所村、下北郡東通村、三戸郡田子町・階上町などに記録が残されている。今は三八・上北地方、下北地方でごくまれに見られるだけとなってしまった。



写真4 コアツモリソウ 自生状況



写真5 コアツモリソウ

コアツモリソウ

4. 1885年6月上旬。南津軽郡大鱈町。
5. 1982年5月下旬。下北郡東通村。

青森県内ではヒバ林に多い。津軽・下北両半島、秋田県境の白神山地、その他に見られる。背が低く花は葉より下に垂れて咲く。果実になれば花梗がまっすぐになり上を向く。花が葉の陰に隠れるため、撮影には手こずるものの一つである。

写真4は咲きはじめの群生状況。雨が降っていたので花は重く垂れ下がり、自生地の姿を写すのが精いっぱいだった。写真5は子房がやや膨らみ、幸いなことに花が少し上向きかげんとなっていた。





写真7 ミズトンボ

ミズトンボ

6, 7. 1984年8月。西津軽郡木造町。

海岸から低山にかけて日当りのよい湿地に広く分布する。近年湿地の開発が進み生育地は少なくなった。背丈50~60cm、ヨシなどのイネ科植物に混じって、ポツンポツンと生える。側萼片は強く裏にそりかえり、唇弁は十字形、距は先端が水滴状に膨らむ。サギソウの仲間だが派手でないため、開花中でもよく注意しないと見落としやすい。写真6は湖沼に浮かぶヨットを背景に、生育環境を再現できるよいシャッターチャンスに恵まれた。



写真8 ヒメミズトンボ



写真9 ヒメミズトンボ

ヒメミズトンボ^(オゼノサワ)_(トンボ)

8, 9. 1984年8月上旬。下北郡東通村。

本州北部では、下北半島太平洋岸の低湿地に希産する。母種のオオミズトンボとは、花が小さく（距も唇弁も短く、唇弁側裂片に分裂がほとんどない）小型であることから区別される。周囲に混生していたミズトンボより背丈が低く、高さは約40～50cmであった。

本県産のオオミズトンボについては、1933年（昭和8年）東大・原寛氏の報告以後、県人の確認はなかった。1983年（昭和58年）、六ヶ所村泊中学校の相馬昭夫氏が『六ヶ所の植物』に、オオミズトンボと発表したのが、後にその変種のヒメミズトンボと分かったものである。なお、下北の「あしの会」発行の『よし』15号（1972、昭和42年）で、今井俊彦氏が“猿ヶ森の植物”に、不明種として簡単なスケッチを載せているのは本種と考えられる。ついでながら私たちは、母種のオオミズトンボを県内ではまだ確認していない。



写真10 ハクサンチドリ

ハクサンチドリ

10. 1985年7月中旬。八甲田山。
11. 1985年7月中旬。八甲田山。(シロバナハクサンチドリ)

八甲田・十和田山系、岩木山、白神山地に広く生えている。津軽、下北両半島にもまれながら分布する。八甲田山や岩木山に登ると、よく見られる高山性のランとしておなじみである。ハクサンチドリの白花品をシロバナハクサンチドリといい、写真のように純白のものから、唇弁に紫点の残るものまで連続した変化がある。葉に紫斑のあるウズラバハクサンチドリは、当地では見かけない。



写真11 シロバナハクサンチドリ

◆メ モ 岩木スカイラインの終点からリフトに乗ると、リフトの下にハクサンチドリが見られる。リフトの維持管理のための下草刈りが、日当りをよくし生育に好条件となったからだろう。ハクサンチドリにかぎらず、環境がよくなると植物は冬眠から覚めたように花を咲かせることがある。似たようなことは送電線の下や、新しい登山道などでも見られる。



写真12 ヒナチドリ

ヒナチドリ

12. 1982年8月上旬。奥入瀬。(花)
13. 1985年8月上旬。奥入瀬。(着生状態)
14. 1985年7月中旬。奥入瀬。(つぼみ)
15. 1985年7月中旬。奥入瀬。(撮影状況)

湿っぽく涼しい山の巨木や岩に、シダの仲間のミヤマノキシノブ、ホテイシダなどに混じって着生する。八甲田・十和田山系、津軽半島でごくまれに見られる。ブナの伐採が進んで絶滅が心配される。写真12は花、13は着生状態、14はつぼみ。なお13、14の下方に見えるのは、これまた着生ランの希種フジチドリである。

ヒナチドリは撮りにくいものの一つだ。それは巨木のはるかな梢に着生し、見つけにくいからである。発見の動機は、倒木から偶然見つかることが多いと聞く。しかし、普通は誰もその場所を教えないし、教えられてももう残っていないので、結局は自分で探すしかない。真夏の8月、双眼鏡片手に汗まみれとなり、ついに発見したときの嬉しさは、本人でないと分からない。





写真14 ヒナチドリ つぼみ

◆メモ チャボチドリとは、葉が茎の下部につき、最下の苞葉が大型となるものをいう。北海道の釧路原野でまれに見られる。本県のものはチャボチドリ型にあたる。



写真15 ヒナチドリ 撮影状況



写真16 ウチョウラン 普通の花

ウチョウラン

16. 1985年7月下旬。西津軽郡岩崎村。
17. 1984年7月下旬。中津軽郡西目屋村。
18. 1984年7月下旬。西津軽郡岩崎村。(シロバナウチョウラン)

深山の溪谷や空中湿度の高い岩壁に着生する。津軽半島や青森市でも古い記録はあるが、県内では白神山地によく見られる。数年前までは、青森県の名瀑「暗門の滝」一帯はウチョウランの群生地であったが、ほとんど採り尽くされてしまったのは残念である。

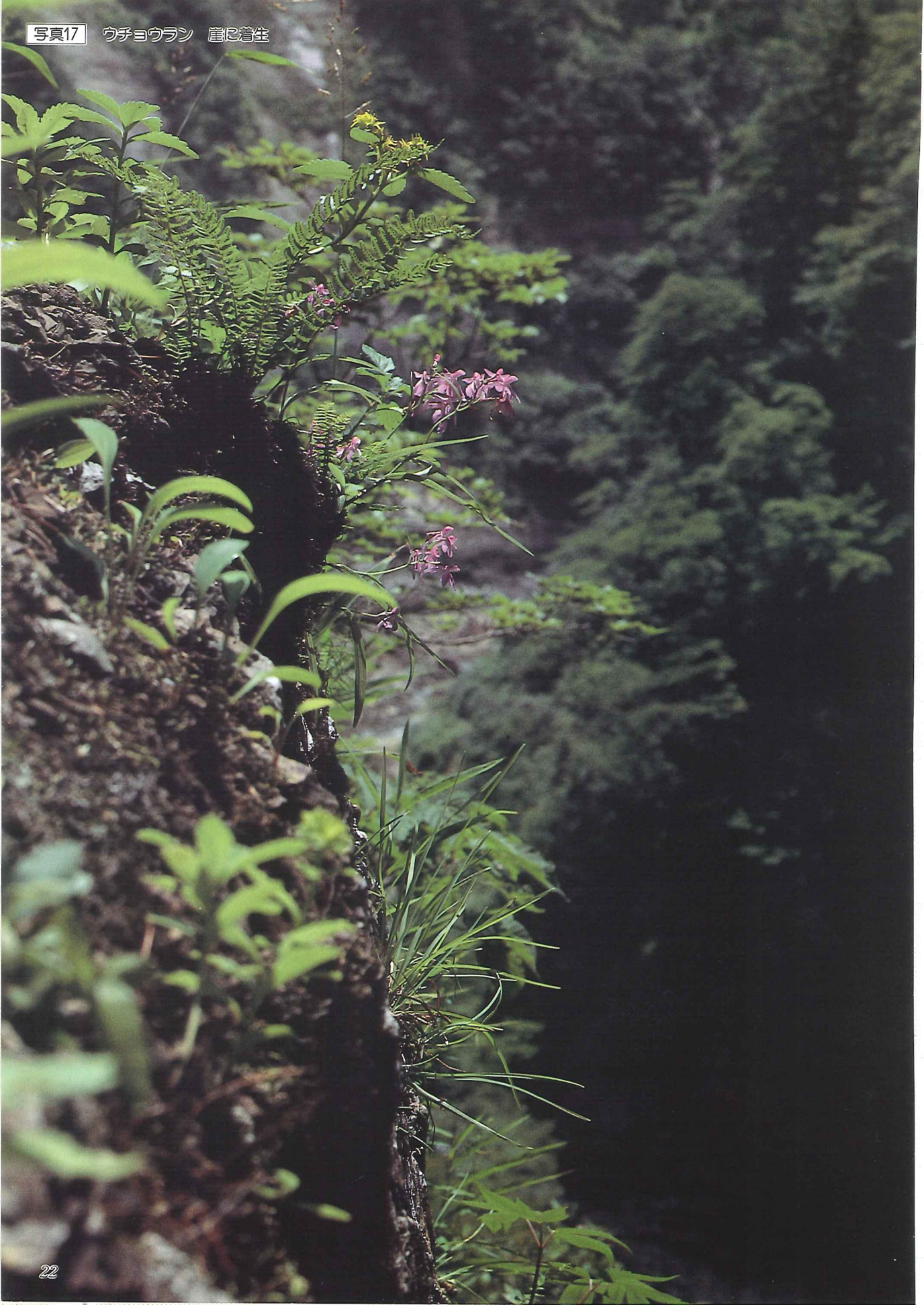




写真18 ウチョウランの白花

現在ウチョウランが残っているのは、相当危険な場所だけとなった。写真17はその危ない岩場に、やむをえず上ったときのものである。すぐ目の前にはウチョウランが群生していたが、断崖100mの眼下に溪流を望み、思わず背筋がこわばった。ロープで身体をつないでいたものの、腕力を使い果たしてカメラを持つ手の震えが止まらず、本当に恐ろしかった。写真を撮り終えて崖からようやく下りたとき、我を忘れて川の水を飲みほしたのが思い出される。



写真19 コアニチドリ 岩に着生

コアニチドリ

19. 1984年6月下旬。南津軽郡平賀町。
20. 1983年7月上旬。八甲田山。

深雪の地に生える小型のランで、県内には広く分布する。海岸の湿原から亜高山の高層湿原、また湿った岩壁に見られる。写真19は岩壁に見られたもの、写真20は八甲田の湿原に生えていたもの。以前は青森市周辺の原野の湿地にも生えていた。本種は花茎の先端にムカゴをつくって繁殖する特異な性質があるので、園芸的には増殖しやすい野生ランとして知られている。

◆メ モ 草体の一部にできる小苗をムカゴという。コアニチドリの場合は苞葉と子房の間にでき、初めは点状だが、10月には長さ3～5mm、緑褐色の楕円体となり落ちて発芽する。当地のランでは、他に八甲田山にあるヤチランが、まれに葉の先端にムカゴをつくる。



写真20 コアニチドリ 湿原のもの

◆メ モ コアニチドリ（小阿仁千鳥）は、木下友三郎氏が秋田県小阿仁溪で採集したものに、牧野富太郎博士が1919年（大正8年）命名したのものである。しかし有名な採集家フォーリー神父が、1894年（明治27年）6月19日、青森県の夏泊半島ですでに採集していたのが、京大のフォーリー標本（No.13206）を調べた角田充氏によって最近確認された。これは牧野博士の発表の、実に25年前のことである。

◆メ モ フォーリー神父

明治6年に来日したフランス人カトリック宣教師。布教のかたわら広く国内の植物を採集、フランスを主に欧米の博物館へ送り、我が国の植物研究のために尽くした植物採集家。青森市在住が長かったが、広く日本中を採集し多くの貴重な標本を残した。



写真21 フジチドリ 着生状態



フジチドリ

21. 1985年7月中旬。奥入瀬。

22. 1988年7月下旬。植栽。

ヒナチドリと同様、涼しい山の沢すじで巨木の高所にコケやシダと共に着生する。青森県の分布が分かったのは、10年くらい前である。名は、初め富士山で発見されたことにちなむ。図鑑には「富士山、愛鷹山、丹沢山塊にのみ希産」とあるが、当地でも八甲田・十和田山系および青森・秋田県境の原生林にごくまれながら見られるのである。同じようなところにヒナチドリ、ヒロハツリシュスラン、フガクスズムシなどの着生ランも見られる。生育環境が特殊なためかいずれも数が少なく、たいへん貴重である。これらの弱く希少なランは、ブナ林の伐採が進み、また心ないマニアの採り尽くしで、絶滅の危機に瀕している。

フジチドリは花が小さく、正直いって見栄えがしない。そのため本当に見つけにくいランで、最後まで撮影できなかったものの一つだった。ヒナチドリ撮影のとき全く偶然に発見した。なかなか見つけられず悩んでいたときだっただけに、内心小躍りした。

◆メモ 本種は小群生する傾向があるらしく、10～20本ずつかたまり数か所に付いていた。着生していた木はトチノキ。なお最近、青森・秋田県境から本種の白花品が見つかった。



写真22 フジチドリの花

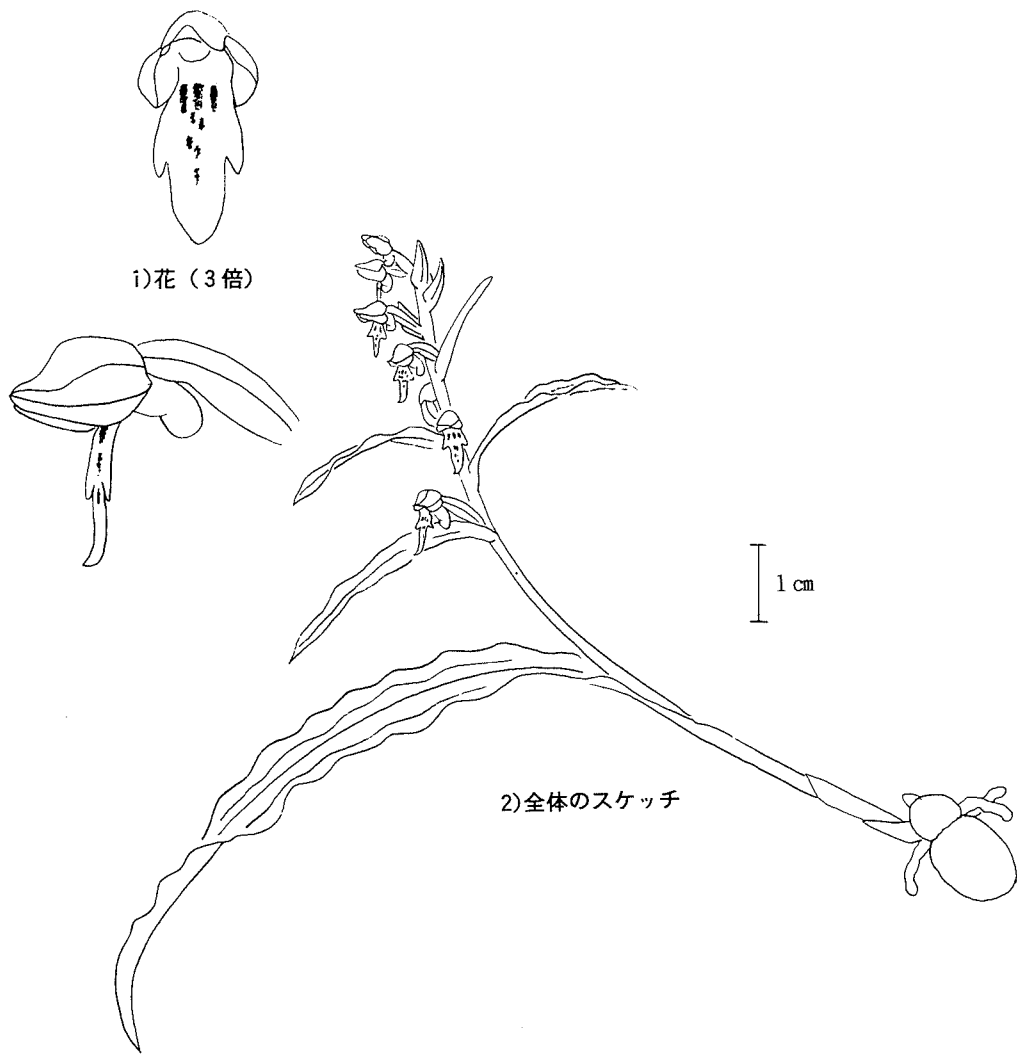


図1. フジチドリ



写真23 ミヤマモジズリ

ミヤマモジズリ

23. 1982年8月下旬。西津軽郡深浦町。

深い山のやや湿った岩場や林のへりに生える。花期は8月下旬。白神山地を含む一帯に希産する。古くは青森市にも報告がある。直立した子房のねじれる感じがネジバナを思わせるので、ミヤマモジズリの名がついたが属はまったく別のもの。



写真24 ノビネチドリ

ノビネチドリ

24. 1983年5月下旬。青森市。

湿り気ある草原、林縁、沢ぞいに生えるやや大型のランである。体のわりに一つひとつの花そのものは小さく、密集し、長い苞葉が邪魔で、あまり見栄えがしない。青森県内は広く分布、時に白花がある。

当地では、花が春の行楽や山菜シーズンと一致するので、ハイカーや山菜採りの目につくのであろう。折られてポイと捨てられている花を、何度か見たことがある。思わず手をかけたものの、持て余したのであろうか。



写真25 ムカゴソウ



写真26 ムカゴソウ

ムカゴソウ

25,26. 1983年8月中旬。南津軽郡平賀町。

やや湿り気ある半日陰の山の斜面や草地に生える。葉は細く2枚付く。初秋20~30cmの花茎に小さな花を多数咲かせる。花は子房が立って横を向き、見栄えがしない。暖地では珍しくないというが、青森県では極めてまれである。1980年（昭和55年）角田充氏が南津軽郡平賀町で初見。その後下北郡東通村、上北郡六ヶ所村の分布が分かった。

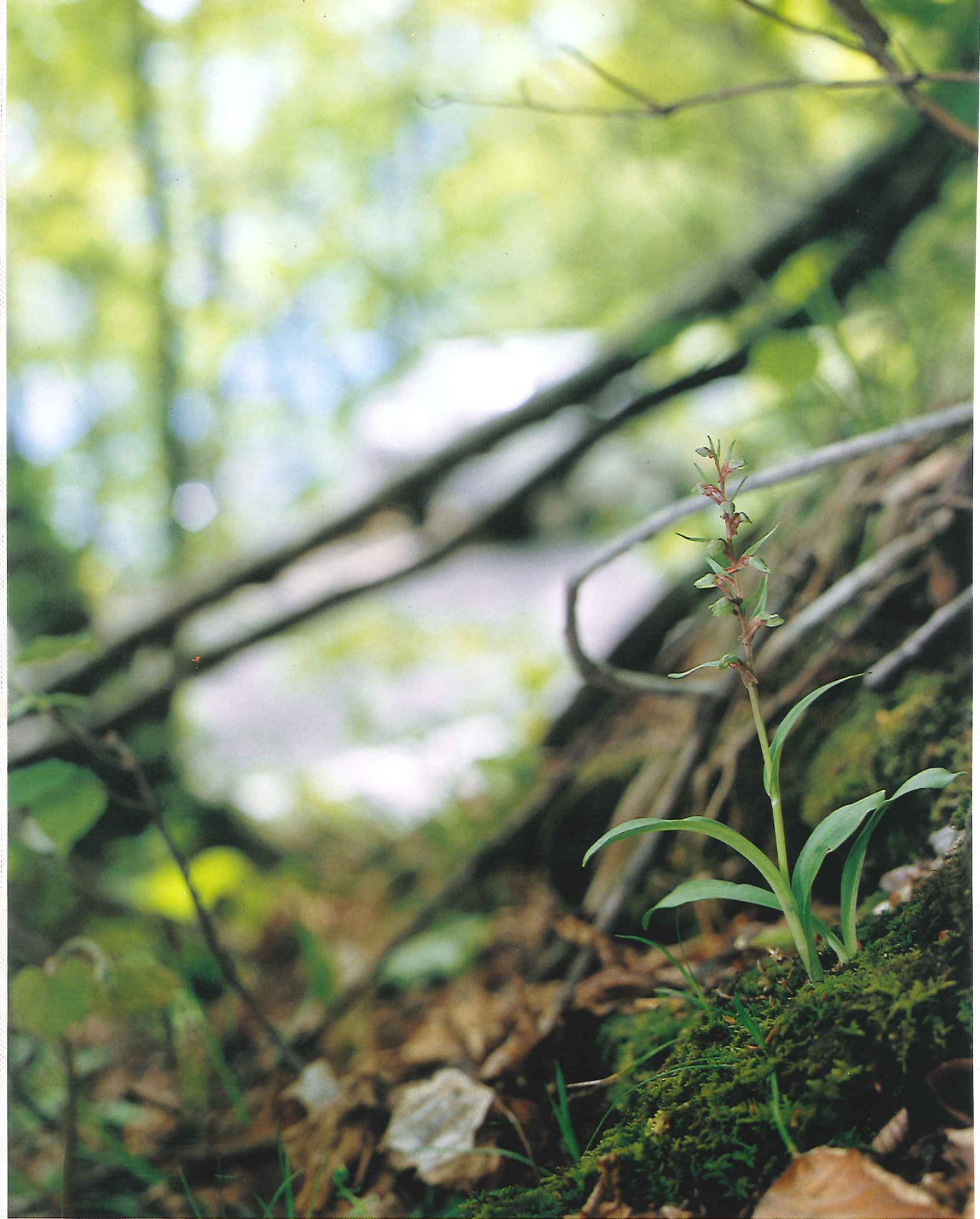


写真27 アオチドリ



写真28 アオチドリ

アオチドリ

27,28. 1985年6月上旬。十和田湖。

山地の林内に生える。下北半島、八甲田・十和田山系で見られた。アオチドリ（青千鳥）の名は、全体に緑色であるからだという。しかし、普通は花の唇弁、子房、距および花軸の赤褐色のものが多い。他県では普通に見られるところもあるが、県内では比較的まれである。



写真29 クシロチドリ 自生地

クシロチドリ

29,30. 1983年7月下旬。下北郡東通村。

初め釧路の原野で発見されたのでこの名がある。北海道と下北半島（南限）の一部に、ごくまれに見つかるランである。ヨーロッパからシベリアをへて、中国大陸北部、朝鮮半島、日本まで分布する。本州では岩手大学の故菊地政雄氏が初めて見つけた。ヤマセ常襲の適湿石灰岩地に生えている。



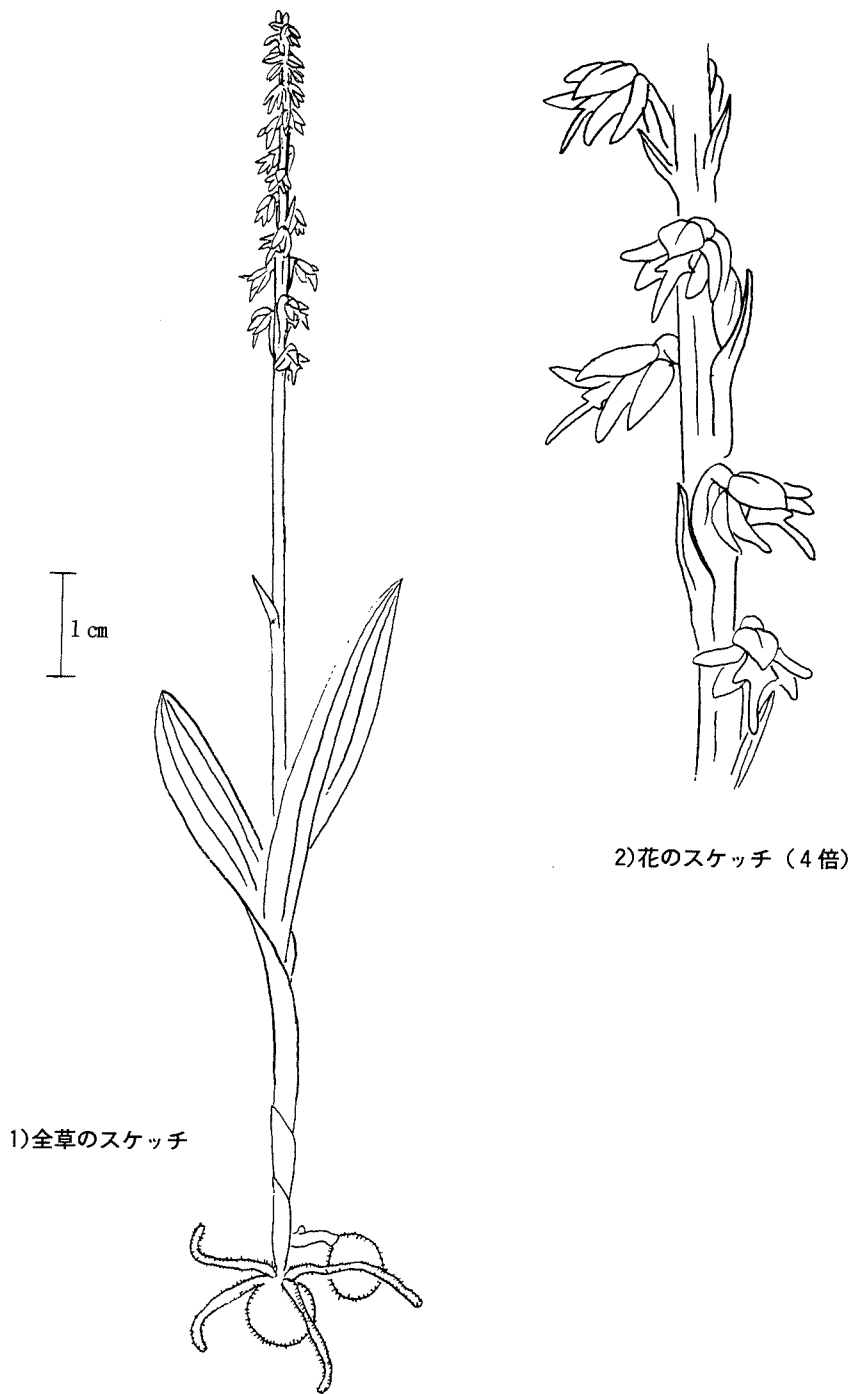


図2. クシロチドリ

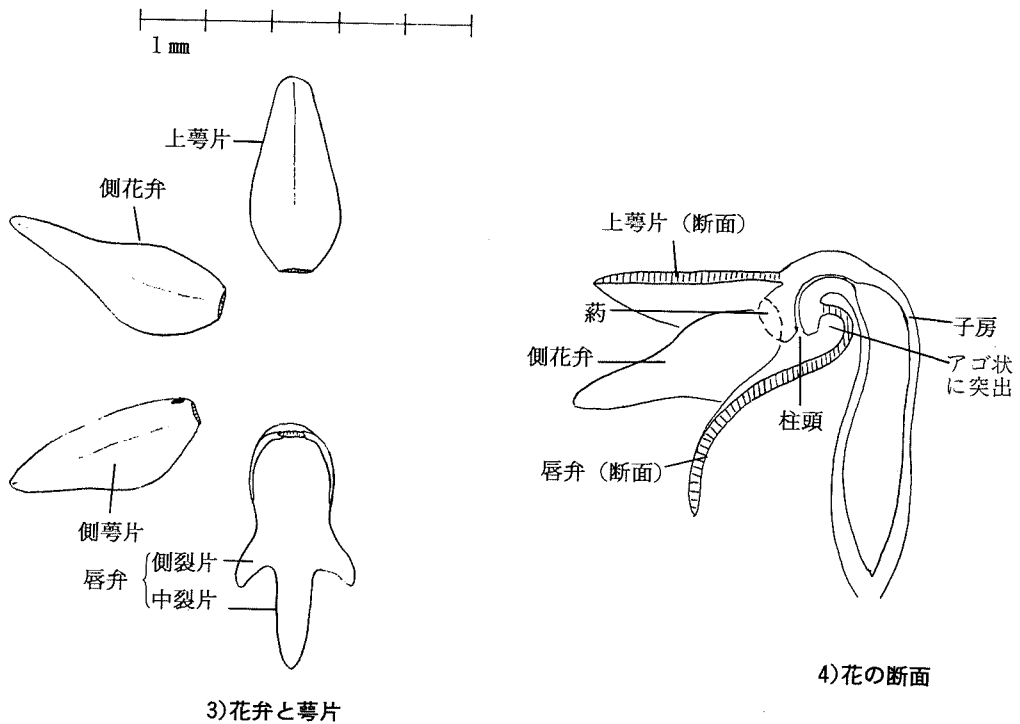


図3. クシロチドリ

多肉根は球状卵形で背丈10~15cm、下部に長楕円形の葉を通常2枚付ける。苞はうす緑で披針形。花はやや密に付け、小さく子房が立ち横を向いて咲き、地味で見栄えがしない。萼片は卵形2.5~3mm、側花卉は黄みを帯び萼片よりやや長く3mm、唇弁も3mm、3裂して中裂片が長くT字形となる。側花卉と唇弁はタワー~三脚状に開く。図鑑には距はないと書かれてある。しかし花を分解してみると唇弁の基部がアゴ状に突出している。最近一部の本によろやく写真が載るようになったが、自生品を見た日本の専門家は少ないものと思われる。



写真31 ミスズラン



ミスズラン

31. 1984年7月中旬。八甲田山。

1984年(昭和59年)、私と角田充氏が八甲田山で初見。北日本最初の記録であろう。ミスズ(水篤、三篠)とはスズタケのことで、「水篤刈る」が信濃にかかる枕詞であることから名づけられた雅名である。矢部吉禎氏が1902年(明治35年)八ヶ岳で初採集、前川文夫氏が昭和11年新種として発表した。その後浅間山、木曾駒ヶ岳、大滝山、餓鬼山、富士山などが今まで判明した産地で、八甲田山ははるか北に離れた産地となった。

過去に数えきれないほどの植物研究者が訪れている八甲田山、そして誰の目にもふれなかったミスズランに、幸運にも私たちが会えることができた。これは近年のヒットといえよう。

◆メ モ アオモリトドマツ林の、ややひらけた2坪ぐらいのところに15~16株あった。その後登山道が改修されたとき、崩れた石礫が流れ込みこの生育地は失われた。



写真32 トンボソウ

トンボソウ

32. 1985年8月中旬。下北郡東通村。

青森県内では低湿地や山地に広く分布する。よく群生する普通のランだが、花が小さく見栄えがしない。名は花をトンボの姿勢に見立てたもので、ルーペで見ないと理解できない。

◆メモ トンボソウのように地味な花の撮影は、かえって難しい。それは周囲の植物にまぎれるからで、ことに絞り込むと失敗する。



写真33 イイヌマムカゴ 全体の姿

イイヌマムカゴ

33, 34, 35. 1985年8月上旬。南津軽郡大鰐町。

36. 1984年8月。南津軽郡大鰐町。(子房が膨らんだ状態)



写真34 イイヌマムカゴ 花



写真35 イイヌマムカゴ 接写

イイヌマムカゴは全国的にも珍しい。県内ではやや明るい暖かそうなスギ、ヒバ林でごくまれに見られる。秋田県寄りの碓ヶ関や大鱈で見つかった。青森市のみちのく有料道路近くのヒバ林からも報告がある。



写真36 イヌマムカゴ 果実

植物の調査、ことに果実を付けやすいものは、秋口になってから探すのもよい。林内が透けて見やすいし、何よりも暑くないので助かる。私たちはイヌマムカゴ、ギボウシラン、ヒロハツリシュスランなどの希産種を、秋の果実の時に見つけている。ただ秋口は、蜂には十分気をつけること。特に天気の良い風のない日は要注意。私も蜂の巣に二度ぼったりと出会い、ひどい目にあっている。山でスズメバチに出会ったらどうするか？、このような前傾姿勢で逃げるしかない。



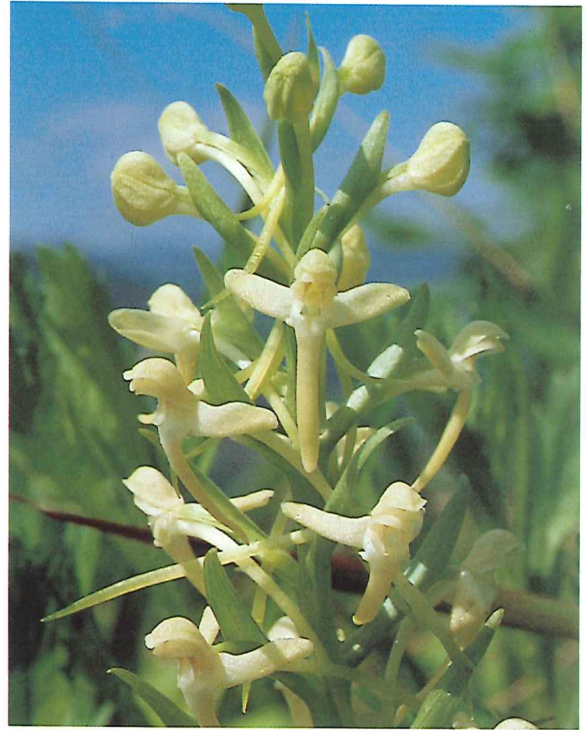


写真38 ツレサギソウ 花

ツレサギソウ

37,38. 1984年6月下旬。三戸郡田子町。

低い山の日当りのよい草原に生える。この仲間（ツレサギソウ属）のなかでは、花が大きく白いのでミズチドリと共によく目立つ。花には芳香がある。かつては草刈場などによく見られたが、農耕馬がいなくなった現在、草刈場も植林や雑木林化が進み、まれなものとなった。





写真40 ミズチドリ

ミズチドリ

39,40. 1982年7月下旬。下北郡東通村。

低地湿原から日当りのよい山の沢すじに生える大型のランで時に群生する。7月中旬芳香のある白花をやや密に咲かせる。純白で背が高いため遠くからもよく目立つ。ミズチドリの咲くところには、ノハナショウブやタチギボウシなども咲きそろい、紫の彩りをそえるので、なかなかの美観である。つい4～5年前までは、下北半島の国道沿いの湿地にも群生は見られたが、そこも水田開発で失われた。



写真41 ジンバイソウ

ジンバイソウ

41. 1984年8月下旬。東津軽郡蓬田村。

ブナ・ヒバの混交林に普通。時々群生する。地表を覆う丸形の葉は光沢があり、古名のミズモラン（水面蘭）がぴったり。なれると葉だけでも区別がつく。7月上旬から花茎を伸ばし、8月下旬に花を咲かせる。花は淡緑色で上萼片と側花弁が、かぶと（兜）のような形になり、正面から覗くと葯隔が上では狭く下では広くなる。

日本三大美林の一つ青森のヒバ林にはランが比較的多い。ヒバ林は日中でも薄暗く、温度も低く、下草が少ない。それがランの生育に適しているのであろう。ジンバイソウもヒバ林に普通である。しかし花付きは必ずしもよくなく、案外気難しい植物なのかもしれない。



写真42 キソチドリ

キソチドリ

42. 1984年7月下旬。
西津軽郡岩崎村。

ブナ・ヒバ混交林から亜高山帯にかけて普通。花は両手を高くあげ（側花弁）、両足を広げて（側萼片）、スカイダイビングの姿勢となる。葯隔は広く平行する。一番下の少し大きい葉が水平に出て、茎をいдаくのが特徴。ただしキソチドリは、地方ごとに葉の大きさや背丈が違い、大きいものにはミチノクチドリ、オオキソチドリの名もあった。

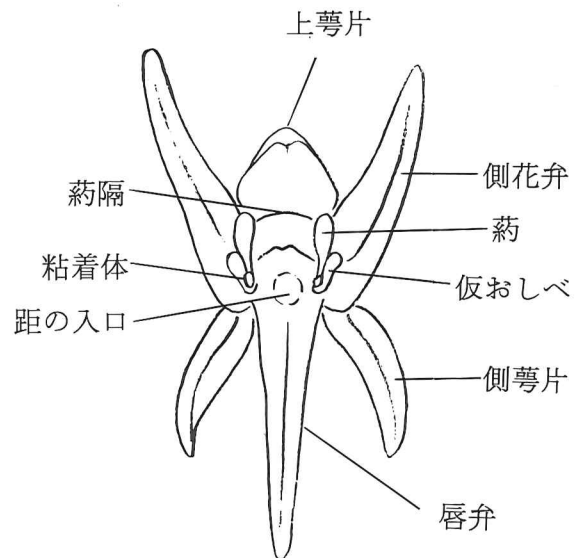


図4. キソチドリ



写真43 ヤマサギソウ

ヤマサギソウ

43. 1985年7月下旬。八甲田山。

山地の草原、疎林に生える。八甲田山では湿地にも生え、ホソバノキソチドリ、コバノトンボソウと混生していることがある。側花弁は両手をあげたようになるが、側萼片はキソチドリほど後ろに反りかえらない。葯は前方に突出して葯隔は半管状となる。茎にやや斜めに付く長楕円形の葉に照りがあり、つぼみも花も大きい。また花期が少し早いことから、見なれると区別できる。



写真44 ホソバノキソチドリ

ホソバノキソチドリ

44,45. 1983年8月下旬。
八甲田山。

日当りのよい草地から湿原にも生える高山性のランである。葉は必ずしも細くない。草姿はコバノトンボソウより太めで、花は黄味を帯びた淡緑色、上萼片と側花弁は不完全なかぶと状となる。葯隔は狭い。花はやや込みあってつき、距が斜め下にたれるのが特徴。青森県内では八甲田山に見られる。コバノトンボソウよりは、ずっと少ない。



写真45 ホソバノキソチドリ 花

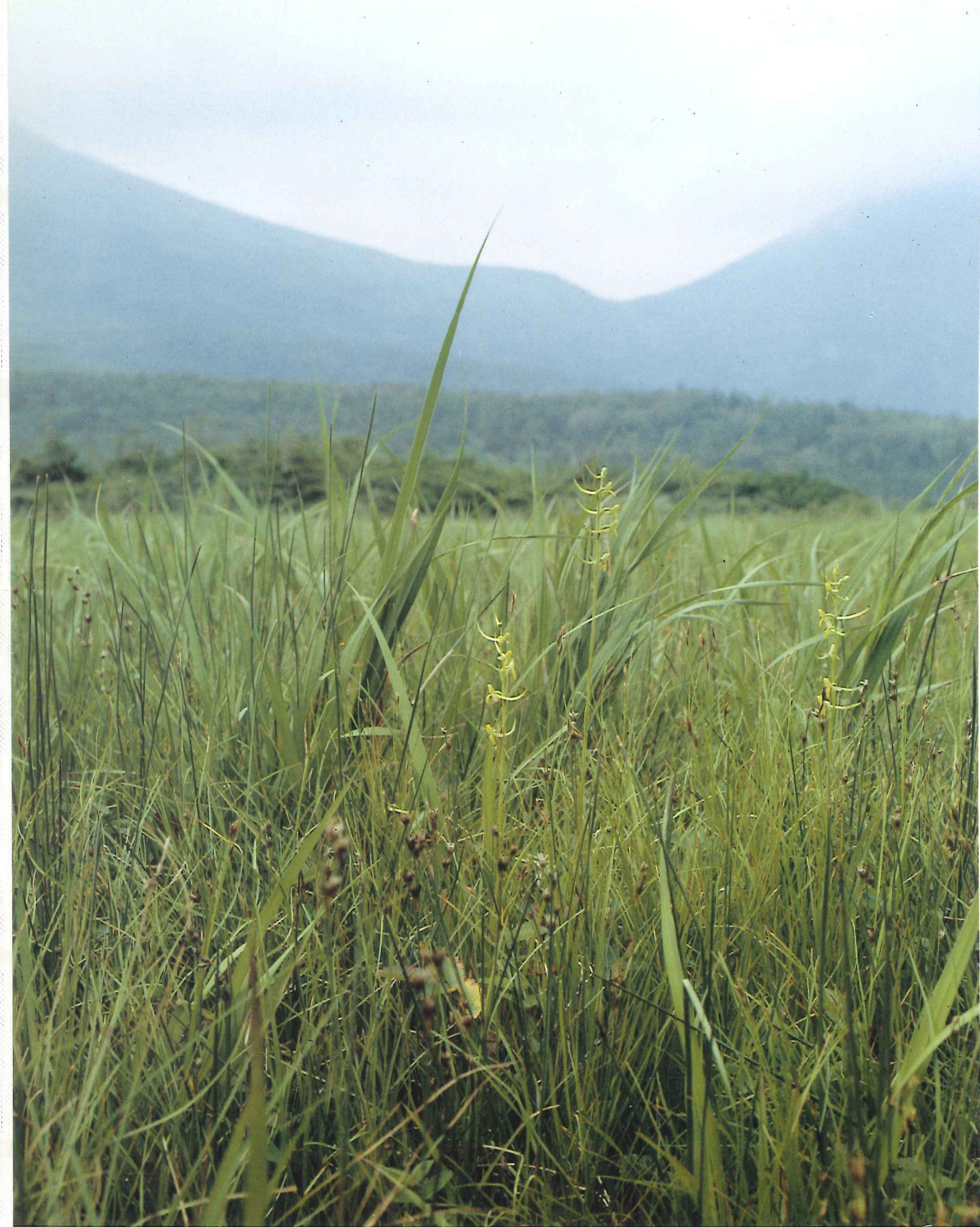


写真46 コバノトンボソウ



写真47 コバントンボソウ 花

コバントンボソウ

46,47. 1983年8月上旬。八甲田山。

ホソバノキソチドリより、はるかに好湿性である。全体的にホソバノキソチドリより繊細で、茎のなかほどに細い一枚の葉を茎にそって付け、繊細で飾り気のない淡緑の花をまばらに咲かせる。点々とまたは2～3本ずつ生え、夏の湿原に風情をそえる。しっぽみたいな距を、そろって跳ね上げるのが特徴。県内では八甲田山の高層湿原に普通。海岸湿原にもまれに見られる。



写真48 オオヤマサギソウ

オオヤマサギソウ

48. 1985年8月上旬。下北郡東通村。

青森県内では、海岸の低地から亜高山の林やへりまで広く分布する。群生はしない。光沢ある長楕円形の葉を2枚付け、白っぽい小花をやや密に咲かせる。拍手を打つように左右に展開した側萼片が特徴的。唇弁の基部に小さい突起を持つ。



写真49 タカネトンボ

タカネトンボ

49. 1983年8月中旬。八甲田山。

高山の雪田のへり、適湿のガレ地に生える高山性のラン。背の高さは10～15cm、根もとに光沢ある楕円形の葉を2枚付ける。花も小さく地味でよく注意しないと気がつきにくい。登山道の明るい草地にも生えるので、登山者の目に止まりそうなものだが、多くの人は教えられないと気がつかない。

◆メ モ 青森県のフロラを調べている細井幸兵衛氏によると、県産ツレサギソウ属としては以上のほかに、マイサギソウ、ハシナガヤマサギソウ、ガッサンチドリが採集されている。



写真50 オニノヤガラ

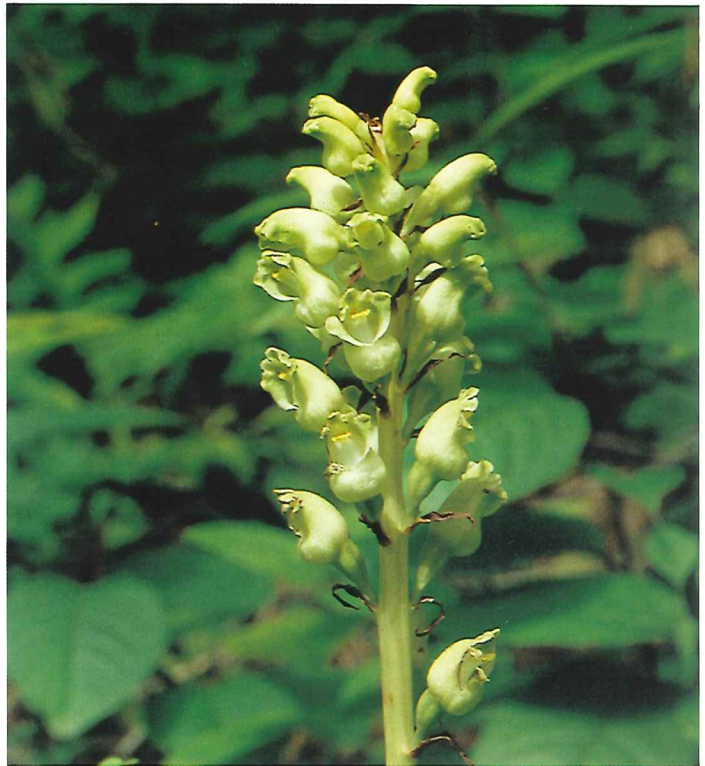


写真51 アオテンマ

オニノヤガラ

50. 1983年7月中旬。青森市。

51. 1983年 月中旬。青森市。(アオテンマ)

低山からブナ林に生える腐生ランで、県内では普通に見られる。まれに全体が青緑色のものがありアオテンマといい、淡黄白色のものをシロテンマという。6月頃よりヌウーッと花茎を伸ばし、高さ1mくらいになる。

◆メ モ 腐生ランとは、葉緑素がなく自分では炭酸同化作用を営むことができず、他の植物や動物の遺体から養分をもらって生活するランのこと。本種はキノコのナラタケ（方言さもだし）の菌が共生するという。県内で見られる腐生ランには、他にショウキラン、サカネラン、ツチアケビがある。



写真52 キンラン

キンラン

52. 1985年6月上旬。西津軽郡木造町。

暖地では普通のランだが、青森県が北限にあたり珍しい。日本海岸沿いの深浦、鱈ヶ沢、木造町に見られる。佐藤蒞（しとみ）氏は明治から大正にかけて青森大林区署〔現在の営林局〕に勤めた画家で、植物画をよくした。氏が描いた青森市大別内での本種の立派な写生図が残されている。当地ではこれが最初の記録と思われる。なお最近三戸郡田子町、十和田市にも確認された。



写真53 ギンラン

ギンラン

53. 1982年6月中旬。青森市。

小型のランで低山のマツや雑木林に生える。ヒバ林にも生える。ポツンポツンと生え群生はしない。キンランに比べると、ずっと地味で白い花は全開しないが、清楚さは少しも劣らない。県内に広く分布するが多いものではない。写真はヒバ林のものでコケイラン撮影のとき偶然足もとに生えていた。





写真55 ササバギンラン

ササバギンラン

54,55. 1982年6月。青森市。

ギンランに似るが、葉身が直線的で丈が高く強壯、花序の下につく苞葉が長く、よく群生することから区別される。青森県内では低山に普通。



写真56 クゲヌマラン



クゲヌマラン

56. 1982年5月下旬。三沢市。

57. 1986年6月上旬。北津軽郡市浦村。

最初、神奈川県くげぬまの鶴沼で発見されたので、この名がある。ギンランとは距がないので区別される。本州中・北部の太平洋側のクロマツ林に、まれに見つけられてきた（下北半島が北限）。北津軽郡市浦村での私の写真57（1986年、昭和61年6月）は、日本海側の初記録と思われる。従来、太平洋側に偏るとされてきたが、日本海側にもあることが分かった。

これは十三湖近く、クロマツと雑木の林でエビネを撮影中見かけ、最初ギンランと思った。しかしレンズを通して見ているうちに、距がないのに気がついた。クゲヌマランは前にも見ていたので、すぐピーンと来た。花が終わっていたら、ギンランと思って何の疑問も持たなかっただろうが、花が盛りだったのは幸運だった。周囲にはもう1個体あった。

◆メモ クゲヌマランには、植物生化学者の服部静男氏が、昭和10年頃神奈川県くげぬまの鶴沼で病気静養中に発見したというエピソードがある。しかし、かつての保養地も今はすっかり家が建てこみ、昔の面影は全くなく原産地は失われてしまった。



写真57 クゲヌマラン



写真58 ユウシュンラン

ユウシュンラン

58. 1984年6月上旬。北津軽郡市浦村。

ギンランに似るが葉が退化し、距が長く、側萼片がゆがんで長いことから容易に区別できる。半腐生植物との説もあり、栽培しても生育は無理。青森県内では、低地の林内に分布するがまれな種類である。名は植物学者の工藤祐舜氏を記念したもの。



写真59 カキラ

カキラ

59. 1982年7月下旬。上北郡六ヶ所村。

名は、花の色が柿の色に似ているからというが、もう少しよい説明（名前）がなかったものかと思う。日当りの海岸湿地から山の原野まで青森県内に広く分布する。よく群生するが遠くからはそれほど目立たない。7月中～下旬、花茎に5、6花を横向きに付ける。苞葉は大きく花はあまり開かず水平になる。唇弁に紅紫色の細脈が血管のように走っている。花は下から順序よく咲くが2～3日でしおれる。



写真61

写真60 エソスズラン

エソスズラン (アオスズラン)

60, 61. 1983年8月中旬。東津軽郡蓬田村。

ブナ・ヒバ混交林から亜高山帯までの樹林下に生える。群生はほとんどしない。花はカキランより多い。1日咲きで、色はくすんだ黄緑、下向きに咲き見栄えがしない。カキラン同様、花がすぐしおれる。青森県内では広く分布し珍しくない。



写真63

写真62 ハマカキラン

ハマカキラン

62,63. 1983年8月上旬。下北郡東通村

太平洋岸で白波がおし寄せる砂丘のクロマツ林でまれに見られる。エゾスズランの変種ないしは海岸の生態型と考えられているものである。1977年（昭和52年）三沢高校教諭の大沢達郎氏が小川原湖畔で初採集。ただし私たちが見た本県のもは、群生することもなく、エゾスズランとの間に決定的区別点がないように思う。



写真64 ショウキラン

ショウキラン

64,65. 1983年7月上旬。南津軽郡大鰐町。



写真65 ショウキラン

ブナ林の沢すじで、湿った地に生える腐生ランである。初めて出会う人はその花の色
の鮮やかさに驚く。花は疫病神を追い払う「鍾旭様」^{しょうき}の顔に見立てたものというが、
いかめしい名とはうらはらに大変美しい。県内に広く分布するが多くはない。



写真66 フタバラン

フタバラン (コフタバラン)

66. 1984年7月下旬。下北郡大畑町。

67. 1988年7月上旬。青森市
(裂開した果実)

高さ10cm以内の小型のラン。花の色も目立たないので見つけにくい。茎の中ほどに光沢ある三角状腎形の小さな葉を2枚付ける。花は小さく唇弁がガニ股のように2裂する。開花時、既に子房が膨らみ、花が終わるとまもなく裂開して種子を散らす。よく観察するにはルーペが必要。青森県内では低山地の林内から亜高山の針葉樹林（アオモリトドマツ、コメツガ）まで、垂直分布の幅は広いがまれである。



写真67 裂開した果実



写真68 アオフタバラン

アオフタバラン

68. 1982年8月下旬。東津軽郡蓬田村。

青森県が北限。比較的低い山のヒバ林に生えている。高さは10～15cm、葉が丸みを帯び青緑色で白っぽい筋が3本あり、茎の低い位置に付くことから、花がなくても他のフタバランと容易に区別できる。



写真69 ミヤマフタバラン

ミヤマフタバラン

69. 1982年7月中旬。東津軽郡蓬田村。

ブナ・ヒバ混交林から亜高山まで生える。高さ10～15cm、茎はうす紫色を帯び、淡緑色の花をまばらに2～4付ける。ハート形の葉は先がとがって光沢があり、フタバランより少し大きくなるので、なれると花がなくても区別できる。



写真70 ツチアケビ

ツチアケビ

70. 1985年8月上旬。下北郡東通村。



写真71 ツチアケビ 花



写真72 ツチアケビ 果実

ツチアケビ

71. 1982年8月上旬。北津軽郡金木町。(花)
72. 1984年9月下旬。上北郡六ヶ所村。(果実)

花を見れば確かにランだが、秋に果実だけを見ればまさにウインナーソーセージそっくり。ツチアケビの花は子房がねじれないので、唇弁が上にくる。腐生ランで、低山の雑木林からブナ・ヒバ混交林にまで分布する。実が民間薬として珍重されるため、熟すと採取されることが多い。本種もナラタケが共生するといわれる。

ツチアケビも撮影には手間取った。花期が短くすぐ果実になること、台風シーズンと重なり花が傷みやすいこと、採取などによる。ある日、果実の写真を予定して出かけたら採取に会い、がっかりして茸でも採ろうと別の山に入ったら、立派な果実に出会い驚いたことがあった。



写真73 トキシウ



写真74 トキシウ(白花)

トキシウ

73. 1986年6月下旬。西津軽郡車力村。

74. 1986年6月下旬。西津軽郡車力村。(シロバナ品)

日当りのよい湿地に生え群生する。青森県内、普通。鮮やかなピンクの花を茎頂に1個つける。花が咲いていなければ周りの草にまぎれて分からない。数年前までは方々に大群生が見られたが、最近は全県で開発が進み、また山草ブームで乱掘され、ずいぶん数が減ってしまった。シロバナトキシウは、トキシウに混じってまれに見られる。

◆メ モ 上北郡からトキシウの奇形花で管咲きのイトザキトキシウが記録されている。(大沢達郎・里見信生：『植物地理分類』31巻68頁，1983)。



写真75 ヤマトキソウ

ヤマトキソウ

75. 1982年7月上旬。東津軽郡平内町。

トキソウに似るが、開花期が少し遅くなる。成育環境も異なり、より乾いた低山〜ブナ林の陽地などに生えている。花は唇弁の先がうす紫のほかは、ほけた白で全開せずさえない。群生もしない。青森県内の分布は限られているようで、数も多いものではない。



写真76 サカネラン

サカネラン

76. 1982年5月下旬。青森市。

比較的低山でマツや雑木林のササのなかに生える腐生ラン。根が上向きに伸びるので「逆根蘭」の名がある。青森市近郊でもワラビ採りの時などにまれに見られる。県内ではほかに、上北郡吹越烏帽子、三戸郡四角岳などからも知られている。



写真77 ネジバナ

ネジバナ (モジズリ)

77. 1983年8月上旬。東津軽郡平内町。

78. 1985年8月上旬。八甲田山。



写真78 ネジバナ

古い名モジズリは、この草の花序のねじれ（もじれる）を表現したもの。低湿地から高層湿原、原野山地から学校のグラウンド、また庭の芝生にまで最も普通。野生ランのうちでは実生でよくふえる種類である。これは他のランには見られない例だと思う。写真77は学校のグラウンドに生えていたものであり、78は八甲田の高層湿原のもの。ネジバナは子房が90度しかねじれず、花序軸にたいして90度横向きとなって咲く。

◆メ モ 青森市出身の著名な植物学者であった郡場寛弘前大学元学長の学位論文が、ネジバナの研究であった。



写真79 ヒロハツリシュスラン 撮影状況

ヒロハツリシュスラン

79, 80, 81, 82. 1984年8月上旬。東津軽郡蟹田町。

湿り気ある深山のブナ巨木などに着生する。花茎はいったん垂れ下がるが、花序は鎌首をもたげるように立ち上がる。津軽・下北両半島、十和田山系でまれに見る。森林伐採が進み絶滅が心配される。写真79は撮影状況。右頭上に一花がポツンと見え、写真80はその接写。写真81は太い枝についているのを、82は向い側の立ち木についていたのを、同所より望遠レンズで撮影したもの。

本種も見つけにくいものの代表格である。私たちが探すのに3年、撮影に2年かかった。正確な花期が分からなかったため、真夏の暑いさなか何度も入山と観察を強いられた。

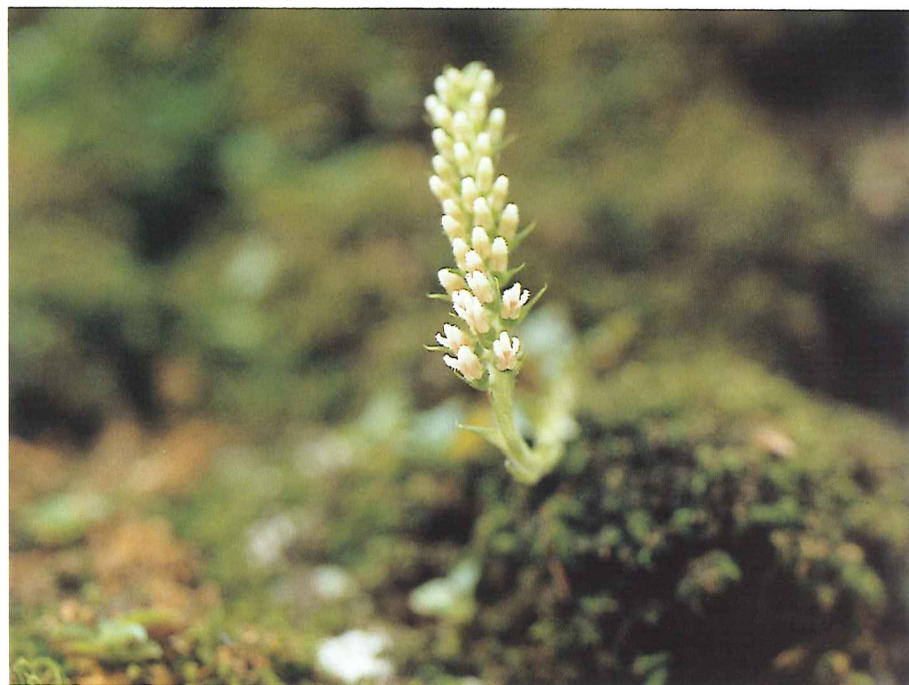


写真80 ヒロハツリシュスラン花 接写



写真81 ヒロハツリシュスラン 太い枝に着いている



写真82 ヒロハツリシュスラン

村井三郎氏がヒロハツリシュスランを奥入瀬で初めて見つけたのは、昭和8年頃だが、長い間幻のランであった。近年になって県立郷土館の「津軽半島自然調査」で、津軽半島にもわずかだが生育しているのが知られた。私の写真はそれとは別に見つけたもの。海拔約400m、着生していた木はブナ。

◆メ モ 村井三郎（むらい・さぶろう）

盛岡市出身。昭和5年から34年まで、青森営林局と林業試験場に勤め、管内の宮城・岩手・青森県下の植物に精通していた人である。農林省東北林木育種場場長をされたのち退職、「岩手植物の会」の会長もされた。昭和57年没。74歳。



写真83 アケボノシュスラン

アケボノシュスラン

83. 1982年9月中旬。上北郡野辺地町。
84. 1981年9月中旬。青森市。

青森県のランとしては最も遅咲きである。ブナ林に普通。ヒバ林にも見られる。茎は地上を長くはってから立ち上がり、淡桃花を横向きに付ける。花穂は短くつまる。時に大きな群落となるが、暗いヒバ林では花を付けないことも多い。



写真84 アケボノシュスラン 花



写真85 ミヤマウズラ

ミヤマウズラ

85,86. 1982年8月下旬。東津軽郡蓬田村。

名は葉の斑紋を鷯^{うずら}の羽のまだら模様に見立てたものといわれる。ミヤマ（深山）の名に反し全国的に低山で普通のように、青森県内でもヒバ林で普通に見られる。花はピンクがかっているが、山での姿は地味である。



写真86 ミヤマウズラ

青森県の最高峰岩木山は、旧暦8月1日のお山参詣で全国に有名である。しかし岩木山のみならず、青森の少し高い山は頂上にたいてい祠があり、地元の人々の信仰の対象となっている。いつだったかそのうちの一つ、津軽半島蓬田村の赤倉岳に登ったら、村人たちが家族連れでお参りをしていた。宴もたけなわ、珍客の私たちも大歓迎された。ミヤマウズラはちょうどこの頃咲く。そのとき家族と山に遊びに来ていた子供の一人が、ミヤマウズラを手に入れているのを見て、中国の重陽の節句の古い習慣を想い、都会の人には想像もできないだろうなあと、ちょっぴり感傷的になったことがある。



写真87 ヒメミヤマウスラ



写真88 ヒメミヤマウズラ

ヒメミヤマウズラ

87,88. 1984年8月下旬。岩木山。

亜高山の針葉樹林（アオモリトドマツ、コメツガ）で、林床のコケの中に生える高山性ランである。ミヤマウズラに似るが全体に小型で、葉の斑紋に特徴があり区別される。県内では八甲田山、岩木山でまれに見られる。



写真89 ベニシュスラン



写真90 ベニシュスラン

ベニシュスラン

89,90. 1984年7月下旬。西津軽郡岩崎村。

暖地系のランで、従来太平洋側が千葉県清澄山、日本海側は富山県砺波郡大牧温泉付近が北限記録であった。1980年（昭和55年）、弘前市の田中勲氏が十二湖で見つけ、北限が一気にブラキストンライン近くまで北上した。



写真91 アリドオシラン

アリドオシラン

91. 1982年7月。東津軽郡蓬田村。

亜高山帯のコメツガ、アオモリトドマツ林、ブナ林やヒバ林に生える小型のラン。小群生することがある。写真はヒバ林のもの。地表をはった茎が立ち上がり、葉を3～4枚付け、体にくらべて大きい円筒状の白花を1～2個咲かせる。名は葉がアカネ科のツルアリドオシに似ていることから、ツルアリドオシランというのを簡略したものという。



写真92 ハクウンラン

ハクウンラン

91. 1982年7月。東津軽郡蓬田村。

アリドオシランに似る小型のランである。低山のブナ・ヒバ混交林に見られるが、まれなものに属す。葉が小さくて目立たず、白い花が咲いていなければ見つけにくい。しかし一度見なれると、あっちこっちで、見つけられるようになった。人々が入山しないお盆の暑い盛りに咲くので、かえって目につきにくいのかも知れない。



写真93 ヒメホテイラン



写真94 ヒメホテイラン

ヒメホテイラン

93. 1988年5月上旬。青森市。

94. 1988年5月上旬。青森市。(白花の1)

ヒメホテイランはヨーロッパからシベリアをへてサハリン、アリューシャン、北アメリカと北半球の針葉樹林に広く分布する美しいランである。国内では北海道定山溪と青森県のヒバ林に産する。小さな体に大きな花、早春残雪の林に微かな芳香を放って咲く姿は、ヒバ林のお姫様がぴったりだ。



写真95 ヒメホテイラン

ヒメホテイラン

- 95. 1985年5月上旬。青森市。(白花の2)
- 96. 1988年7月上旬。青森市。(果実。まもなく裂開する)
- 97. 1988年8月上旬。青森市。(果実。裂開し種子は散っている)
- 98. 1988年10月上旬。青森市。(新葉展開直後)

ヒメホテイランの白花品は、ヒメホテイランと混じってごくまれに見られる。写真94, 95のようにややピンクがかったものから純白まで変化がある。本州中部山岳に産するホテイランと、こちらのヒメホテイランの区別は、ヒメホテイランは正面から見ると、距の先端が唇弁より長く出ないのが相違点とされる。

花が終わると1か月ほどで葉は枯れ休眠に入る。結実(結実するのは多くない)すれば葉は7月上旬まで保たれる。果実の熟するのは早く7月上旬に裂開する。同時に葉も枯れる。



写真96 ヒメホテイラン
果実 裂開直前



写真97 果実 裂開し種子は散っている



写真98 秋の花芽

9月下旬より新葉を展開、花芽をつくり(写真98)、長い冬を雪の下で過ごす。早春、雪消えとともに再び成長を始め開花する。図5は新葉展開後の秋の株のスケッチを示した。今春の花茎は萎れ新しいバルブと花芽ができています。しかし新しいバルブはまだ十分肥大していない。プロトコルムをもつ株も見られる。

最近の園芸ブームで、野生ランの栽培書も多く出版されている。しかし私は、周囲でヒメホテイランの栽培・増殖に成功したという人を知らない。近年ヒメホテイランは、青森のヒバ林から急激に姿が消えた。この美しい花がヒバ林からなくなることは本当に寂しいかぎりだ。

◆メ モ プロトコルム

ランの種子がラン菌を取り込み細胞分裂して大きくなった状態をいう。まだ単なる細胞の塊だけで葉や根はない。プロトコルムは次第に大きくなり、その一部に芽を生じ本来の茎や葉となる。一人前になればプロトコルムは消失するが、サイハイランやヒメホテイランでは、親株になっても持ち続けるのがある。

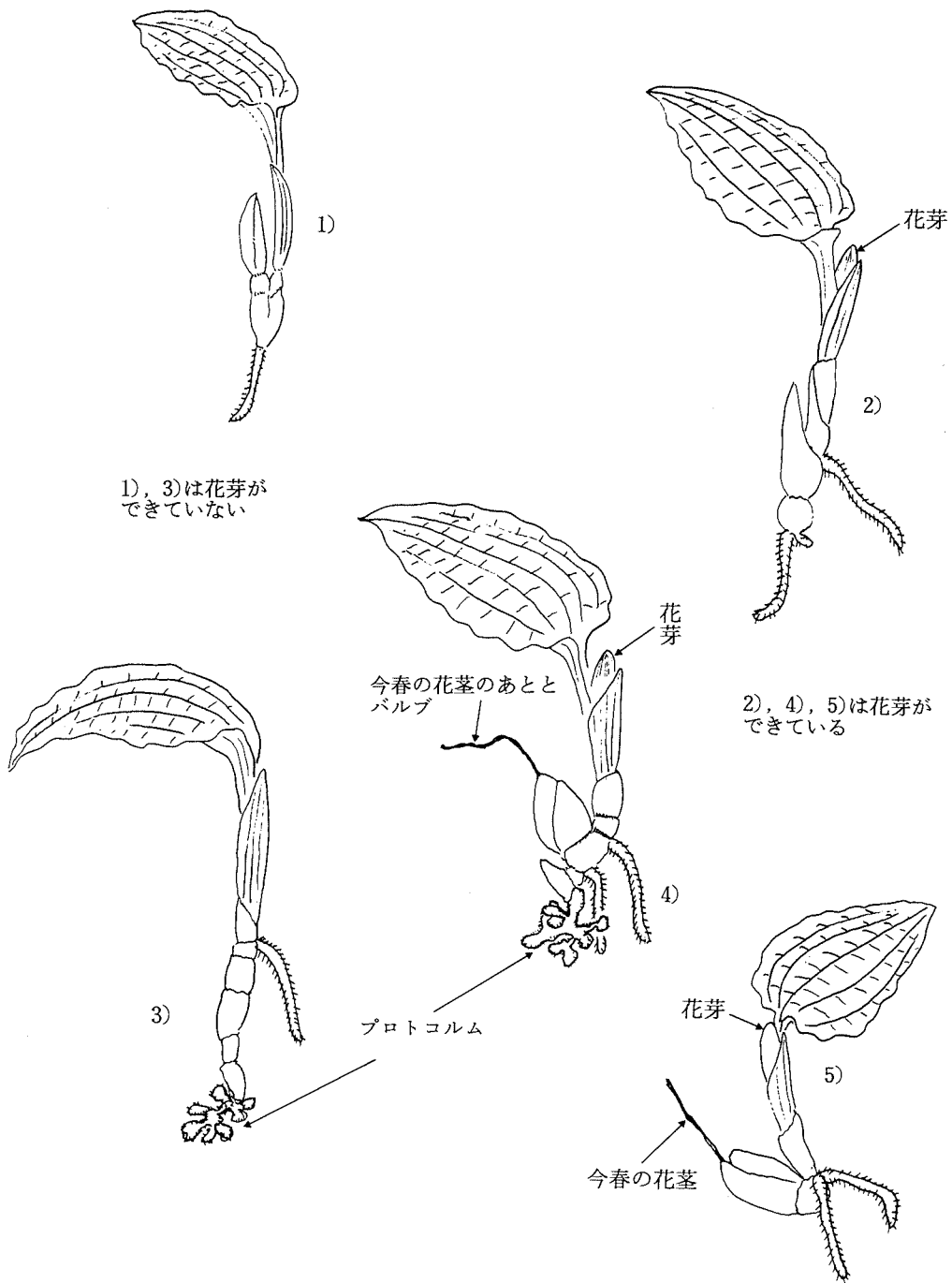


図5. 新葉展開直後の株のスケッチ



写真99 コケイラン

コケイラン

99. 1982年6月中旬。青森市。

葉が笹に似ていてエビネのようにバルブ（まりんけい偽鱗茎）がある。ササエビネともいわれる。淡黄の小花を多くつけるので気づきやすいが、個々の花は地味である。湿り気のある海岸の雑木林から、ヒバ・ブナ山地の沢ぞいまで腐しよく質なところに生える。青森県内、普通に見られる。



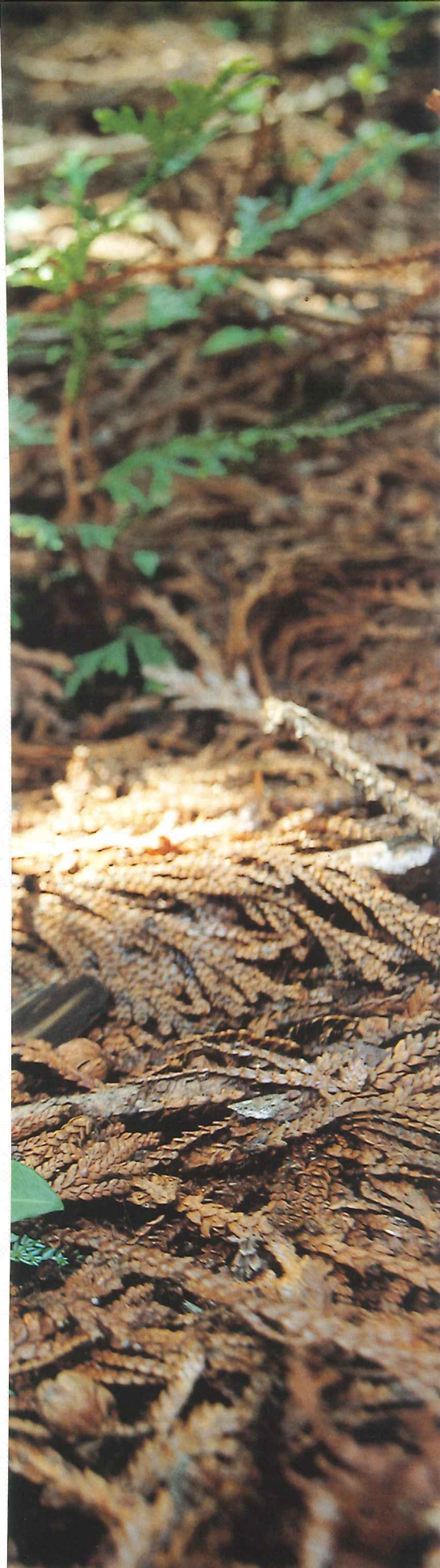
写真100 ヒトツボクロ

ヒトツボクロ

100. 1984年6月中旬。西津軽郡岩崎村。

青森県内では日本海側にかたよって分布する。村井三郎氏の報告以来、十二湖が古くから産地として知られている。津軽半島突端の三厩村からも見つかっている。とにかく撮影しにくい植物だ。花が小さく、さえない黄緑色、しかも下を向いて咲き、細く長い花茎が風にたえず揺れるからである。やっとのことで撮ったのがこの写真。被写体としてつまらない花といえど本種もその一つで、どうひいきめにみても美しいといえないし、面白いともいえないランである。





イチヨウラン

101. 1986年6月上旬。青森市。

一葉蘭の意である。ヒメホテイラン同様、ブナ・ヒバ混交林に多い。花に気品がありヒメホテイランがヒバ林のお姫様なら、イチヨウランは王子様といったところ。10本ぐらいかたまっていることもあるが、通常は1本ずつまばらに点在している。花をよく見ると、花卉の斑点は濃淡に個体差がある。

本種も栽培はむずかしい。お姫様（ヒメホテイラン）も王子様（イチヨウラン）もおとぎの国の森の精、山でお会いするのがふさわしいのであろう。

◆メ モ ヒバ林にランが多いのは前に述べた。ヒバ林といっても、ヒバ純林は暗すぎて種類に限られる。むしろ、ブナ、ミズナラ、カエデなどの落葉樹との混交林が変化に富んでいる。



写真102 コイチヨウラン

コイチヨウラン

102. 1985年8月中旬。八甲田山。

ブナ帯から亜高山針葉樹林に生える。草丈15~20cm、夏咲きである。県内広く分布し、小群落をつくることがある。汗をかきかき山道を登り、この花に出会うと、まずは一服したくなる。細い花茎をやっと持ちあげるようにしてかれんな小花を2~3付ける。その頼りなさが人をひきつけるのだろうか、そんなムードが漂う。



写真103 ヤチラン

ヤチラン

103. 1982年8月下旬。八甲田山。

104. 1988年7月下旬。八甲田山。

高層湿原のミズゴケに生える最も小型のラン。丈の高さ5～10cmで、径3mmぐらいの緑の小花を多数付ける。唇弁を上にして咲く。まれに葉の先端にムカゴをつくる。青森県内では八甲田のミズゴケ湿原に、ごくまれに見られる。



写真104 ヤチラン 花



写真105 サワラン

サワラン (アサヒラン)

105. 1982年7月。八甲田山。

海岸から亜高山帯の湿地に生える。花は鮮やかな紅紫色で、うつ向きかげんに半開する。以前は県内各地に見られたが、開発や盗掘から、現在では八甲田山、岩木山、津軽半島などのごく一部に残るだけとなってしまった。



写真106 クモキリソウ

クモキリソウ

106. 1986年7月中旬。青森市。

107. 1988年7月中旬。青森市。

(葯帽が開き、花粉塊がこぼれている)

名は蜘蛛散草くもちりそうのなまったものといわれる。低山からブナ林まで県内広く分布する。草体にくらべて花が小さく緑色、しかも唇弁がまくれるので見栄えがしない。開花と同時に葯帽が開き、花粉塊がこぼれ自家受粉する。同じような場所にスズムシソウ、セイタカスズムシソウも生えるが葉だけでは区別しにくい。しかし低山でこの仲間を見たら、多くはクモキリソウであると思ってよい。

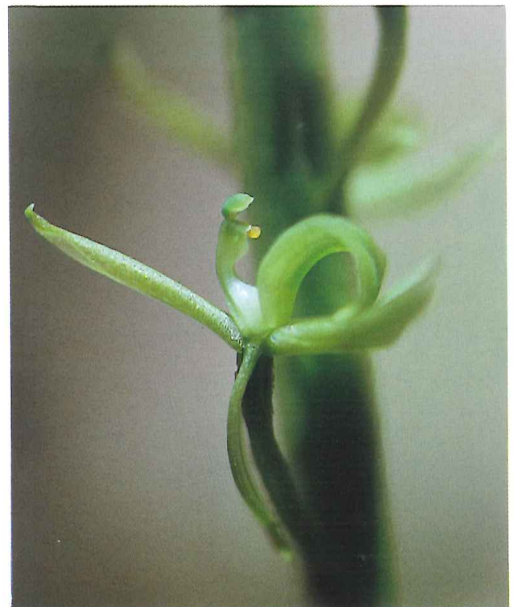


写真107 花粉がこぼれ、自家受粉している



写真108 スズムシソウ

スズムシソウ(スズムシラン)

108. 1986年6月上旬。東津軽郡三厩村。

山地の林に生える。名は花の形が昆虫の鈴虫の羽に似ていることによる。近畿から四国、九州に分布するキツネノマゴ科の草に、同名のスズムシソウがあるので本種をスズムシランともいう。この仲間では花が大きく、葉を展開しながら咲くので、山草家に人気が高い。山では意外に地味で、また他の植物に隠れて気がつきにくい。県内広く分布するがまれ。



写真109 セイタカスズムシソウ

セイタカスズムシソウ

109. 1982年7月上旬。西津軽郡深浦町。

スズムシソウによく似ている。生育環境もほぼ同じで葉だけでは区別しにくい。スズムシソウとの違いは、第一に背丈の割に花が小さいことである。唇弁の脈もはっきりせず、縁がうしろに軽くまくれる。また花期が約1か月遅いこと、葉が開いてから花が咲くことなどがあげられる。県内広く分布するがまれである。



写真110 フガクスズムシ

フガクスズムシ

110. 1982年6月下旬。奥入瀬。

111. 1982年7月上旬。奥入瀬。(着生状況)

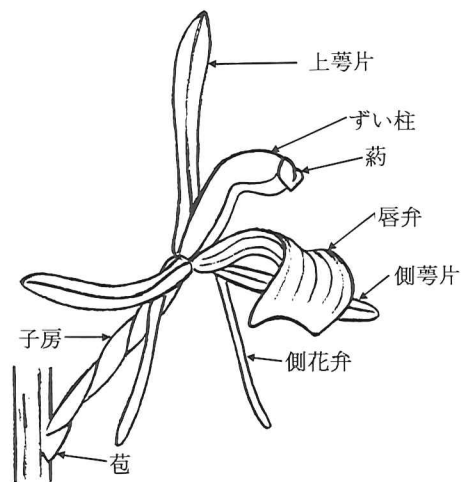


図6. フガクスズムシ



写真111 フガクスズムシの着生状況

山地のブナ巨木や岩上にミヤマノキシノブ、ホテイシダなどと着生する。スズムシソウよりやや小型である。本種の分布は初め富士山を中心とした地域に限られていると考えられていたが、意外に広く分布していることが分かってきた。十和田・八甲田山系、白神山地、津軽・下北両半島に見られる。写真111はブナの巨木地上6～7mのところに着生していたもの（約100株ある）。

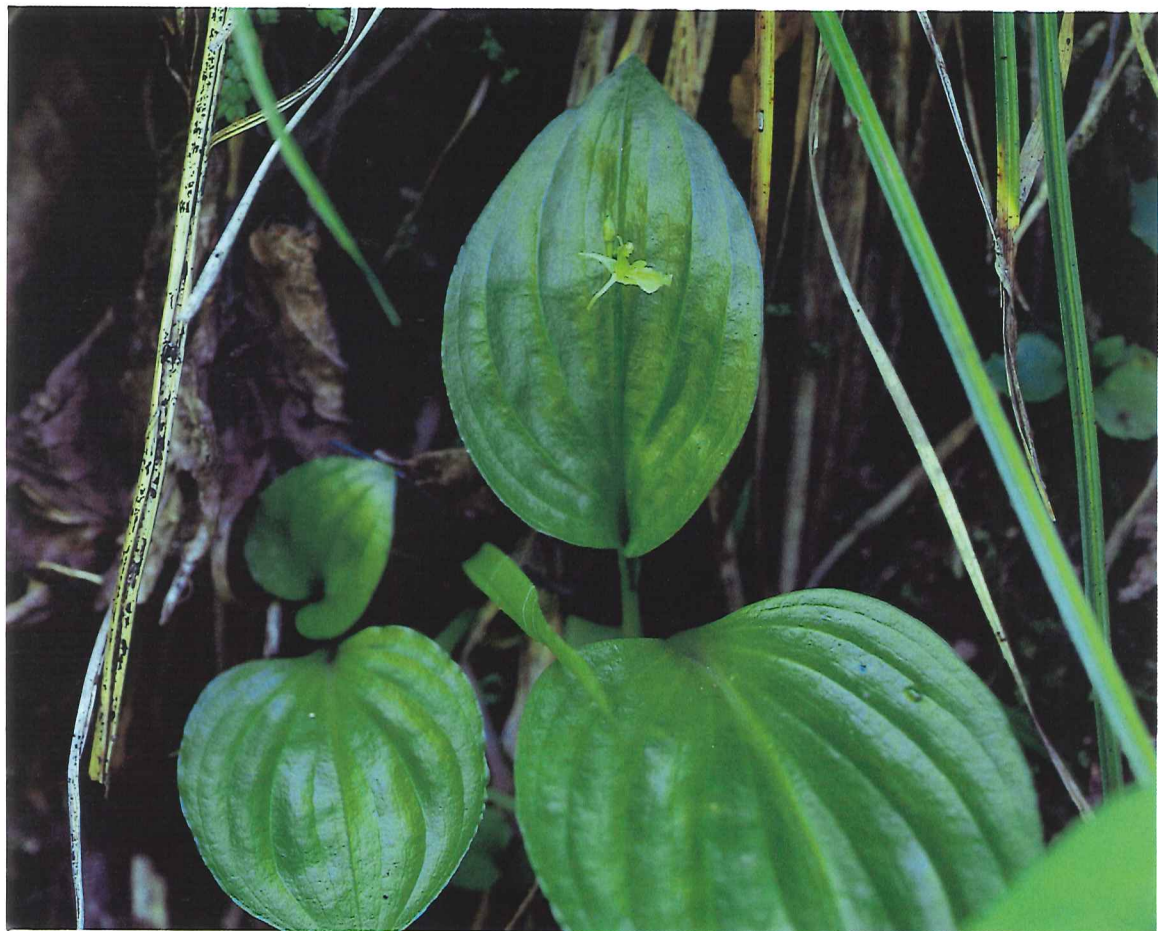


写真112 キボウシラン

キボウシラン

- 112. 1985年7月下旬。北津軽郡小泊村。
- 113. 1984年9月中旬。北津軽郡小泊村。
- 114. 1988年7月下旬。植栽。

名は葉がユリ科のギボウシに似ていることによる。ギボウシランは全国的にもまれである。県内ではヒバ林に見られるが非常にまれ。写真112は津軽半島のもの。

花は地味な黄緑一色で、唇弁中央の暗紫色の帯状着色を欠くのが基本種と異なっている。



写真113 キボウシラン 子房が膨らんだ状態

ギボウシランもクモキリソウ同様、開花後すぐ葯帽が開き、容易に自家受粉をするようである。(写真114)。なお、この写真のものは、暗紫色の着色が唇弁のノドに残っている。



写真114 自家受粉している写真



写真115 シガバチソウ

シガバチソウ

115. 1983年6月下旬。東津軽郡蟹田町。

116. 1983年6月下旬。東津軽郡

やや小型のランである。茶色い筋のある唇弁が半透明のように見え、やせているのでシガバチの羽にたとえたもの。ブナ・ヒバ混交林に普通。2～3本ずつ生えることが多い。葉はこの仲間のなかでは小ぶりで先がとがり、網状脈が著しいので、花がなくとも区別できる。花が緑一色のものを、アオシガバチとして分けることもある。



写真116 シガバチソウ (アオジガバチ)





サルメンエビネ

117. 1985年6月上旬。東津軽郡三厩村。

赤褐色のひだをつけた特徴ある唇弁を、猿の顔に見立てての名である。県内産エビネでは最も大型、強壯。5月下旬新葉の展開とともに花茎を伸ばし、まばらに花を咲かせる。エビネのように大きな群落はつくらない。寒地性エビネで関東から西では標高800m前後の深山に産するという。青森県では海岸の雑木林からヒバ・ブナ林まで普通。しかし最近は大乱掘により、めっきり数が少なくなった。まれに黄花品（萼片、花卉がすべて黄色っぽい）がある。六ヶ所村の吉崎竹次郎氏は、白花品（萼片、側花卉とも黄色っぽく、唇弁は基部を除いてほぼ純白）を見たことがあるという。

◆メ モ 素心とシロバナ

園芸界では古くから東洋ランを中心に、唇弁の色素の抜けたものを素心そしんと呼び珍重してきた。素心といっても、品種によって色素の残るものから、ほぼ完全に抜けたものまでいろいろ段階がある。園芸家はこれらを一括してシロバナともいうので、混同されるが植物学上の定義ではない。





写真119 ナツエビネの花

ナツエビネ

118. 1985年8月中旬。東津軽郡蟹田町。
119. 1988年8月中旬。東津軽郡蟹田町。

夏に咲くのでナツエビネの名がある。葉がほぼ開いた7月中～下旬、頭をたれながら花茎を伸ばし、開花が進むとほぼ直立する。側花弁が白っぽく唇弁が淡紫色で、すがすがしい感じをうける。距はない。花がなければエビネとまぎらわしいが、葉の色がやや薄く縦のしわが深いこと、葉柄の基部が広く葉が4～5枚あることから、見なれると区別できる。津軽・下北両半島、西海岸（日本海側）地方で見られる。ただし自生地は限られている。

◆メ モ 葉の裏側に毛の多いのが奥尻島にあり、オクシリエビネとして区別される。県内で私はまだ見ていない。





写真121 キンセイラン

キンセイラン

120. 1986年7月中旬。東津軽郡蓬田村。
121. 1986年7月中旬。青森市。

寒地系エビネで夏咲きである。全体に小型で葉は細長く4～5枚、しわも深い。6月頃より細い花茎を斜に伸ばし、7月中旬に香りのある淡黄緑色の花をまばらに咲かせる。山草家に好まれるようだが、山での姿は地味である。津軽・下北両半島のブナ・ヒバ混交林に分布する。ややまれなものに属する。





エビネ

122. 1986年6月上旬。北津軽郡市浦村。

県内、低山帯の雑木林に普通。ヒバ林にも生えている。花は茶色っぽい萼片と白っぽい唇弁で派手さはないが、花の色は生育地によっ変化が見られる。県内産のエビネ属のなかでは花数が一番多い。しばしば群生する。

◆メ モ 青森周辺でのエビネ属の花期は、サルメンエビネ（5月中旬～下旬）、エビネ（6月上旬）、キンセイラン（7月上旬）、ナツエビネ（8月中旬）の順となる。



写真123 イシヅチ(その1)

イシヅチラン(イシヅチ)

- 123.(その1) 1983年5月下旬。上北郡六ヶ所村。(植栽)
- 124.(その2) 1985年6月上旬。三戸郡田子町。(植栽)
- 125.(その3) 1987年6月上旬。三戸郡田子町。(植栽)
- 126.(その4) 1988年5月下旬。青森市。(植栽)
- 127.(その5) 1988年5月下旬。青森市。(植栽)

エビネとサルメンエビネの自然交雑種と考えられるものである。最初愛媛県の石鎚山で発見されたのでイシヅチの名がある。中裂片が大きくその縁は軽く波をうち、短い距のあるのが特徴。個体により唇弁の赤味に微妙な変化がある。青森県内でもごくまれに見られるが、どういわけか上北郡六ヶ所村周辺からの採品が多い。



写真124 イシツチ (その2)

今回自生の姿を写真にできなかったので、六ヶ所村産の植栽品を紹介する。それぞれ変化のある赤味をおびた唇弁が美しい。



写真125 イシツチ (その3)

県内での初見地は上北郡六ヶ所村と思う。吉崎竹次郎氏は1971年(昭和46年)、自宅近くの海辺マツ・雑木の林でエビネ・サルメンエビネの混生地に見つけた(写真123)。翌1972年には海拔約200mのヒバ林でも見つけている(写真127)。しかし、変わったエビネの評判とともにマニアが殺到、周辺の山が徹底的に荒されたのを嘆いておられた。



写真126 イシツチ (その4)



写真127 イシツチ (その5)





サイハイラン

128. 1982年6月。東津軽郡蟹田町。

花が武将の使った采配に似ているので、この名がある。花は細長くあまり開かない。さえない紫紅色で、ぶら下がったように咲くのであまり見栄えがしない。しかし少し背が高くなるので初夏の雑木林に、多少の風情をそえる。葉は開花の前後より枯れはじめて休眠に入る。9月末頃より新しい葉を伸ばしバルブが作られる。海岸の雑木林からブナ林まで、湿り気のあるところに生え県内広く分布する。深山にはほとんど見かけない。





写真130 トケンラン 花

トケンラン

129. 1985年6月上旬。西津軽郡車力村。
130. 1985年6月上旬。西津軽郡車力村。

1935年（昭和10年）、村井三郎氏らが十二湖付近で初記録してからのち、青森県内では見られなかった植物である。今回の調査・撮影で上北郡六ヶ所村、七戸町、西郡車力村、岩崎村に自生を知った。写真は車力村のもの。基本種に比べて萼片と花卉に紫の斑点がない。フナシトケンランと呼ぶ品種にあたる。六ヶ所村のものは何年待っても開花せず、まだ花の写真は撮っていないが、こちらは葉の裏に紫の斑紋がない。



写真131 シュンラン

シュンラン

131. 1986年5月。西津軽郡平内町。

春に咲くランの意味である。早春の雑木林にひっそりと咲くシュンランを見ると、「ああ、今年も春だなあ」と心がうきうきする。古くから「東洋蘭」として、古典園芸の代表でもある。別名のホクロは唇弁のしみ状斑点を、顔のホクロに見立てたもの。海岸の雑木林からブナ・ヒバ混交林まで広く分布する。低山の松や雑木林の乾き気味の斜面に多い。青森県内最も普通。

◆メ モ 蘭とふじばかま

秋風起兮白雲飛

草木黄落兮雁南帰

蘭有秀兮菊有芳

懐佳人兮不能忘

.....

秋風^{しゅうふう}起こりて 白雲飛び

草木^{こうらく}黄落して 雁^{かり}南に帰る

蘭^{はな}に秀あり 菊^{かんば}に芳しきあり

佳人^{かじん}を懐^{おも}いて 忘る^{あた}る能わず

.....

上の詩は漢・武帝（前156～前87）の有名な“秋風の辞”の前半である。この詩の第三句の「蘭」とはフジバカマのことだという。現在わが国で蘭といえば、いわゆる洋ラン、東洋ランなどのラン科植物をさすのが普通だが、漢名の蘭草は古来キク科のフジバカマのことであった。フジバカマは中国原産で、もむと香氣（クマリン）があり、中国では香草として重用された。わが国には奈良時代に渡来し帰化したものと考えられている。古くは『源氏物語』“藤袴の巻”などに見られるように、わが国でも蘭はフジバカマであった。

その他

私たちはまだ見ていないが、これから本県に見つかる可能性のあるものをあげてみたい。

キバナノアツモリソウ、サギソウ、オオミズトンボ、カモメラン、ヒロハトンボソウ、アオキラン等である。

ランの花の基礎知識



ハクウンラン(青森市)

本書を読まれる方への参考として、ランの花の構造、受粉、繁殖などについて簡単に述べてみます。

花式図

花の構造が一目で分かるように、図（断面の平面図）にしたのが花式図である。花式図は萼片を斜線、花びらを黒ぬり、おしべは葯の断面、めしべは子房の断面であわらすのが普通。単子葉植物のラン科は基本が3数からなっている。ここではより分かりやすくするため、花が180度ねじれた状態とし、苞（ほう）も書いてみた。

日本のラン科植物はその構造の違いから、アツモリソウ亜科（本来、内輪3個・外輪3個、計6個あったおしべが退化し、内輪おしべが2個残る）と、ラン亜科（外輪おしべが1個残る）に分けられる。アツモリソウ亜科で青森県に生育しているのは、クマガイソウ、アツモリソウ、コアツモリソウの3種だけで、その他はすべてラン亜科に属する。

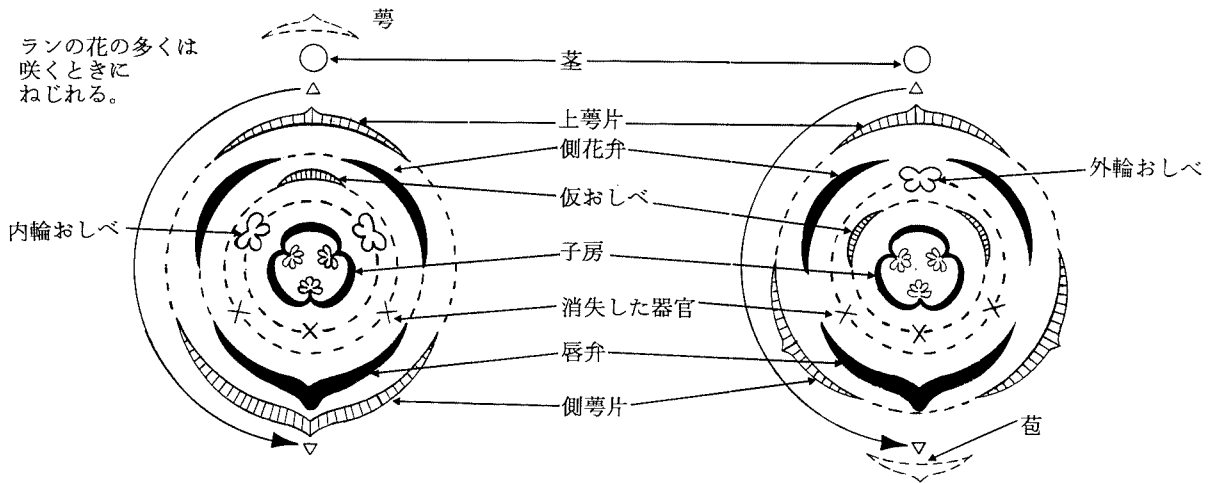


図7. アツモリソウ亜科

図8. ラン亜科

花の部分名称

アツモリソウ亜科の代表としてクマガイソウを、ラン亜科ではエビネ属のイヅチ及びシュスラン属のミヤマウズラをシェーマで示し、説明する。

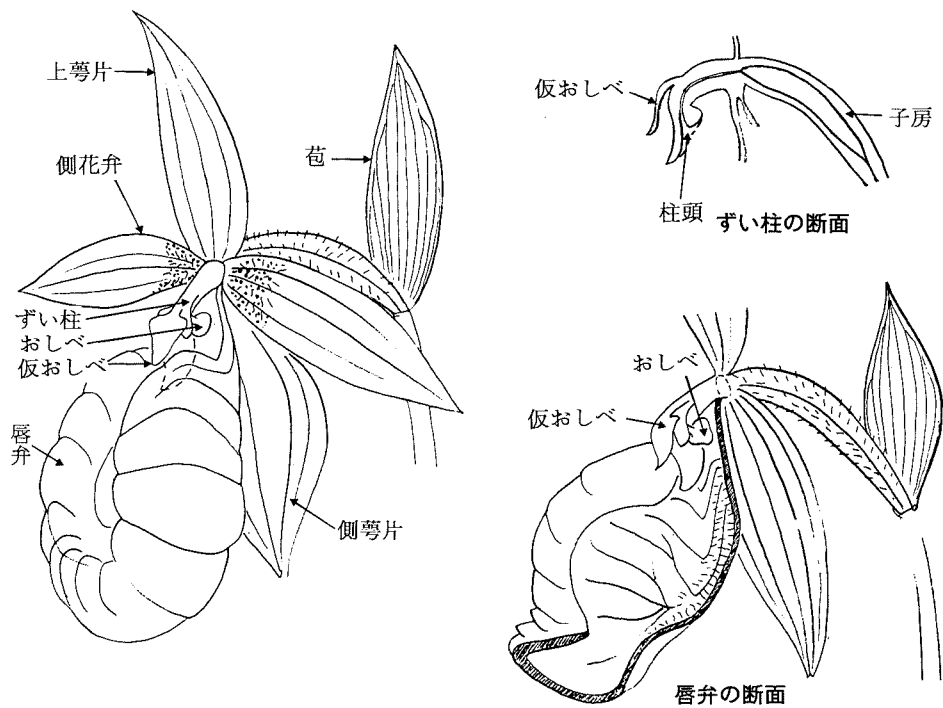


図9. クマガイソウの花

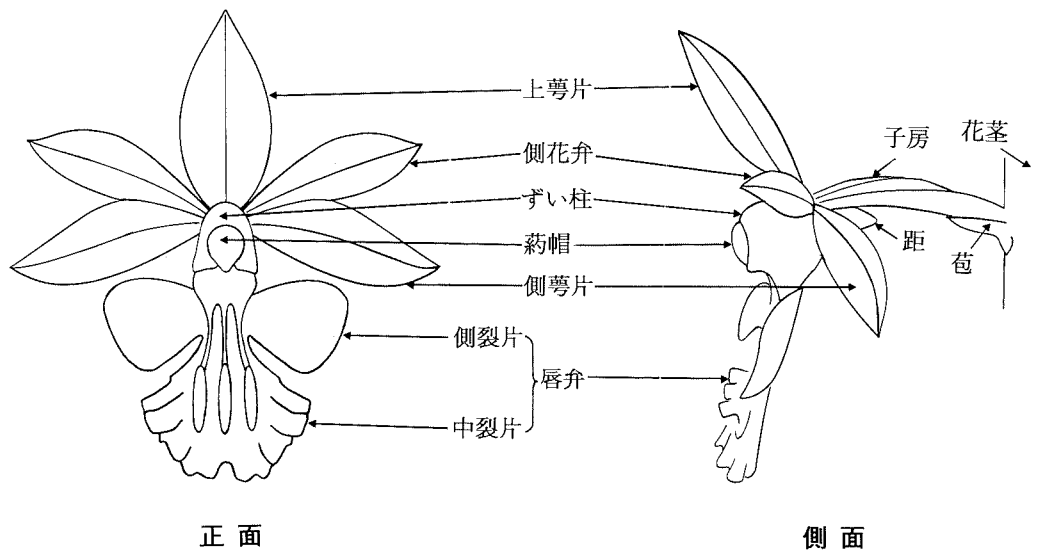


図10. イシヅチの花

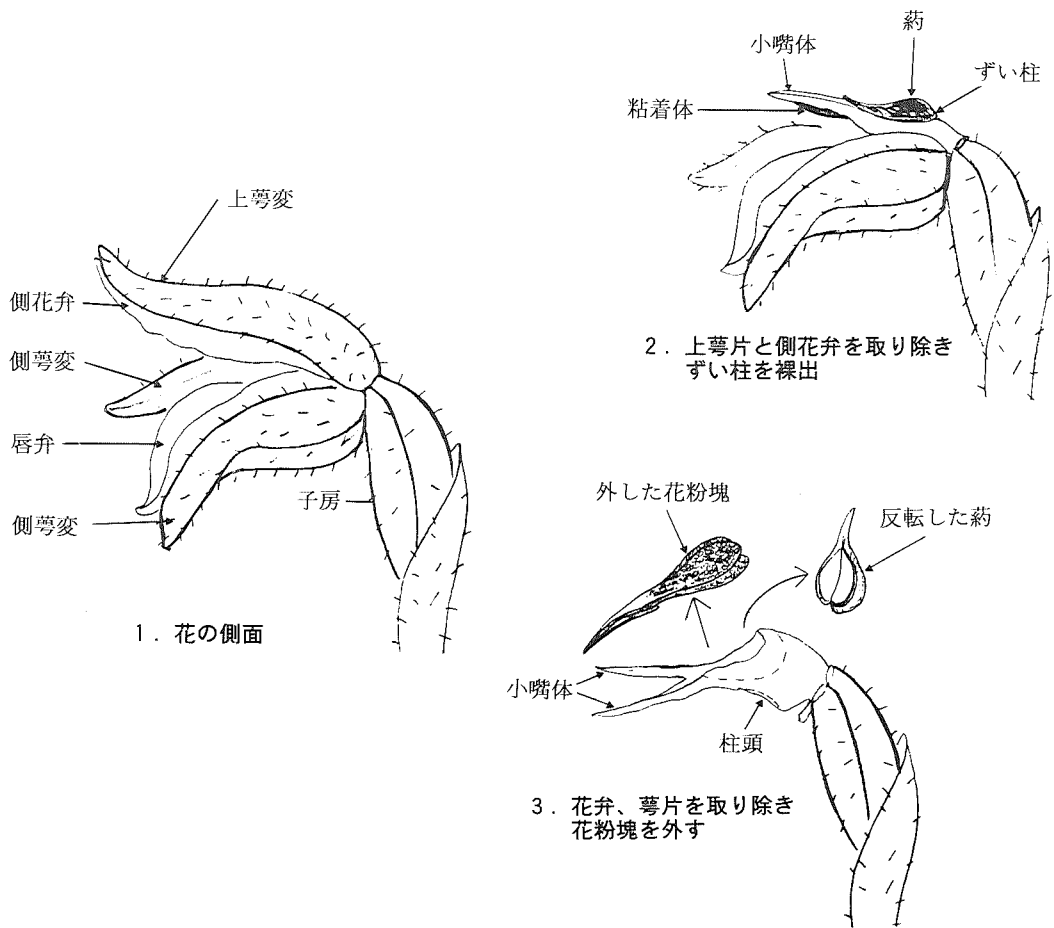


図11. ミヤマウズラの花

花弁と萼片

花弁（かべん；はなびら）は3枚、萼片（がくへん）も3枚で、内・外輪となり交互にならんでいる。このなかで萼片と2枚の花弁はほぼ同じ形だが、下にくる花弁は特に拡大、変形していることが多い。これを唇弁（しんべん）という。もっとも目立つ部分で、ランの花の美しさは唇弁の変化に尽きるといえる。

距

唇弁の基部が後方へ管状に伸びたものを距（きょ）という。ランは距を持つものが多い。蜜を蓄え香りを出し、昆虫を呼んで受粉を促すためのものといわれている。距は種によりその形や長さが一定している。訪花虫への適応と考えられ、また種の区別にも重要な部分となっている。

ずい柱

ランの生殖器官は普通の植物とは異なり、おしべとめしべが結びついて、ひとつの柱となっている。この器官をずい柱（蕊柱、ずいちゅう）という。ラン亜科の場合、ずい柱先端の上面に葯（やく；花粉ぶくろ）があり、下面には柱頭（ちゅうとう；めしべの先端にあたり花粉を受ける部分）がある。

葯はふつう2室で、一般には固く結合した花粉塊（かふんかい）を各室に1～4個入れる。エビネ類ではシャモジ状の花粉塊4個が一对となり、計8個である。花粉塊には、虫の体に粘りつきやすいよう、粘着体（ねんちゃくたい）のあるものが多い。花粉塊と粘着体はしばしば花粉塊柄（かふんかいへい）でつながっている。ずい柱への葯のつき方、花粉塊の数とその形質は、ラン分類の重要な手がかりとなっている。

子房

花と茎とを結ぶ柄のようなふくらんでいる部分を子房（しぼう）といい、このなかで種子が成熟する。子房をよく見るとゆるくねじれている。ランの多くは花が咲くときに、つぼみの状態から180度ねじれて咲く。

苞

花のつけ根にある葉を苞（ほう）という。苞は小さく目立たないものから、葉のように大きいものまで、種類によってさまざまである。

その他の用語

その他の用語についても簡単に述べておく。

花茎（かけい）、花軸（かじく）

花のつく枝（軸）のこと。

花序（かじょう）

花軸上の花の配列状態。

仮雄ずい（かゆうずい）

おしべが発達せず痕跡的となったもの（仮おしべとも）。ミズトンボ属やツレサギソウ属でははっきりしているが、退化または消失している種類が多い。

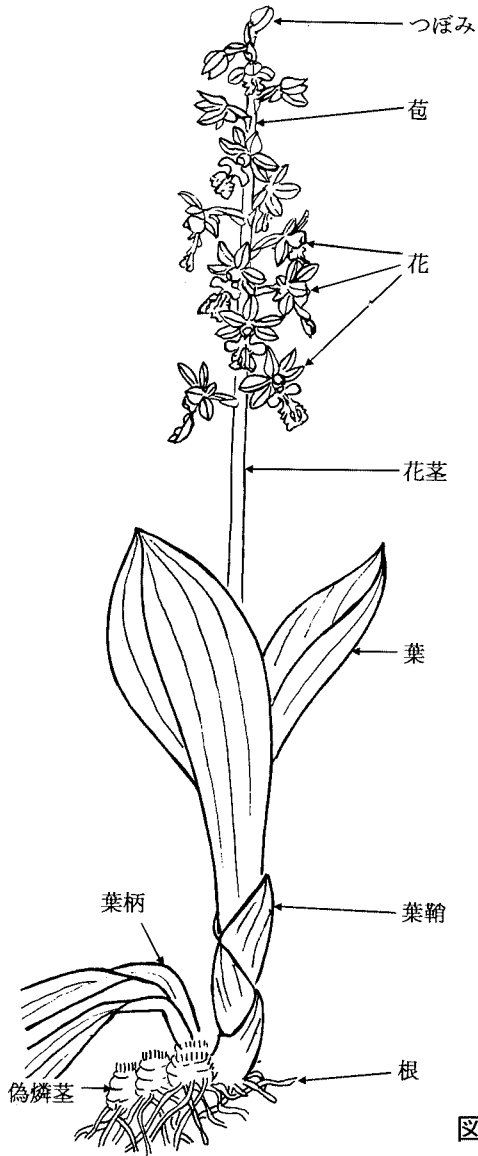


図12. イ シ ヅ チ

偽鱗茎 (ぎりんけい)

茎の多肉質の枝のこと。俗にバルブとも。

根 茎 (こんけい)

一見根のようで、地上をはうか地中にある茎をいう。

小嘴体（しょうしたい）

ずい柱の前面に突出した部分。3個ある柱頭のうち、1個が発達せず変形したものと考えられている。分類上重要視されるが、ほとんど退化・消失しているものもある。

葯隔（やくかく）

二分する葯の接合部のこと。ミズトンボやキソチドリでは広い葯隔がみられる。

葯帽（やくぼう）

葯が落ちやすい帽子状になったものをいう。

葉鞘（ようしょう）

葉柄あるいはその下部で、茎を包む葉。

葉柄（ようへい）

葉の一部で、茎に接する細い部分。

受粉について

ランは虫媒花である。今これをイシヅチの図で説明する。自然界では、虫（花により訪花虫は決まっていると考えられている。昆虫の蜂や蛾があげられている）が蜜を吸うとき、その頭が葯にふれてこれをはね、花粉塊の粘着体が昆虫の体に付く。そして昆虫が次の花に移動して蜜を吸うとき、花粉塊が柱頭にふれ受粉する。一般にランの花の構造は、自家受粉を避けるようにできていて、単子葉植物のなかではもっとも進化した植物の一つと考えられている。

ただ例外もある。クモキリソウやギボウシランは開花と同時に葯帽が開き、花粉塊がこぼれて自家受粉を終えている。フタバランは開花時既に子房が膨らんでいる。多くの種類は、虫により交配（自家受粉、他家受粉共）されるのであろう。しかしよく観察すれば、虫によらず自家受粉するものもあるものと思う。

人工的に受粉するには、ツマヨウジで葯をはね花粉塊を取り出して柱頭につければよい。自家受粉より他家受粉の方が成功率が高いという。受精が成立すれば2～3日で子房が膨らんでくる。ただし完熟種子が得られるとは限らない。成熟できず腐ることも多く、また見かけ上子房が膨らんでも不稔がある。

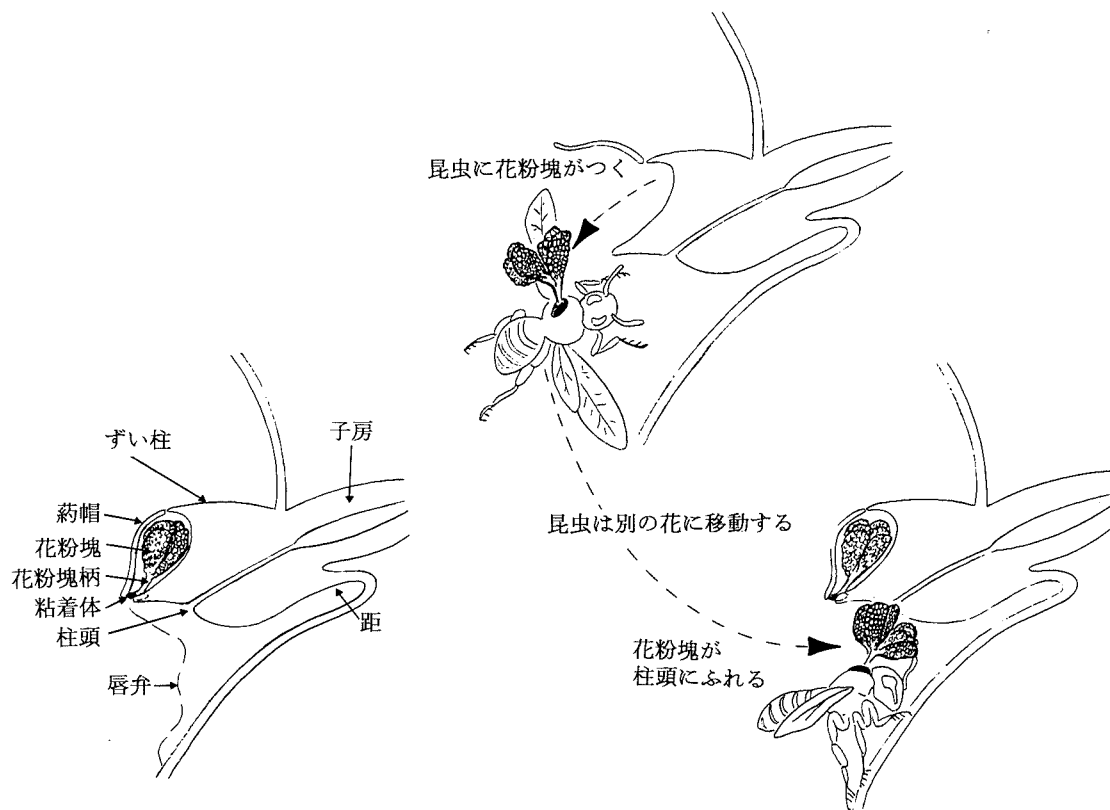


図13. 受粉のしくみ

ランの繁殖

ランの繁殖は、他の多年草と同じく種子による有性繁殖と、植物体の一部が分裂する無性繁殖（栄養繁殖）とによる。自生地を観察してみると、無性繁殖は特別の好条件にでもならないかぎり現状維持である。つまり増えもしないし、減りもしないのである。従って人間が採集すれば、その分だけ減るわけ。

一方ランの種子はホコリのように細かく、一果実の中に多くの種子が入っている。しかし胚乳（はいにゅう）がないため自らは発芽できず、ラン菌が共生して初めて発芽することが知られている。即ちラン菌がないと発芽できず、多量にできる種子のわりにはたいへん発芽効率が悪いのである。また、どういう種類の菌がどの種類のランと共生するのか、詳しいことはよく分かっていない。

◆メモ ランの種子は種皮といわれる一層の細胞（鞘）のなかに、発芽の原点となる胚があるだけの簡単な構造である。養分となる胚乳はない。



図15. ヒメホテイランの種子の顕微鏡写真



図14. ヒメホテイランの果実と種子

花と山のガイド



リンネソウ(八甲田山)

野の花・山の花を訪ねてみたいとは、多くの人
がいただいていると思います。ここでは県内の花の山を
いくつかとりあげてみました。自生地を自分の力で
探しあてるのは嬉しいことですし、再び訪れるとき
は恋人に会うような胸の高まりを覚えます。そして、
「今年も咲いているな」と確かめたときに、満足感
は最高となるでしょう。

津軽半島の山

眺望山

●ヒバ林ハイキングコース

県民の森・眺望山（ちょうぼうさん・143m）は、ヒバ（ヒノキアスナロ）の学術参考林があり、森林浴の山として親しまれてきた。眺望山へは、青森市中心部から国道280号線を車で30分ほど北上し、おくない駅の北150mで左折する（県道・屏風山・内真部線）。T字路には“眺望山自然休養林・県民の森”の道柱がある。しかし案内の矢板が脱落しているので分かりにくい。“金木へ21km”の道標を目標とするとよい。踏切を渡り直進、10分（約5.4km）で東登山口である酉家戸（とりげど）駐車場に着く。

初めての人はこちらから登る。眺望山は登山というよりも、家族ハイキングの山といえよう。道はゆるい上りの一本道、よく整備されていて迷うことはない。ヒバ、スギ、ホオノキ、ミズナラ、ナナカマド、クリ、ハクウンボク、ヒメアオキ、マルバマンサクなどの木々に説明板があり、これらを眺めながら進むと40分で展望台のある143mのピーク（真のピークは北東約150mにある。162m）に着く。つい最近まではあずま屋もあったが、雪でつぶれて今はない。

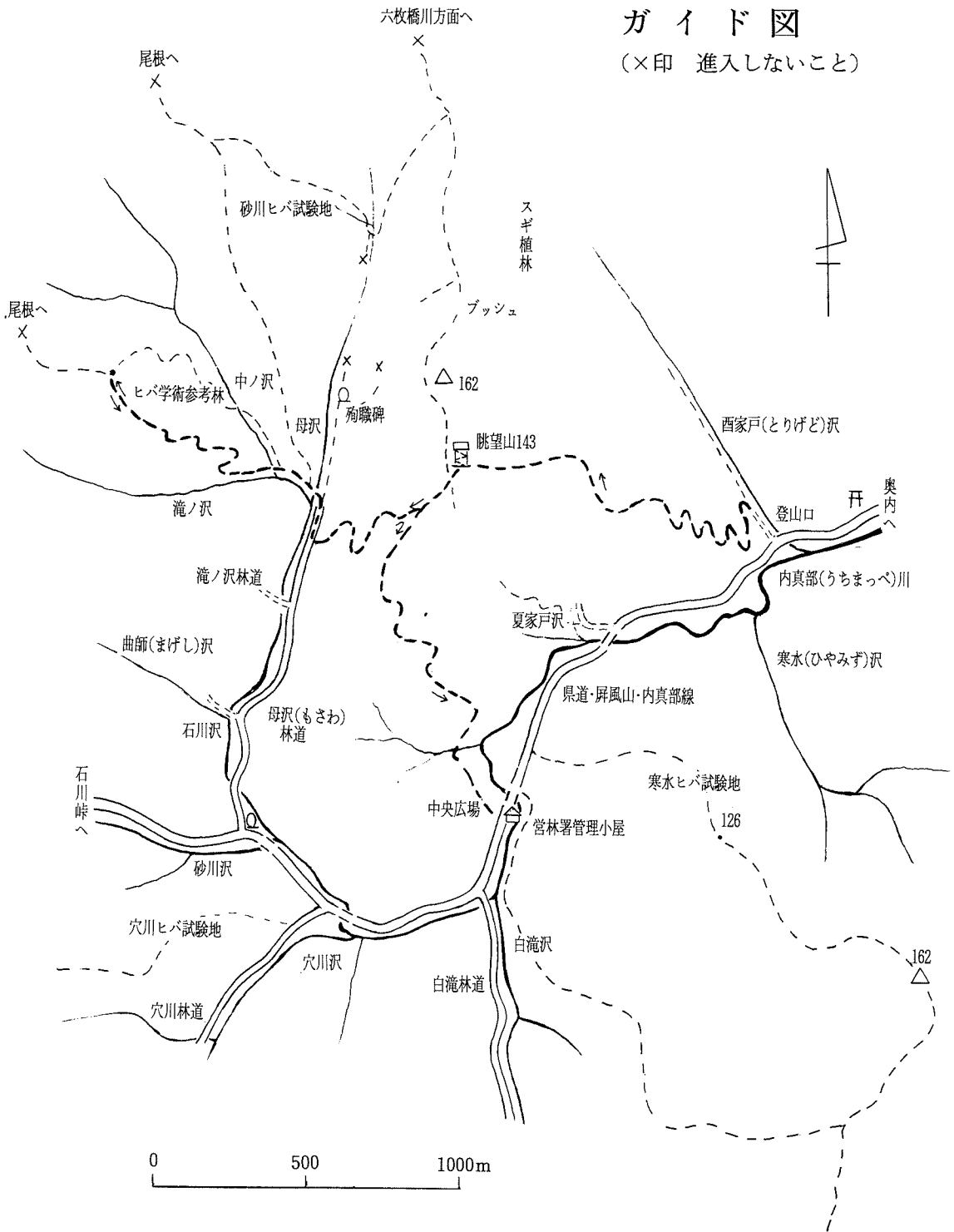
下山は営林署管理小屋のある中央広場へ向かう。3分ほどで砂川沢野営場（野営場は現在荒廃している）、ヒバ学術参考林への分岐がある。ここから学術参考林への見学には、往復50分ほどをみておこう。参考林からの帰りは母沢（もさわ）林道を通して県道へ抜けられる。初めての人はこちらの道を引返し、カラマツやヒノキの植林を見た方がよい。分岐より中央広場（中央登山口）には25分ほどで着く。ここから酉家戸登山口駐車場までは1.2km、歩いても20分たらずである。

眺望山の花は春に集中する。全山がかすむような木々の芽吹き、いっせいに咲いた早春の草花が目にもまばゆい。スマレサイシン、テリハタチツボスマレ、エゾエンゴサク、キクザキイチリンソウ、ヒョウノセンカタバミ、エンレイソウ、イワナン、ムラサキヤシオツツジ、ミズバショウ、ツバメオモト、シュンラン、イチヨウラン、ヒメホテイランなどが咲いている。ただここ数年、ヒメホテイラン、イチヨウランはよく注意しないと分からないほど失われたのは寂しい。

◆メモ 青森ヒバ林は、木曽ヒノキ、秋田スギと共に日本三大美林の一つである。ヒバは丈夫で腐りにくい。木肌も美しく独特の香り（ヒノキチオール）があり、最も優れた建築材の一つである。

眺望山 ガイド図

(×印 進入しないこと)



●眺望山から空沼へ

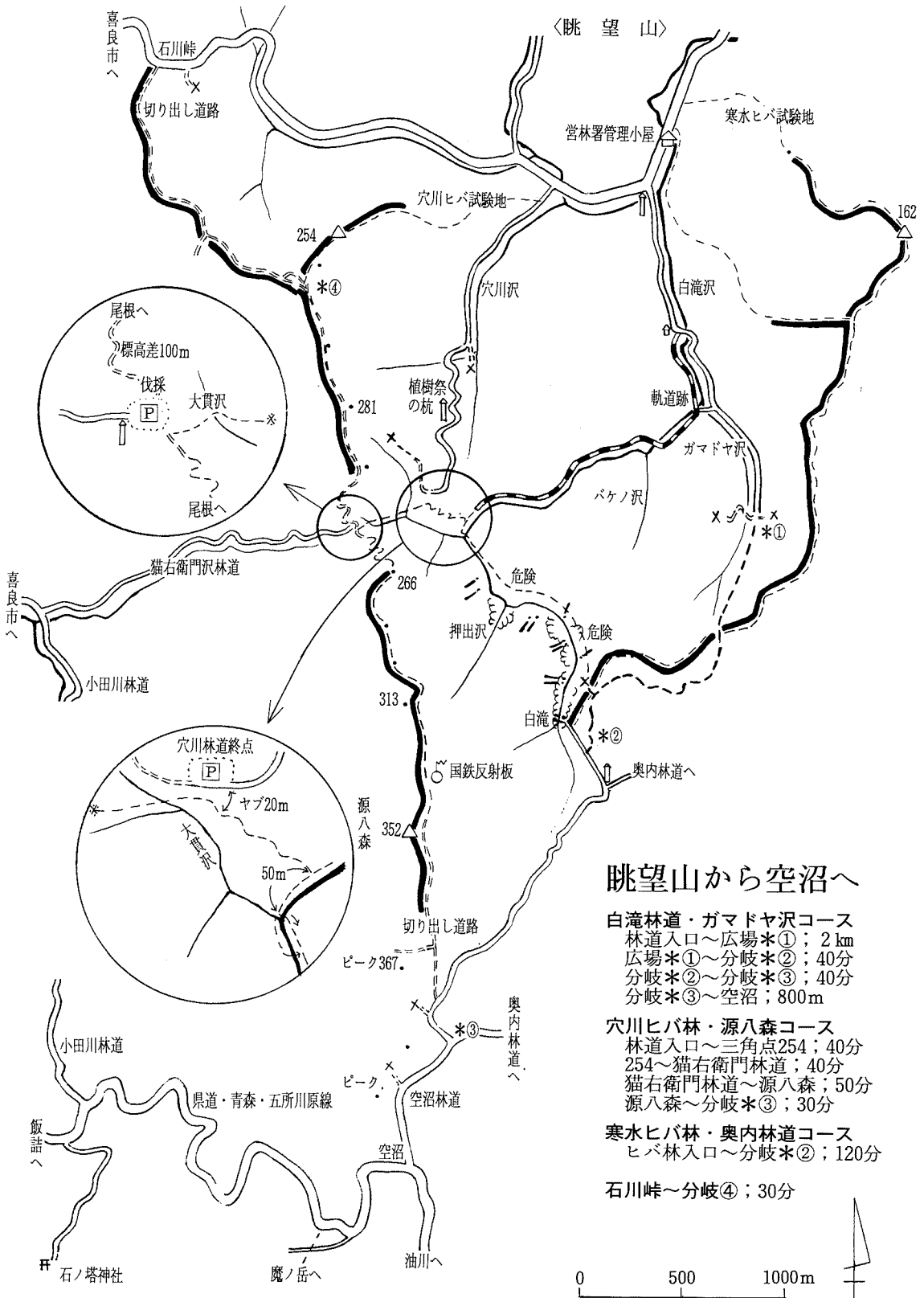
山歩きを趣味とする人にとって、山は高いことが魅力の一つである。しかし高いだけでは私にとって何か物足りない。フィトンチッドの香り、森林浴を満喫できることも大切と思う。眺望山とその周囲は、山は低いがヒバやブナの原生林がまだ残されている。青森市にも近く早春から晩秋までシーズンも長い。津軽半島の山・眺望山とその周囲は、私にとって最も好きな森林浴の山である。

眺望山から県道・あすなろライン（青森・五所川原線）の空沼（からぬま）へ抜けることができる。コースとしては寒水ヒバ林コース、白滝沢コース、ガマドヤ（蒲戸屋）沢コース、穴川ヒバ林コース、石川峠コースなどがある。案内板などはいっさいなく、分かりにくいところもあるので、ハイキングコースとはいえないかもしれない。しかし眺望山だけでは物足りない人や、パイオニア精神旺盛な人にとっては面白いコースばかりである。ここでは最も距離が短く分かりやすいガマドヤ沢コースを紹介してみたい。まずこのコースを一度歩き、他は各自で研究されるとよい。

眺望山中央広場から南200mに白滝沢林道がある。林道を2km進むと駐車スペースのあるガマドヤ沢の広場①に着く。向かって右手（西）が切り出し道、左手（東）は小さな沢となっている。歩道は真中にある。ブナ、ナラ、サワグルミ、トチノキ、ハウチワカエデなどのゆるい上りの林間を進む。10分でスギ植林となり、15分で尾根越えとなる。40分ほどで奥内林道の分岐②に出る。この林道の北側は200mで白滝峠の深いガケとなり行き止りとなっている（ブッシュの古い尾根道を20mほど下ると白滝が望まれる）。空沼へは林道を南に進む。一本道を40分で源八森分岐③に着く。ここから空沼までは空沼林道を800mである。

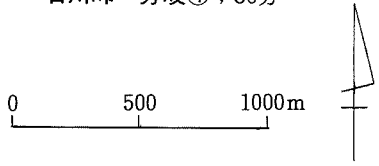
寒水ヒバ林コースは尾根コース。ピーク162（三角点はヤブを20mほど入る）からの展望もよい。縦走せず周遊してもよいし（中間に右折周遊路がある）、またガマドヤ沢林道に下りてもよい。白滝沢本流コースは溪谷と崖道のトラバースとなる。一番魅力あるコースだが、危険な場所が何か所かあるので、一般のハイカーは通り抜け禁止。穴川ヒバ林コースは穴川ヒバ試験地から入る。尾根縦走コースとして距離も手頃で面白い。ただピーク254手前のヒバ林が急峻なので注意を要する。

◆メモ ヒバ林には古い歩道がよく見られる。昔の山造りは択伐が中心で、すべて人手に頼っていたので作業歩道がよく発達したのであろう。しかし最近では機械力の導入で切り出し道が入り乱れている。古い歩道の多くは分かりにくくなっているため、深入りしないこと。



眺望山から空沼へ

- 白滝林道・ガマドヤ沢コース**
 林道入口～広場*①；2 km
 広場*①～分岐*②；40分
 分岐*②～分岐*③；40分
 分岐*③～空沼；800m
- 穴川ヒバ林・源八森コース**
 林道入口～三角点254；40分
 254～猫右衛門林道；40分
 猫右衛門林道～源八森；50分
 源八森～分岐*③；30分
- 寒水ヒバ林・奥内林道コース**
 ヒバ林入口～分岐*②；120分
- 石川峠～分岐*④；30分



梵珠山

津軽半島のつけ根で、中山山脈の南端にある梵珠山（ぼんじゅさん・468m）も県民の森である。梵珠山へは大釈迦コース、松倉神社コース、前田野目コース、縦走コースなどある。ここでは最もポピュラーな、大釈迦コースと松倉神社コースを述べる。

●大釈迦コース

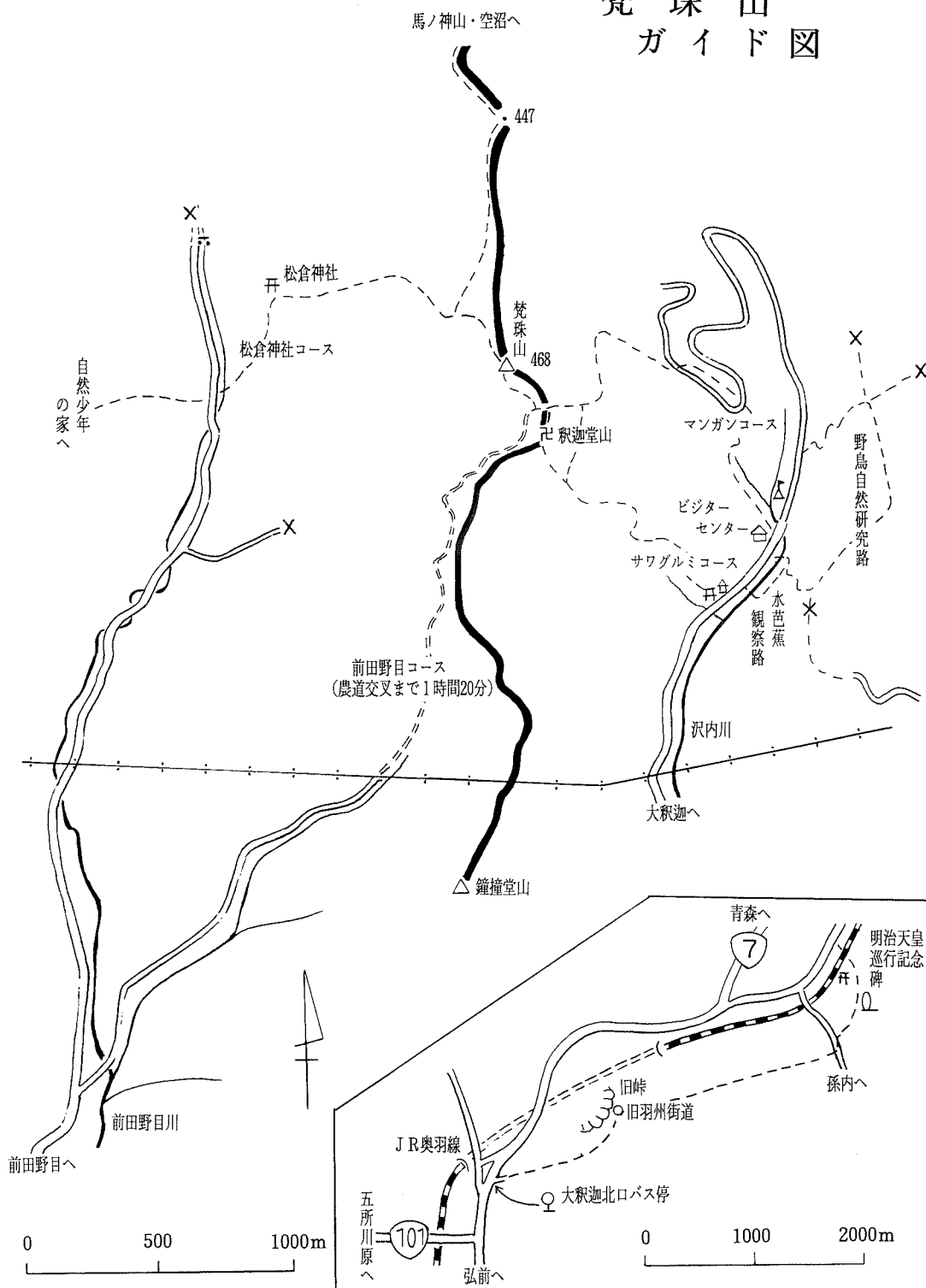
国道7号線大釈迦北口から入る。国道から登山口までは3.5kmあるが、車だと7～8分で着く。登山口には駐車場が完備し、ビジターセンターもあり学習遠足の生徒、家族連れのハイカーが絶えない。登山にはサワグルミ・マンガンの一周コースをすすめたい。

登りはサワグルミコースをとる。このコースはヒバが少なく、ブナ、ミズナラ、サワグルミ、ナナカマド、ヤマモミジなど落葉樹が多い。登山道は勾配がゆるく案内板もよく整備されている。子供の森にはすべり台とあずま屋があり、以前はキャンプ場も兼ねていた。ただキャンプ場はここではせまく不便なので、現在管理棟の奥に移された。60分ほどで釈迦堂山山頂に着く。釈迦堂山には避難小屋と祠がある。ここから梵珠山頂上へは、前田野目分岐をへて10分たらずである。頂上には展望台があり、陸奥湾から青森平野、八甲田山、さらに津軽平野、岩木山などが一望される。下山はマンガンコースをとるとよい。スギやマツの植林、またヒバも見られて変化がある。

梵珠山はいつ行ってもよいが、花を見るなら春に訪れるのが面白い。カタクリ、ミヤマキケマン、エゾエンゴサク、キバナイカリソウ、シラネアオイ、サンカヨウ、キクザキイチリンソウ、エンレイソウ、オオバキスミレ、スマレサイシン、テリハタチツボスミレ、ヒョウノセンカタバミ、ネコノメソウ、ミズバショウ、ムラサキヤンオツツジ、オオヤマザクラ、タムシバナなどが咲き乱れ、長かった雪国の冬を忘れさせる。ランではシュンラン、イチヨウラン、コケイラン、エビネ、サイハイラン、アケボノシュスラン、ミヤマウズラ、ジンバイソウなどが生えている。山菜のニリンソウ（方言ふくべら）やモミジガサ（しどけ）も見られるが、猛毒のオクトリカブト（ぶししどけ）が沢山あるので、注意したい。

以上のコースのほかに、昭和60年から野鳥自然研究路がつくられている。ミズバショウ自然研究路の橋を渡り、道路向って右手の尾根に登る。ナラ、ブナ、クリ、

梵珠山 ガイド図



ヒバ、マツなど、古木の多い雑木林は下草が少なく気分がよい。40～50分で一周、キャンプ場へ下る。梵珠山のすそ野はスギの植林が進みヒバはほとんどない。しかし人の入りにくい山の斜面には、ヒバが残っている。ヒバ林に普通のテリハタチツボスミレもあることから、かつてはここもヒバ美林であったことが想像される。

◆メ モ 大釈迦北口バス停の向いには旧羽州街道がある。人家の間の坂道を上ると旧峠をへて、農免道路・鶴ヶ坂・孫内線を横切り、鶴ヶ坂の保食神社（うけもちじんじゃ）へ抜けられる。畑とスギ、雑木にかこまれた寂しい山道である。途中、明治14年の明治天皇ご巡行の記念碑（鶴ヶ坂寄り、畑の中）がある。時間があつたら土砂取り侵食の迫る小高い旧峠にのぼり、現国道を見おろしてみたい。

●松倉神社コース

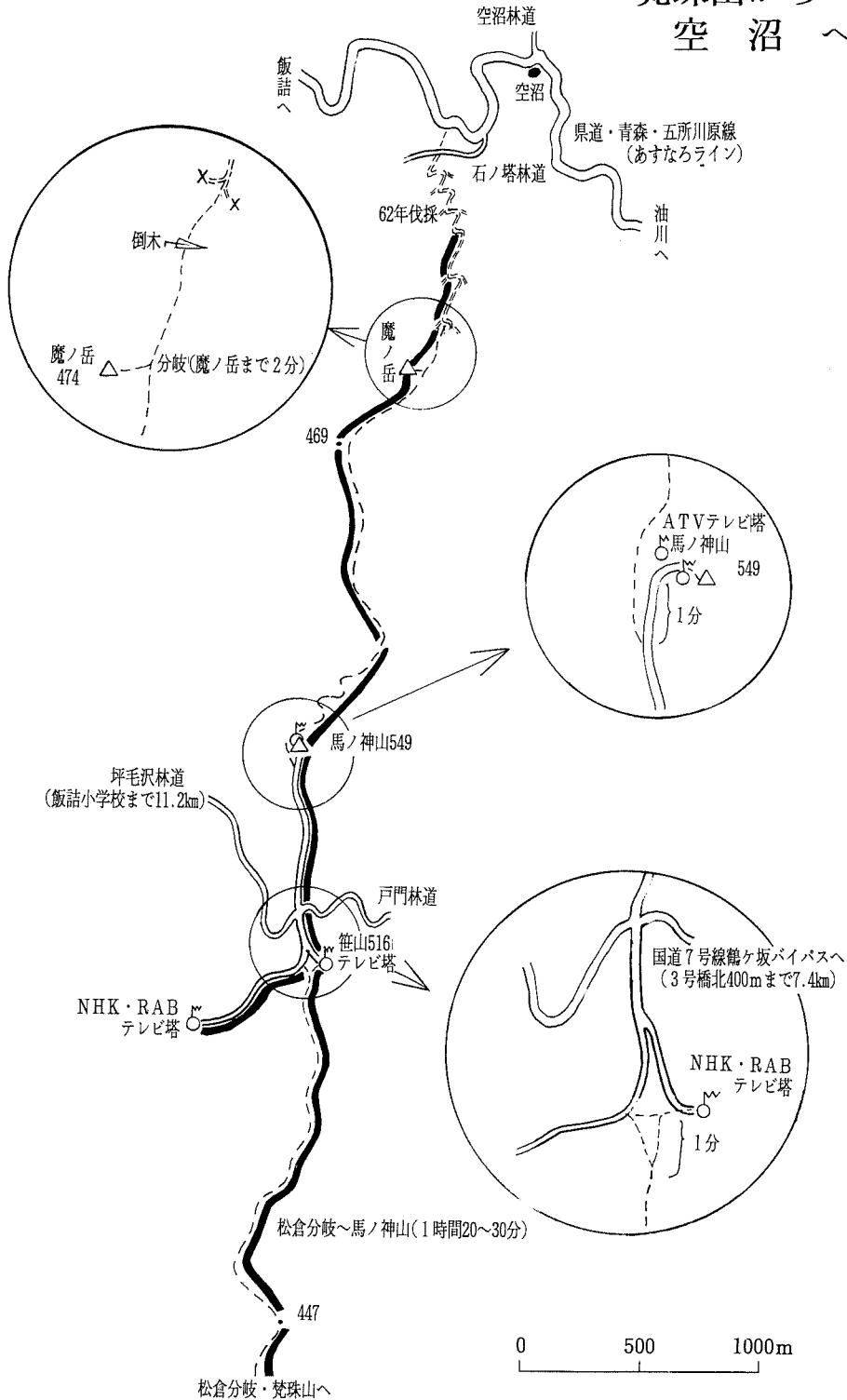
国道101号線を五所川原市へ向い、前田野目から入る。前田野目川を渡り右折、バイパスのガードをくぐり農道を4.2km北上すると、駐車場、トイレ、案内板のある登山口に着く。赤い鳥居をくぐり昭和4年建立の苔むした三十三観音を拝しながら、丸太の組まれた雑木林の坂道を登る。15分ほどで津軽霊場の一つ松倉神社に着く。うっそうとしたスギ、ヒバに囲まれた社殿は柱と屋根と腰板だけで窓がない。内部の天井、梁、柱、内板には全国から訪れた巡礼の札がびっしりと張られ、神殿前の燭台も山岳密教風で一種異様な感じを受ける。

松倉神社を過ぎるとまもなくスギの人工美林がある。樹齢40～50年のスギは下枝が払われ、真っ直に伸びていて見ごたえがある。昔の人の山造りを想像し、植樹後の手入れの大切さを再認させられる。20分ほどで馬ノ神山（まのかみやま・549m）～魔ノ岳～空沼（からぬま）への縦走分岐に着く。ここより梵珠山頂上までは12～13分である。

◆メ モ 縦走分岐から馬ノ神山までは1時間20～30分かかる。馬ノ神山にはテレビ塔があり、青森市戸門（とこど）と五所川原市飯詰を結ぶ道路が横断している。魔ノ岳をへて空沼へはさらに1時間20分ほどかかる。

前田野目・釈迦堂山分岐から農道（前田野目財産区の看板あり）までは少し距離がある。1時間10分ほどで部落から1.5kmの農道に出る。

梵珠山から 空沼へ



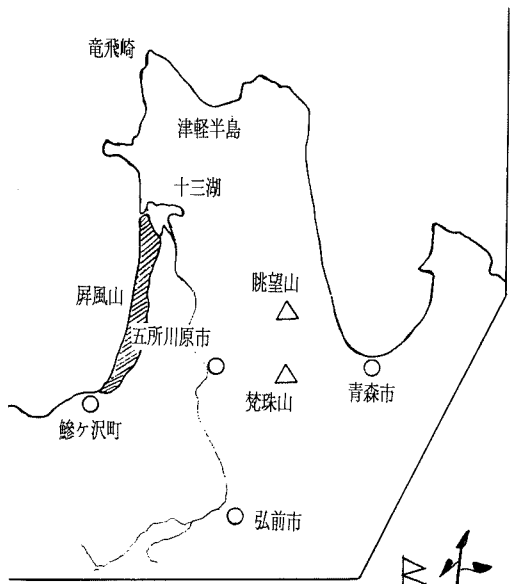
屏風山とべんせ湿原

津軽半島の日本海側、七里長浜に沿った南北に長い（約30km）砂丘が屏風山（びょうぶさん）で、津軽国定公園の一部となっている。藩政時代から植えつがれたカシワや黒松に囲まれ、中には多数の湿原・湖沼・草原があったが、近年屏風山の大半は開田、開畑が進み、草地や湿原は急速に姿を消してきた。屏風山のランとしては、ミズトンボ、ミズチドリ、ノビネチドリ、トンボソウ、ツレサギソウ、オオヤマサギソウ、オニノヤガラ、エゾスズラン、カキラン、ツチアケビ、トキソウ、ネジバナ、コケイラン、エビネ、サルメンエビネ、ギンラン、ササバギンラン、ユウシュンラン、クモキリソウ、サイハイランなどが生えている。まれにコアツモリソウ、クマガイソウ、キンラン、サワラン、マイサギソウ、トケンランもある。現在残っている屏風山の代表的湿原としては、高山稲荷付近のこけ菴・隠沼、亀ヶ岡付近の平滝沼・べんせ湿原である。ここでは平滝沼とべんせ湿原を紹介する。

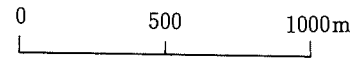
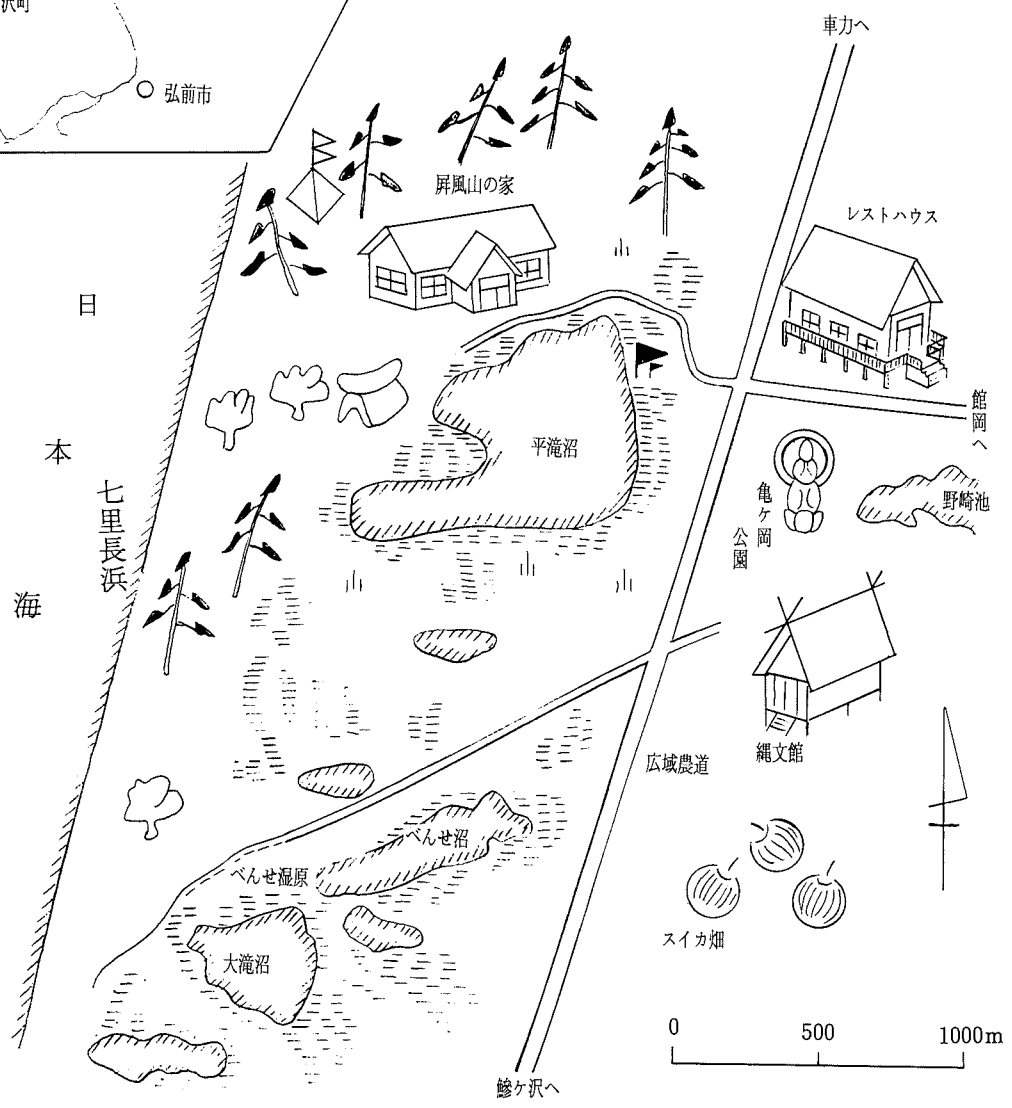
屏風山のメイン亀ヶ岡公園（平滝沼公園）から西に進むと、すぐ平滝沼の水泳場となっている。ヨシのまばらな湿地には、ミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ、ミズチドリ、カキランなどが生えてる。しかし、ここで一番の見ものは湖沼西南側のノハナシヨウブとニッコウキスゲだと思う。とくに6月下旬から8月上旬まで、次々と咲きつづくノハナシヨウブはたいへん見事である。

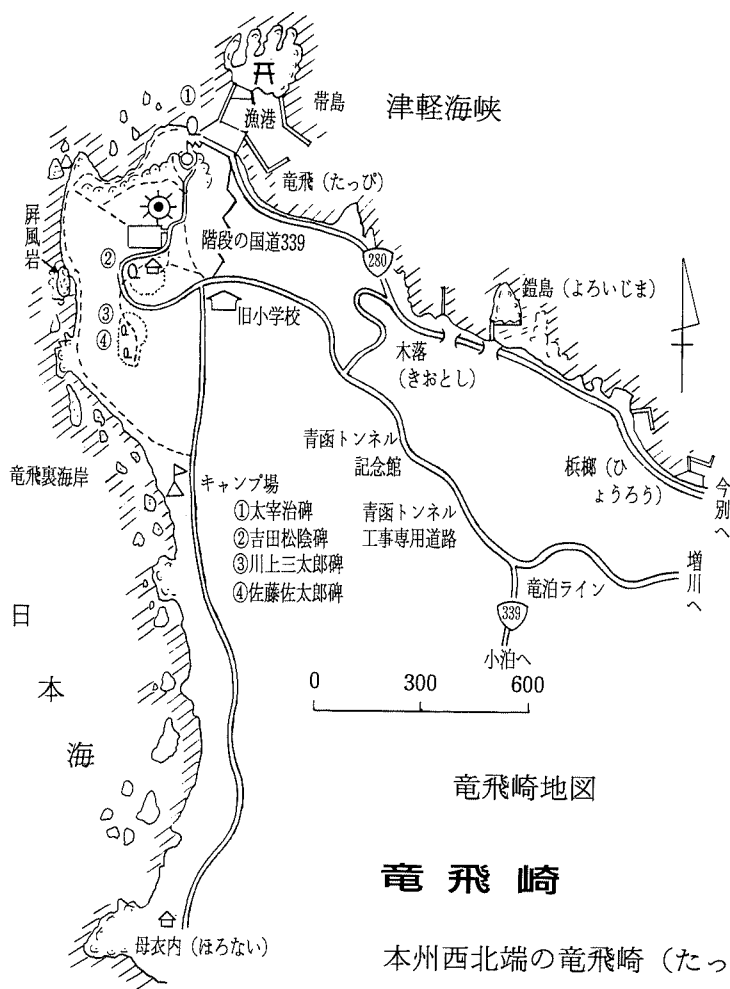
亀ヶ岡公園から広域農道を1km南下すると、西側にべんせ沼へ通じる道路がある。案内板にしたがい砂利道をさらに1kmほど進むと、べんせ湿原に着く。べんせ湿原とは、東にべんせ沼、南は大滝沼、西と北はカシワ林に囲まれた20haほどの草湿地のことである。湿地にはトキソウ、カキラン、モウセンゴケ、ツルコケモモ、ニッコウキスゲ、タチギボウシ、サワキギョウ、ノハナシヨウブ、ミズトンボ、ミズチドリなどが生え、池塘にはジュンサイ、ミツガシワ、ヒツジグサ、コウホネ、ヒメミクリも生えている。草地にはアズマギク、オキナグサ、センダイハギ、ムジャリンドウが、また海岸に近づけばハマナス、ハマハタザオなどが見られる。べんせ湿原の花はニッコウキスゲ、トキソウの咲く6月中旬～下旬が圧巻。

◆メモ 「ベンセ」とは、弁財衆の乗っていた弁財船（北前船）に由来するという。昔の竹スケートが弁財船の舳（へさき）に似ているので“ベンジャ”といわれ、いつの間にかベンジャ滑りのできる沼の名になったもの。



べんせ湿原 ガイド図





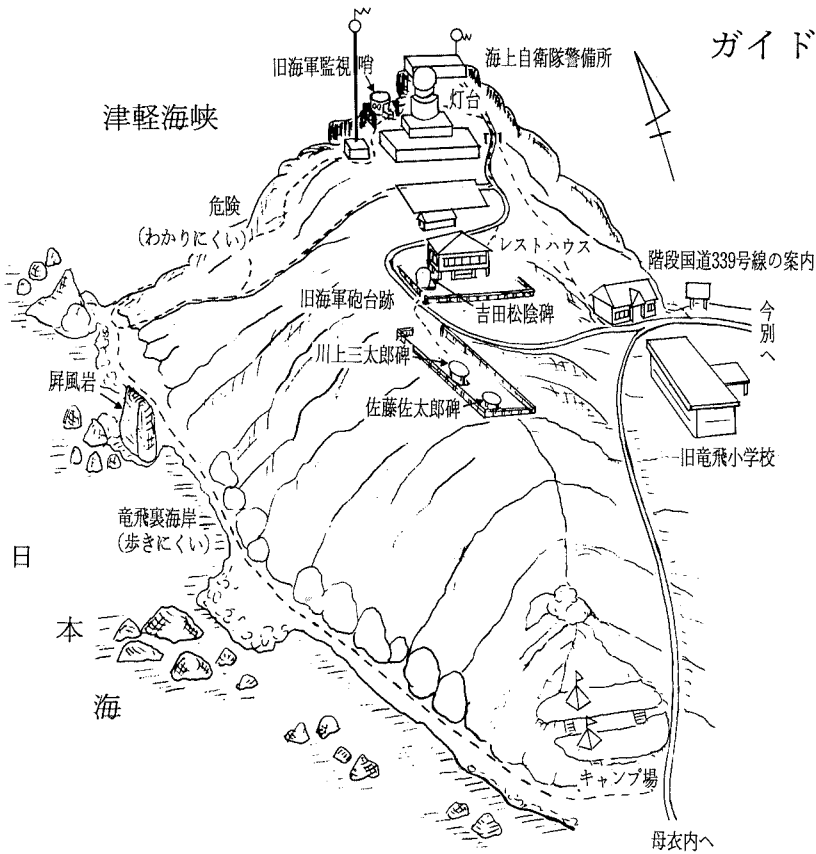
竜飛崎

本州西北端の竜飛崎（たっぴざき）も植物好きの人には興味つきないところだ。対馬暖流とリマン寒流がぶつかり、たえず霧を発生させる。夏にはヤマセ（偏東風）が海を渡って涼しく、さらに秋から春まで毎日のように続く強く、冷たく、厳しい季節風が特異な環境をつくったのだろう。

青函トンネルの掘削が終わり竜飛崎付近は元の静けさに戻った。海岸の草地にはウラシマソウ、ミヤマアズマギク、カノコソウ、トウゲブキ、エゾスカシユリ、ハマナス、マツムシソウ、イブキジャコウソウ、ハマフウロ、ツリガネニンジン、ハマエンドウ、ニッコウキスゲ、エゾノカワラナデシコ、エゾニュウ、オオアキノキリンソウ、コハマギク、ハマウツボなどが生えている。少し山手に入ればノビネチドリ、オオヤマサギソウ、オニノヤガラ、ササバギンラン、エゾスズラン、アオフタバラン、アケボノシュスラン、ミヤマウズラ、ヒメホテイラン、サルメンエビネ、スズムシソウ、セイタカスズムシソウ、クモキリソウ、ジガバチソウ、イチヨウラン、クマガイソウなどのランも見かける。これらの花は春から秋まで次々と咲くが、

竜飛崎

ガイド図



他の山では花がなくなる8月下旬から9月にかけてマツムシソウ、ツリガネニンジン、ハマフウロが咲き、天候も安定するので観光を兼ねて訪れるのが楽しい。道ばたには帰化植物のキクニガナも見られる。なおこのマツムシソウは丈が低く、外見はタカネマツムシソウやソナレマツムシソウに似ている。

竜飛漁港の先は海岸沿いに竜飛裏海岸への遊歩道がある。遊歩道とはいってもコンクリートの道は最初だけ、あとは岩場と石ころの海岸である。海が荒れば通行禁止となる。また国土地理院の5万分の1の地図では、旧砲台のすぐ西下に屏風岩と書いてあるが、これは間違っている。屏風岩はもっと西の海岸に直立する衝立状の岩をいう。同じような間違いは奥入瀬溪流の天狗岩にもある。

◆メモ 漁港から民家の軒下を通り、旧中学校跡、灯台東下をへて旧小学校前に上る道は、全国でも珍しい階段国道339号線である。数えてみたら350段ほどあった。幻の国道だった339号線は、昭和59年ようやく小泊までつながったが(竜泊ライン)冬期間は閉鎖(11月下旬から4月下旬まで。問合せ先;青森土木事務所。0177-81-0191)されるので注意を要する。

八甲田山と十和田湖付近

田代平湿原

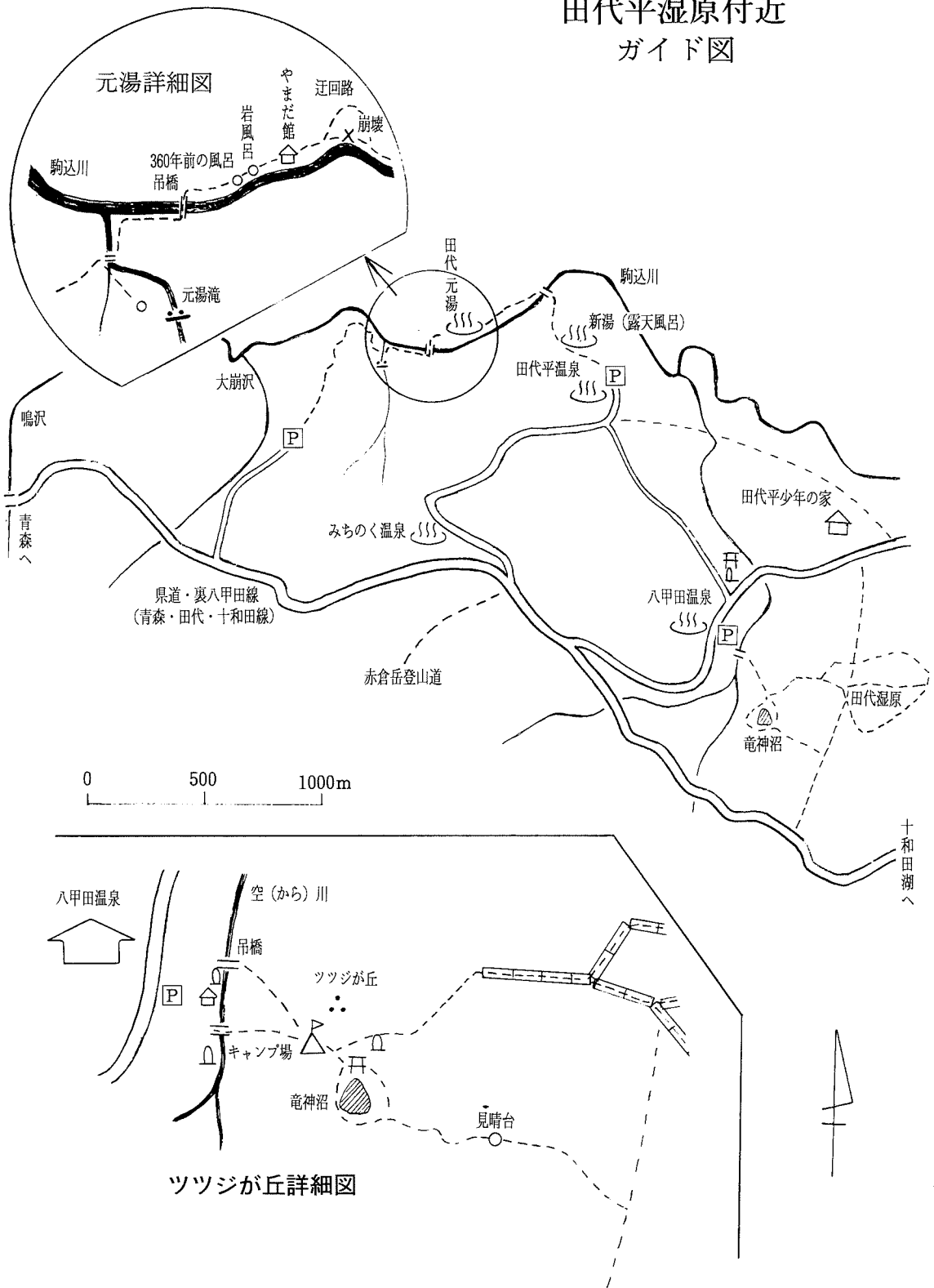
北八甲田の山ふところ、青森市街から車で1時間の田代平（たしろたい）高原には、「田代平湿原植物群」がある。広さはわずか15万平方メートルほどだが、低層湿原から高層湿原までが入り混じり、興味ある植物も生えている。湿原には歩行・観察用に木道が通り、誰でも簡単に行ける。雄大な北八甲田の峰々を眺めながらの散策は実にそう快だ。ことにレンゲツツジの満開となる6月中旬～7月上旬は、周囲がレンゲツツジやニッコウキスゲの花でうまり、多くのハイカーでにぎわう。

湿原の花を開花の早いものからあげると、ワタスゲ、チングルマ、シロバナハナニガナ、ヒメシャクナゲ、ツルコケモモ、レンゲツツジ、コアニチドリ、トキソウ、サワラン、ネバリノギラン、ニッコウキスゲ、コバイケイソウ、キンコウカ、カキラン、コバノトンボソウ、タチギボウシ、モウセンゴケ、オオヤマサギソウ、ネジバナ、エゾリンドウなどである。開花期が少しずつずれるので一度に全部は見れないが、ワタスゲが波うち、レンゲツツジの咲く6月初～下旬に訪れるのが楽しい。

森林浴やワンダーフォーゲルも楽しみたい方には、八甲田温泉の西にあるランプのいで湯・田代元湯（もとゆ）まで足を延ばすことをおすすめしたい。駒込（こまごめ）川上流の溪流もすばらしく、手頃なハイキングコース（田代平温泉郷コース）となっている。植物も湿原とは趣を変えヒメイチゲ、ズダヤクシュ、ツクバネソウ、ウスバサイシン、トチバニンジン、クルマバソウ、ヤグルマソウ、ベニバナイチャクソウ、シラネアオイ、コウライテンナンショウ、ムラサキヤシオツツジ、コケイラン、ササバギラン、エゾスズラン、オオヤマサギソウ、ネジバナなどが生え、またヤマサギソウ、オオバタチツボスミレ、ヤナギランも見られることがある。

◆メ モ バス利用でハイキングする人は、元湯入口から入る（自家用車は途中の駐車場まで入れる）。途中元湯滝を見、溪流に出て吊橋を渡る。元湯（やまだ館）手前の右手道端に、360年前の風呂（バラックの小屋）がある。あとは溪流を遡り八甲田温泉へ向かう。

田代平湿原付近 ガイド図



北八甲田山

北八甲田登山は、八甲田ロープウェイができてから、これを利用する人が多くなった。しかし、脚に自信がある人には、酸ヶ湯から八甲田清水（辰五郎清水）の湧き出る仙人岱（せんにたい）をへて大岳（1585m）へ登り、井戸岳、赤倉岳に足をのぼし、ひき返して毛無岱（けなしたい）を下るコースをおすすめしたい。酸ヶ湯から仙人岱までは林間で単調である。しかし足もとをよく注意すればキソチドリ、アリドオシラン、コイチヨウランなどを見ることがある。約1時間で地獄（湯ノ）沢に着く。

硫黄臭のただよう地獄沢を横切ると、コケモモ、ガンコウラン、ゴゼンタチバナ、マルバシモツケなどが急に目に入る。20分ほどで仙人岱だ。仙人岱からはさらににぎやかとなる。仙人岱は雪田のお花畑でミヤマキンポウゲ、ヒナザクラ、イワイチョウ、ショウジョウバカマ、アカモノ、イワカガミ、チングルマ、ゴゼンタチバナ、ヨツバシオガマ、アオノツガザクラ、コバイケイソウ、ヒメイワショウブなどが見られる。ランではハクサンチドリ、タカネトンボ、コバノトンボソウ、ホソバノキソチドリが生えているが数は多くない。

仙人岱の上はアオモリトドマツからハイマツ帯となり、すぐ高山草地に出、鏡沼をへて大岳頂上である。仙人岱から30分ほどかかる。大岳頂上は登山者に踏まれて裸地化している。噴火口周囲には、イワウメ、コメバツガザクラの他、ウサギギク、イワブクロ、ホソバノイワベンケイ、イワギキョウ、クモマニガナ、ハナイカリ、イワカガミ、ミヤマオダマキ、ムシトリスミレ、チシマゼキショウ、ミヤマリンドウなどが生えている。高山草地は井戸岳、赤倉岳北斜面まで続く。ハクサンチドリ、ハクサンシャクナゲ、コケモモ、ガンコウラン、イワウメ、コメバツガザクラ、ミネズオウ、イソツツジ、ミヤマオダマキ、ヨツバシオガマ、シラネニンジン、ハクサンボウフウ、ミヤマキンバイ、マルバシモツケ、ミネヤナギ、コミヤマハンショウヅルなどがお花畑をつくっている。井戸岳にはイワブクロが多く、赤倉岳にはコミヤマハンショウヅル、オオバキスミレ、ミヤマオダマキ、イソツツジが多いようである。

下山は上・下の両毛無岱を経由する。毛無岱は北八甲田では最も大きい高層湿原で木道が通っている。所々に点在するアオモリトドマツ、ハッコウダゴヨウ、ハクサンシャクナゲ、ハイマツ、ミネカエデ、ダケカンバなどからなる緑の島々と、大小の池塘が調和よく配置され、背景の北八甲田の峰々ともマッチし、造化の妙をつ

くした自然の庭園といえる。木道沿いには、アカモノ、イワナシ、ウラジロヨウラク、ヒナザクラ、チングルマ、イワカガミ、ショウジョウバカマ、ネバリノギラン、イワイチョウ、キンコウカ、コバノトンボソウ、ホソバノキソチドリなどが咲き、大小の池塘にはミツガシワが妍けんを競っている。

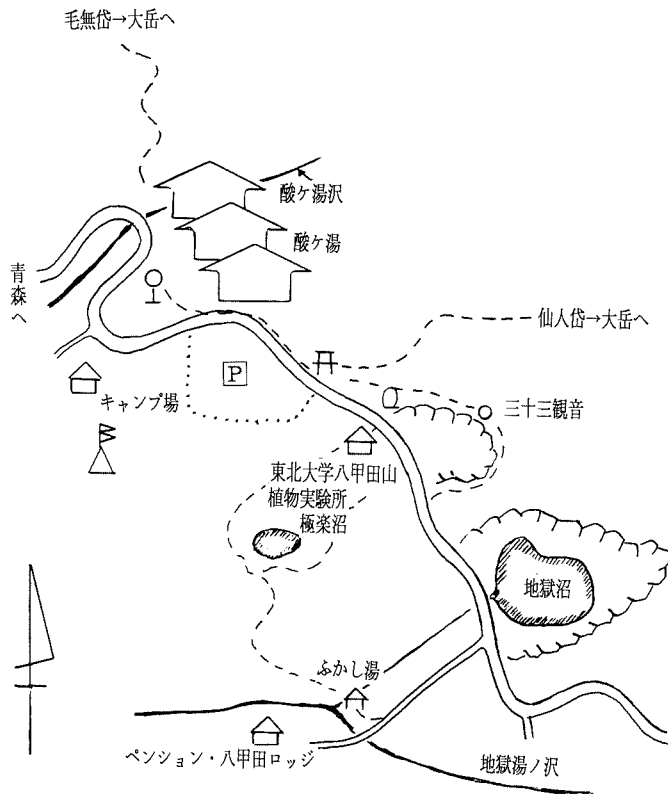
毛無岱を過ぎると再びブナ林間となる。オオヤマサギソウ、キソチドリ、コイチヨウラン、アリドオシランなどが生えているが、よく注意しないと分からない。最後に湯坂を下ると酸ヶ湯に着く。このコースは6～7時間かかるが変化があって面白い。花を見るには、6月中～下旬がよいであろう。ただランは花期が少し遅くなる。

◆メ モ 愛称・高山植物園（東北大学八甲田山実験所。昭和4年開園）は、八甲田山に生育する多くの植物を観察できる。地形が変化に富んでいて、花を見ながらの散歩は楽しい。シーズン中、無料開放。

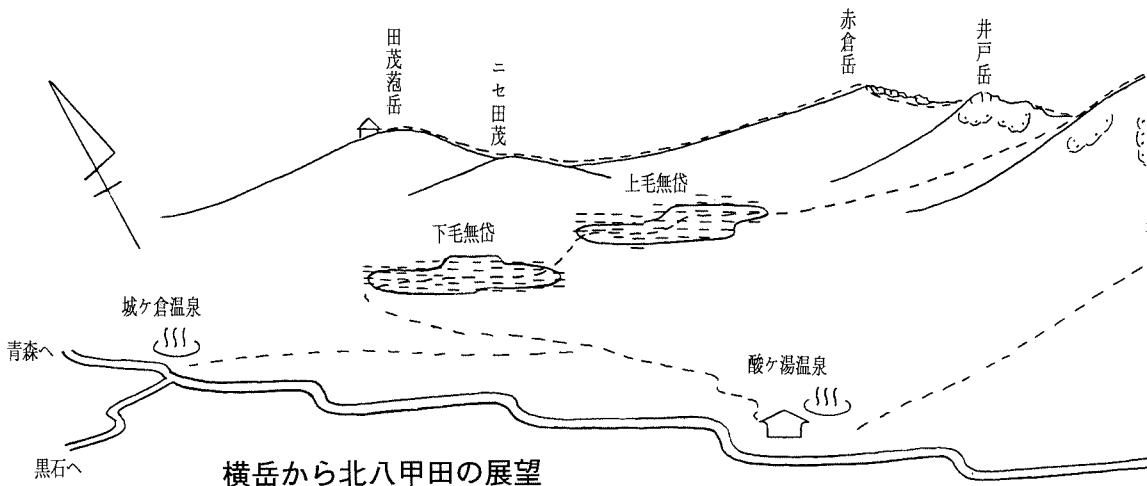
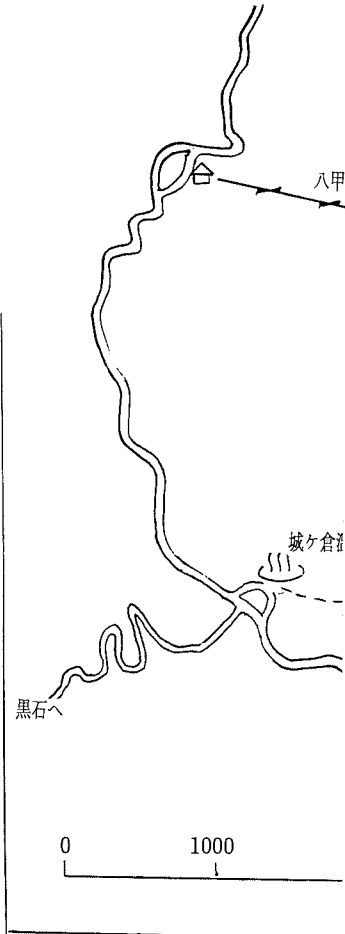


田茂菴湿原とコバイケソウ

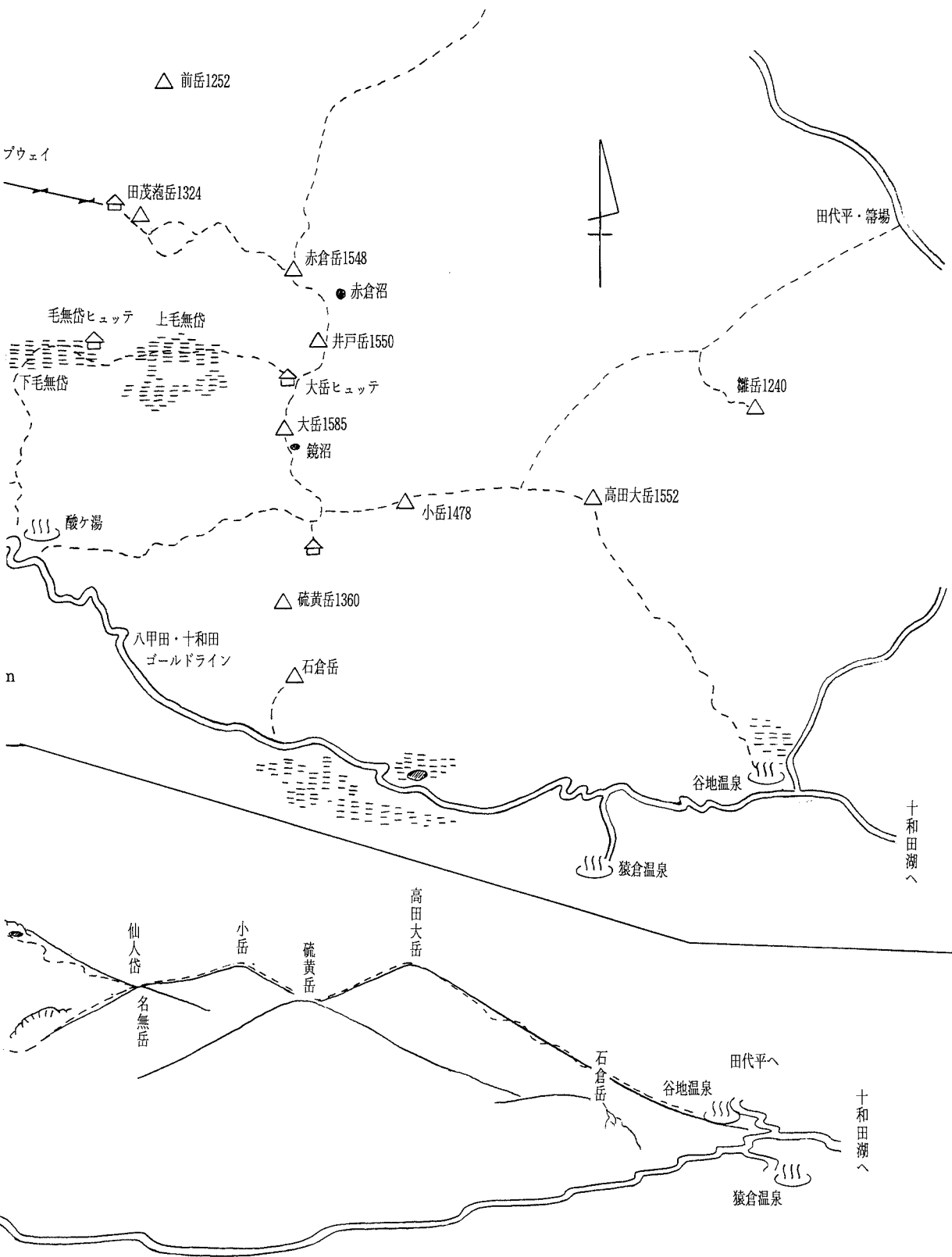
北八甲田山 ガイド図



酸ヶ湯と高山植物園



横岳から北八甲田の展望



南八甲田山

南八甲田登山は猿倉温泉をベースとするのが普通。数種のコースがあるが、ここでは最高峰櫛ヶ峰（くしがみね・1517m）へのコースと、乗鞍岳～黄瀬沼（おうせぬま）コースの2つを述べてみる。

●櫛ヶ峰

猿倉温泉からは通称・旧道（猿鼻廃道）を行く。旧道とは観光道路「酸ヶ湯大鱈線」として昭和8～9年に、猿倉温泉と十和田湖御鼻部山（おはなべやま）との間に開削されたが、豪雪ですぐ壊れ廃道となった幻の県道（自動車道）のことである。その後ダケカンバや雑木が覆い茂り、所々に見られる崩れた石垣やコンクリートの橋が当時をしのばせる。今はこの廃道が南八甲田探索の本ルートとなっている。

猿倉温泉からツルニンジン、ツルキツネノボタン、ミヤマスマシレ、オオバキスマシレ、ヒョウノセンカタバミ、サンカヨウ、ムラサキヤシオツツジ、モミジカラマツ、ミヤマワラビ、オオバシヨリマ、オオヤマサギソウなどが生えているブナ、ダケカンバ、アオモリトドマツの林間を行く。40分ほど進むと右手に高田大岳が雄姿を現わす。最初の展望所・望甲台である。最近では雑木が大きくなり視界を遮ってきているのが残念。

猿倉温泉から1時間10分で最初の湿原・矢櫃菴（やびつやち）に着く。矢櫃菴ではツルコケモモ、アカモノ、ミツバオウレン、イワイチョウ、ミツガシワ、コバイケイソウ、ハクサンシャクナゲなどが見られる。矢櫃菴から5分で壊れたコンクリートの橋・矢櫃橋である。小休止し、矢櫃沢の溪流、猿倉岳の展望を楽しむ。矢櫃橋から15分ほどでかつての展望所の一つ見返峠だが、今はダケカンバや雑木が茂り眺望がきかない。見返峠のヘヤピンカーブを右折、登りつめたところが清水峠で冷水が湧いている。年中涸れることがない冷水は登山者の喉を潤し、北八甲田仙人岱の辰五郎清水（八甲田清水）と好一对といえる。ここでは水を補給しよう。このすぐそばが乗鞍岳登山道が分かれる一ノ沢である。猿倉温泉から2時間ほどかかる。一ノ沢付近の雪田にはヒナザクラ、ハクサンチドリ、シナノキンバイ、ウサギギク、イワイチョウ、カラマツソウ、ミヤマリンドウ、エゾシオガマ、モミジカラマツ、コバイケイソウなどが生えている。

一ノ沢から先は視界が開けてお花畑が続く。いたるところにチングルマ、アカモノ、シラタマノキ、イワカガミ、ウラジロヨウラク、ノウゴウイチゴ、ミツバオウ

レン、ツマトリソウ、ハクサンチドリなどが咲き乱れ、踏みつけそうにして行くことになる。ミヤマキンポウゲ、ハクサンシャクナゲ、ゴゼンタチバナ、イワナシ、ベニバナイチゴ、モミジカラマツ、オオタカネバラ、ショウジョウバカマ、ワタスゲ、ミネザクラなども見られる。一ノ沢から45分で旧道中最も標高があり黄瀬沼への入口となっている地獄峠（古くは地蔵峠）に着く。さらに駒ヶ峰入口をへて、30分で黄瀬田型菴（おうせたがたやち）である。南八甲田髓一といわれる湿原は変化に富み、今まで述べたほとんどの植物のほか、ミズバショウ（黒斑がある）、ネムロコウホネ、ヒメシャクナゲ、ニッコウキスゲ、シナノキンバイ、ハクサンチドリ、コバノトンボソウ、ホソバノキソチドリなどが生えている。

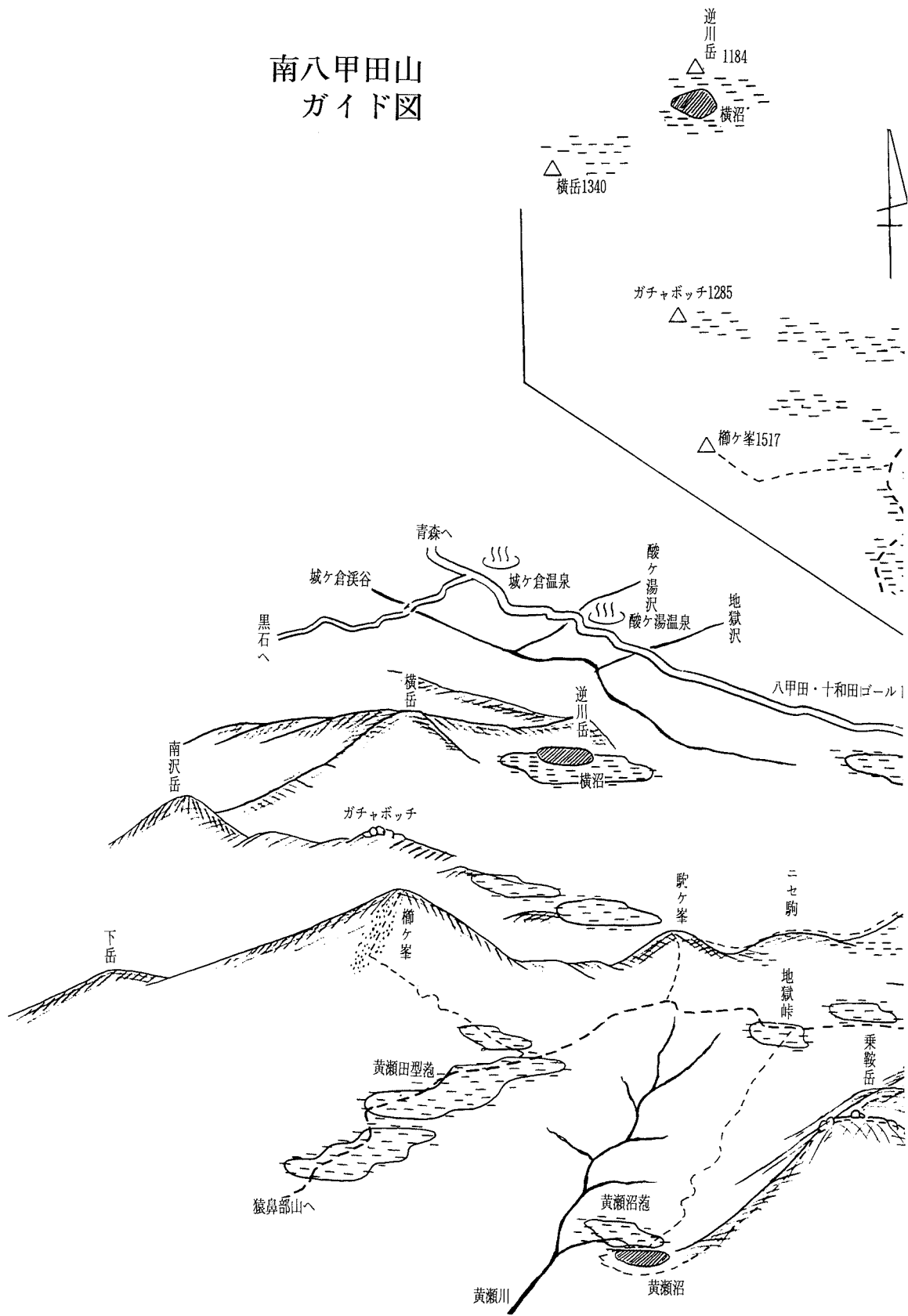
駒ヶ峰へは道標にしたがい黄瀬田型菴より右折する。少し登るとまた湿原が現われ、木道が通っている。チングルマの大群落、ワタスゲ、ヒメシャクナゲ、ニッコウキスゲを楽しみ、ホソバノキソチドリ、コバノトンボソウを探しながら進むと、10分ほどで木道は終わる。再びチシマザサの道となり、シナノキンバイ、ミズバショウの生えた沢地を4～5回上下し、最後にアオノツガザクラが群生し、雪渓が残る駒ヶ峰東南の急斜面を登りつめると頂上だ。黄瀬田型菴から1時間～1時間30分かかる。頂上直下には祠がある。頂上は八甲田の峰のなかでは比較的せまい。しかし展望をさえぎるものは何もないので、360度の大自然を楽しめる。ことに駒ヶ峰から北側の眼下に続くガチャボッチ、横岳、横沼のササヤブや湿原、また南に展開する黄瀬沼から田型菴の大湿原群は雄大で、アゴを出した急登の疲れを吹き飛ばす。頂上付近には、以前キバナシャクナゲが生えていたが掘られて今はない。このコースは距離があるので、早朝の出発が必要。花を見るなら、7月上～中旬がよいであろう。

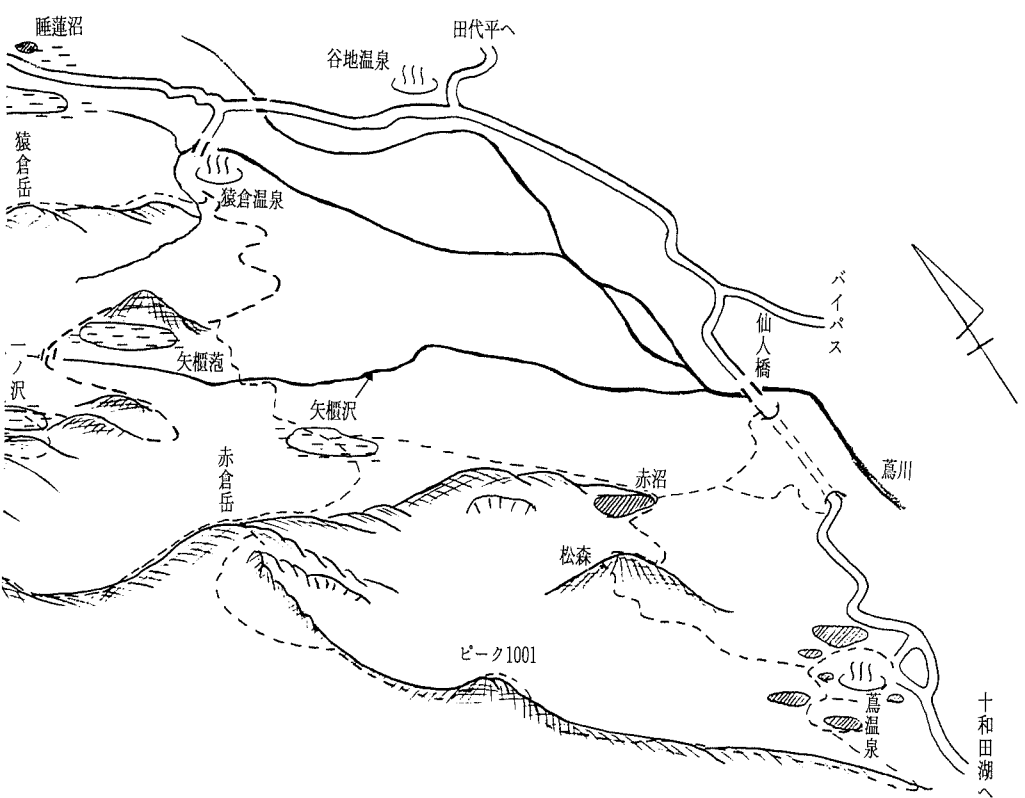
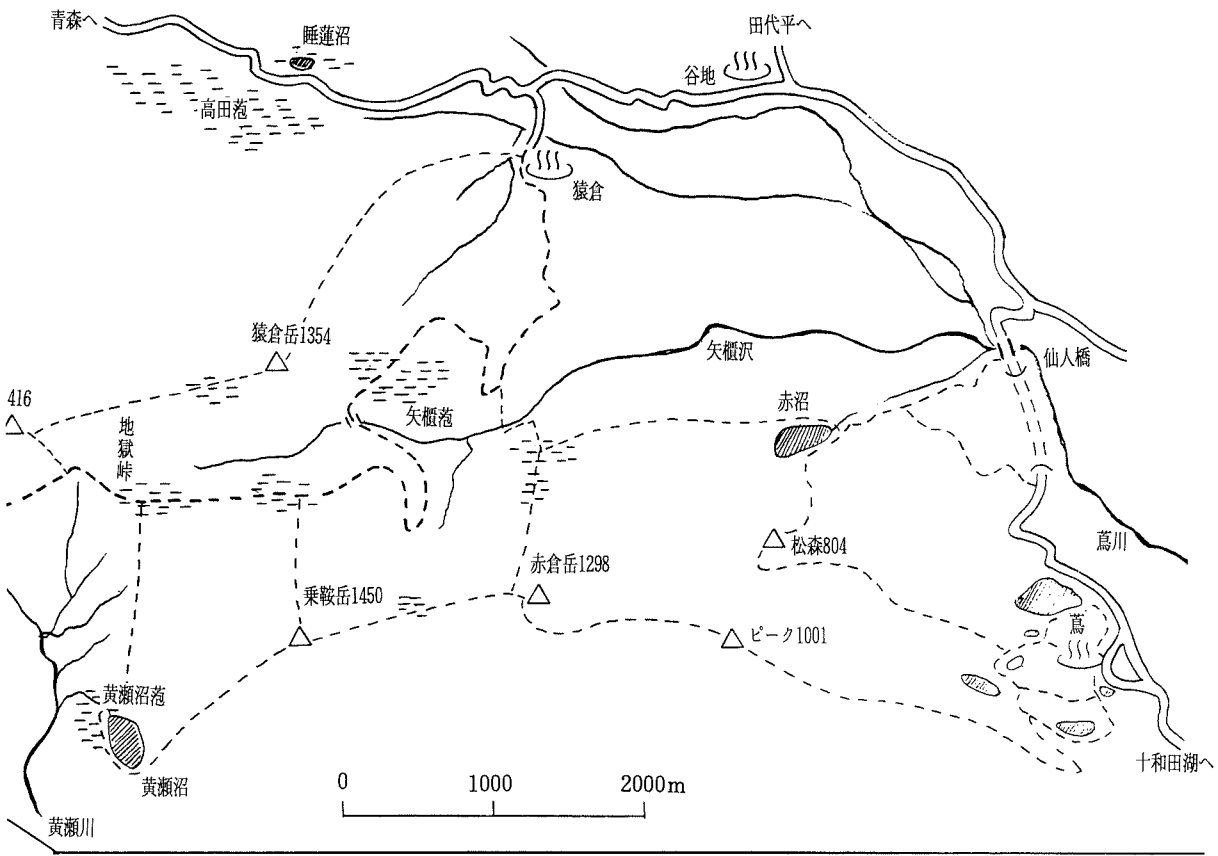
●乗鞍岳から黄瀬沼

乗鞍岳へは一ノ沢から入る。旧道と別れダイモンジソウの生えている沢道を登る。2、3か所小さな湿原を通り、約30分で沢は消える。その上はキソチドリ、コイチヨウラン、アリドオシランなどの生えているアオモリトドマツの林間となり、50分ほどでしめ縄岩の横たわる頂上に着く。頂上からは左手に十和田山、戸来岳、岩手山、正面に南八甲田南面の樹海と黄瀬溪谷、太陽に映える十和田湖、右手には白地山や秋田県境の山なみが展開する。

頂上から道を左（東）にとれば、赤倉岳分岐をへて赤沼→仙人橋へ出るコースと赤倉岳頂上→ピーク1001→蔦温泉へ出る2つのコースがある。黄瀬沼へは右手

南八甲田山 ガイド図





(西)に進む。草地尾根を過ぎ、タケシマラン、オオバタケシマランの生えているアオモリトドマツの短い林間を出ると、乗鞍岳西鼻の小さな岩場に着く。ここから下は見事なハイマツの絨毯じゅうたんが広がっている。眼下には神秘のブルー黄瀬沼、右手には櫛ヶ峰、駒ヶ峰、猿倉岳そして北八甲田の峰々が展開する。

ここから黄瀬沼までは50分ほどかかる。沼が見えてくると右手に2～3か所踏み跡がある。まどわされず真っすぐ進む。まもなく右折し沼の南端に出る。道は沼の南端から西側をめぐり、ぬかるみには木道が通っている。沼の西側には湿原(黄瀬沼菴・おうせぬまやち)が広がっている。沼のほわりにはシナノキンバイ、モミジカラマツ、ミツガシワ、キンコウカ、サワギキョウ、タチギボウシ、ナガボノシロワレモコウ、コオニユリ、ミズギクなどが生え、ネジバナ、コバノトンボソウも見られる。

沼が終わると道は登りとなる。沢越えのアップダウンを5～6回繰返し、約50分で旧道との合流部・地獄峠に出る。地獄峠からは旧道を帰る。時間と体力に余裕があれば、駒ヶ峰から猿倉岳をへて猿倉温泉に下りてもよい。このコースは雪が残っていると道がわかりにくい。距離もあるので、時間には十分余裕をもって行くことが大切である。

◆メ モ 赤倉岳からピーク1001をへて蔦温泉へ下るコースは、チシマザサが茂りヤブコギとなる。また蔦温泉に近づくと伐採跡ブッシュで道がわかりにくい。初めての方は道をよく知った人と一緒になければ、通らない方がよい。なお、猿鼻道の古い縦走記録として、昭和13年に当時の小河正義知事を案内した小笠原松次郎氏の紀行がある。その頃の南八甲田の様子が分かりたいへん貴重。

◆メ モ 小笠原松次郎(おがさわら・まつじろう)

十和田湖国立公園実現に尽くした影の功労者の一人。臥雲仙人と称せられ、大町桂月をはじめ多くの人々を八甲田山、十和田湖の秘境へ案内し紹介に努めた。昭和50年4月没。86歳。

戸来岳

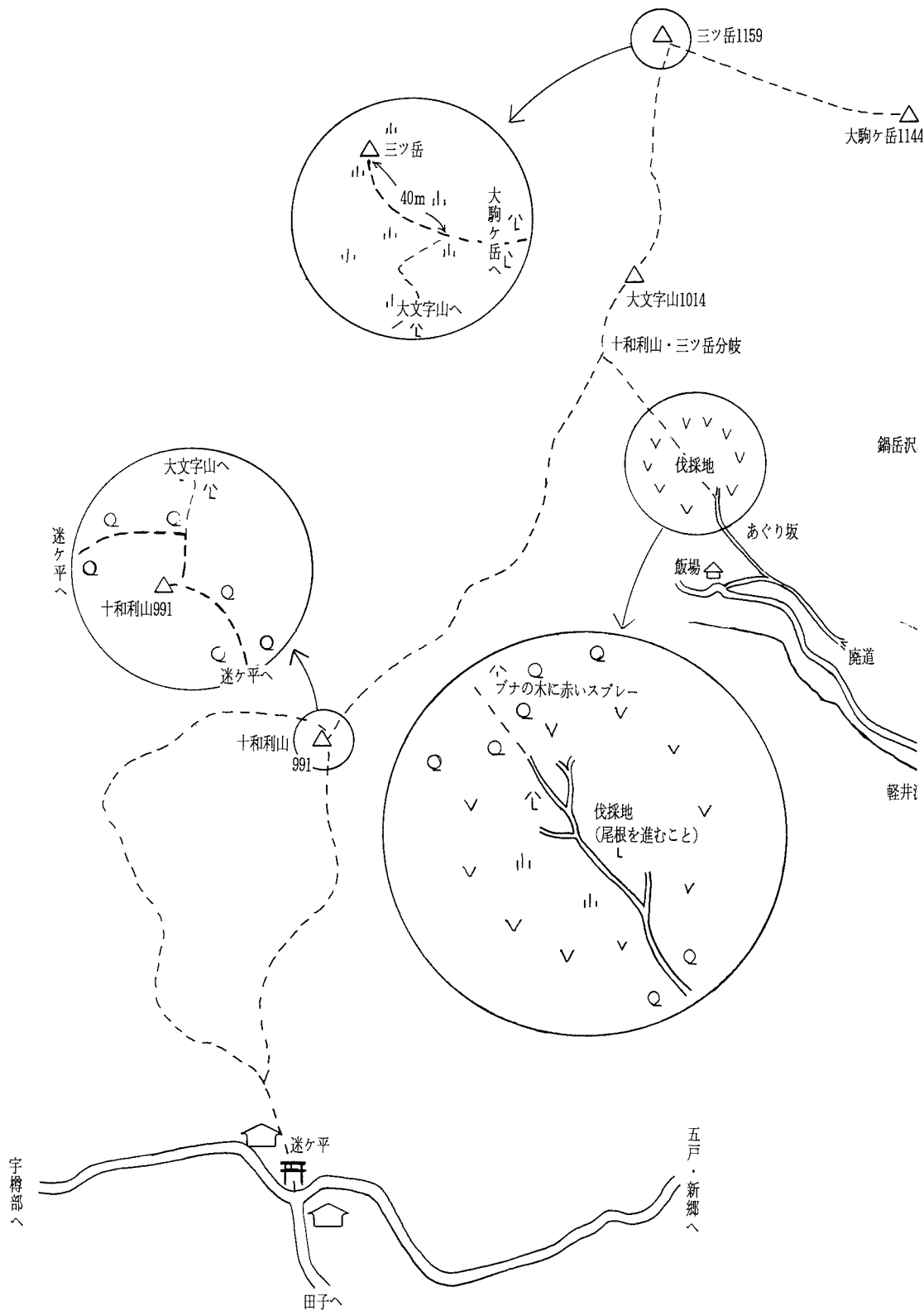
青森県の三八・上北地方にはあまり高い山がない。八甲田を除けば、十和田カルデラの外輪山、大駒ヶ岳（1144m）、三ツ岳（1159m）からなる戸来岳（へらいだけ）が一番高い。戸来岳の登山コースとしては、平子沢→大駒ヶ岳→三ツ岳往復の北コース、平子沢→アグリ坂→大文字山→三ツ岳→大駒ヶ岳→平子沢のアグリ坂一周コース、迷ヶ平→十和利山→大文字山→三ツ岳→大駒ヶ岳→平子沢の縦走コースがある。

●北コース

戸来岳登山には車が必要。県道・五戸・十和田湖線の迷ヶ平から新郷村へ向い約10km走ると、左手に登山口への標識が立っている。左折し、砂利の林道を3kmほど進むと平子沢に着く。養魚場があり、駐車場、トイレのある登山ベースとなっている。北コースの登山口は平子沢駐車場から150mほど進んだところにある。マイヅルソウ、ユキザサ、ベニバナイチャクソウ、トチバニンジン、クルマバソウ、コウライテンナンショウ、クモキリソウ、オニノヤガラ、アケボノシュスラン、エゾスズランなどを探しながらゆるい上りの雑木林を進む。約45分で下からの鍋岳沢林道といったん交差する。登山道はこの林道を横切って左手30mのところへ続く。兎ヶ平（天狗森）と書いた案内板がある。ここを横切ってからも、しばらくは平坦なブナ林間だ。

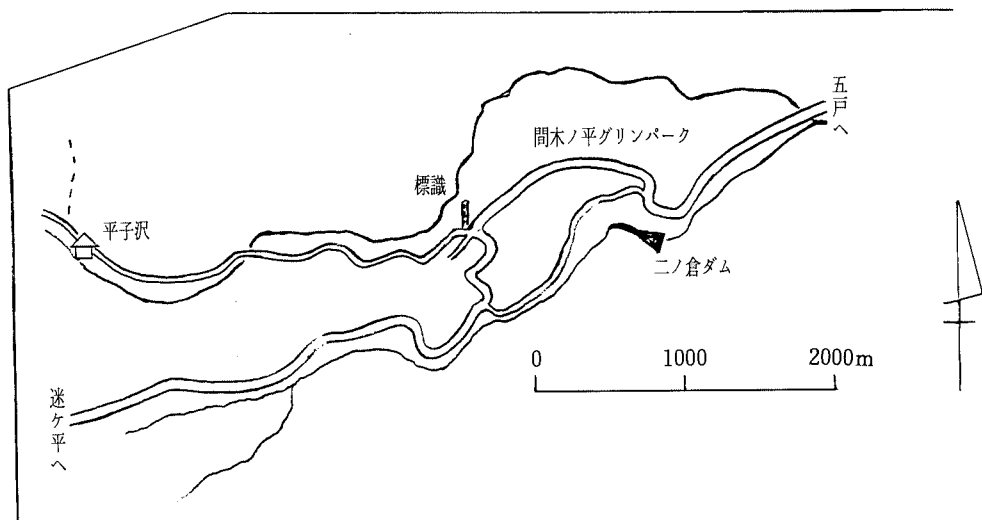
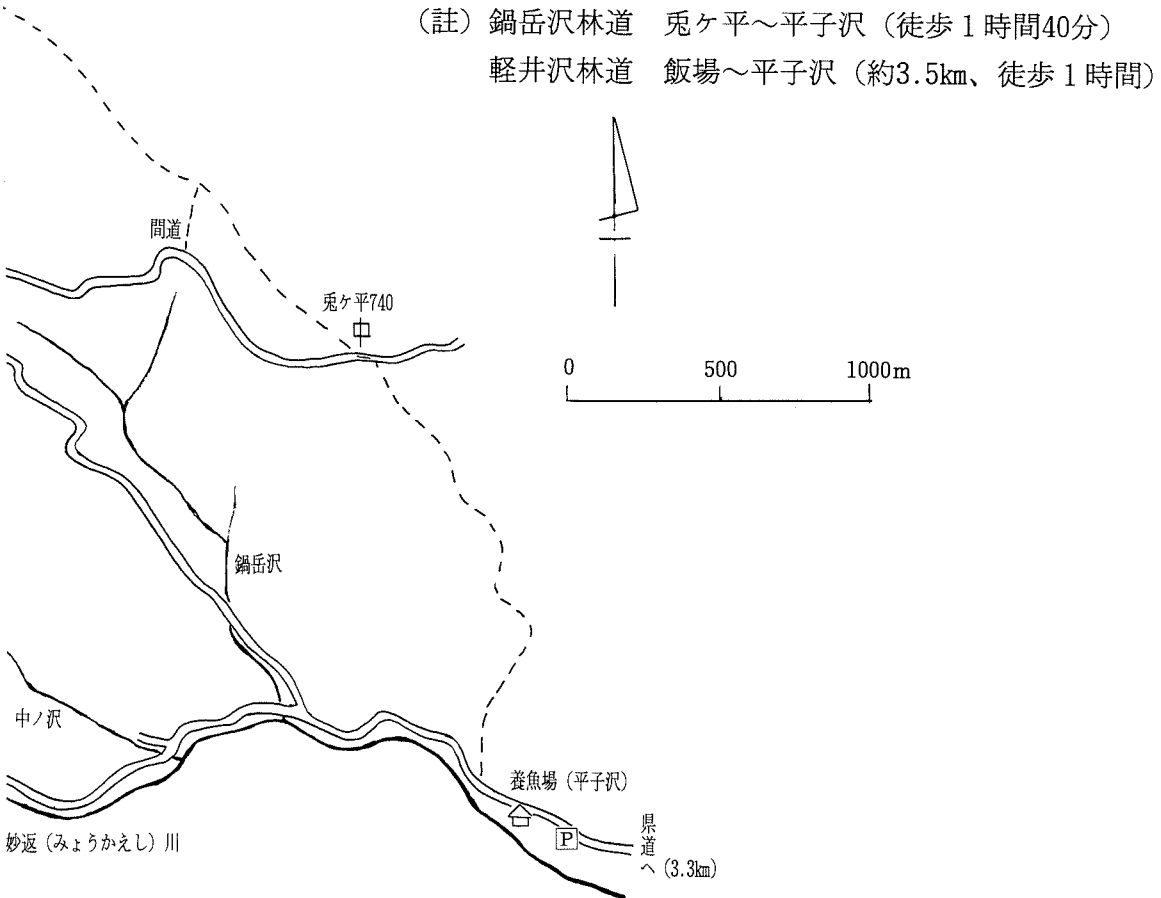
この辺一帯の地層はアワ砂やゴロタといわれる浮石層（火山礫）が厚く、ブナ、トチノキ、サワグルミ、チンマザサも心もちやせている。下草に見え隠れする草花を見ながらブナ林間を進むと、20分ほどで勾配は急にきつくなる。丸太の階段も所々に組まれている。交差部から1時間30分ぐらいで大駒ヶ岳の頂上に着く。大駒ヶ岳から三ツ岳へは30分と案内板にあるが、これは健脚者の場合である。普通の人には40～50分をみた方がよい。いったん鞍部に下らなければならず（標高差約150m）、低木やササも茂っているので、多くの登山者は大駒ヶ岳止まりのようである。大駒ヶ岳および三ツ岳からの眺望はよく、東には小川原湖や太平洋、南を向くと岩手山から遠くは秋田の鳥海山、西には十和田湖や岩木山、北に八甲田山と続く。

戸来岳の植物の特徴は、イチイとコメツツジの混生群落である。春のミネザクラ、シラネアオイもすばらしいが、私はイチイの実が赤く熟す9月中旬～下旬が空気も澄み、汗もかかず一番楽しいと思う。路傍のエゾリンドウ、オクトリカブト、スキソして突然落下するトチの実の音が、しのびよる秋のけはいを感じさせる。



戸来岳 ガイド図

(註) 鍋岳沢林道 兎ヶ平～平子沢 (徒歩 1 時間40分)
 軽井沢林道 飯場～平子沢 (約3.5km、徒歩 1 時間)



◆メ モ 兎ヶ平までは鍋岳沢林道を車で進むことができる。ただし道路事情の悪い時は閉鎖される。

●アグリ坂コース

古い地図にあるアグリ坂への旧尾根道は、山麓部が伐採と植林により廃道となっている。平子沢から妙返（みょうかえし）川に沿う林道を進む。約1.2kmで中ノ沢橋に着く。これより先の軽井沢林道は道が悪いので、乗用車はここに置いた方がよいであろう。中ノ沢橋から徒歩45分で営林署の飯場に着く。飯場手前でヘアピンを右折、切り出し道路を登ると5分で尾根に出、旧アグリ坂の道（今は切り出し道路を兼ねている）と合流する。この道は、昔は宇樽部へ出る唯一の道で、雪中行軍の弘前隊も通ったのだという。

現在アグリ坂から登る人は少なく、チシマザサが繁茂している。また昭和62年秋～63年春に、峠の近くでブナ伐採が進み、払った枝が道を塞ぎ分かりにくくなっている。しかし右手の大文字山、左手の十和利山を目標に、鞍部に向かって尾根沿いに踏み跡を直進すれば30分でアグリ峠のT字路に達する。T字路には〔←十和利山、三ツ岳2H→〕の標識がブナの木に打ちつけてある。

左折すれば十和利山、右に登れば大文字山だ。ここから大文字山の頂上まではダケカンバ林下のササヤブを20分ほどである。登りつめたところのイチイの木に、〔大文字山〕の標識がぶら下がっている。大文字山から三ツ岳まではササヤブを50分ほどかかる。

◆メ モ 宇樽部へ抜ける道はT字路から少し大文字山側に登ったところにあるが、現在ササが覆い茂って分からない。冬期以外は通行できない。

●十和利山縦走コース

第3のコースは平子沢～迷ヶ平間の縦走コースである。平子沢～三ツ岳、平子沢～アグリ坂～三ツ岳のコースについては既に記したので省略する。ここでは自然休養林・迷ヶ平から入るコースを述べる。迷ヶ平正面の朱色の鳥居をくぐり数分進むと、十和利山（とわりさん）登山一周コースの分岐に着く。案内標識があり、〔左1.8km、右2.9km〕と書かれている。左手（東側）は距離は短い勾配がややきつい。右手（西側）はその逆である。どちらを行っても1時間少しで頂上に達する。

今左手に進む。5分ほどであずま屋があり、オクトリカブトの群生地となっている。付近にはカツラ、サワグルミ、トチノキ、キハダ、ベニイタヤ、ハルニレ、シナノキなどの見事な巨木があり、営林署の樹齢説明板がつけられていて楽しい。巨木を眺めながら20分ほど登ると雑木の林間は終わりスギ植林となる。スギ植林が終わるとブナ、ダケカンバ林のチシマザサ地帯となり頂上まで続く。十和利山頂上からの眺望は素晴らしく外輪山中屈指といって過言でない。十和田湖が眼前に迫り、十和田山（とわだやま）や戸来岳の近景、八甲田山や岩木山の遠景との調和もよく感嘆の声が聞かれる。また南を向けば眼下に迷ヶ平や大黒森の牧野、遠くは岩手山、八幡平までの山なみが一望される。

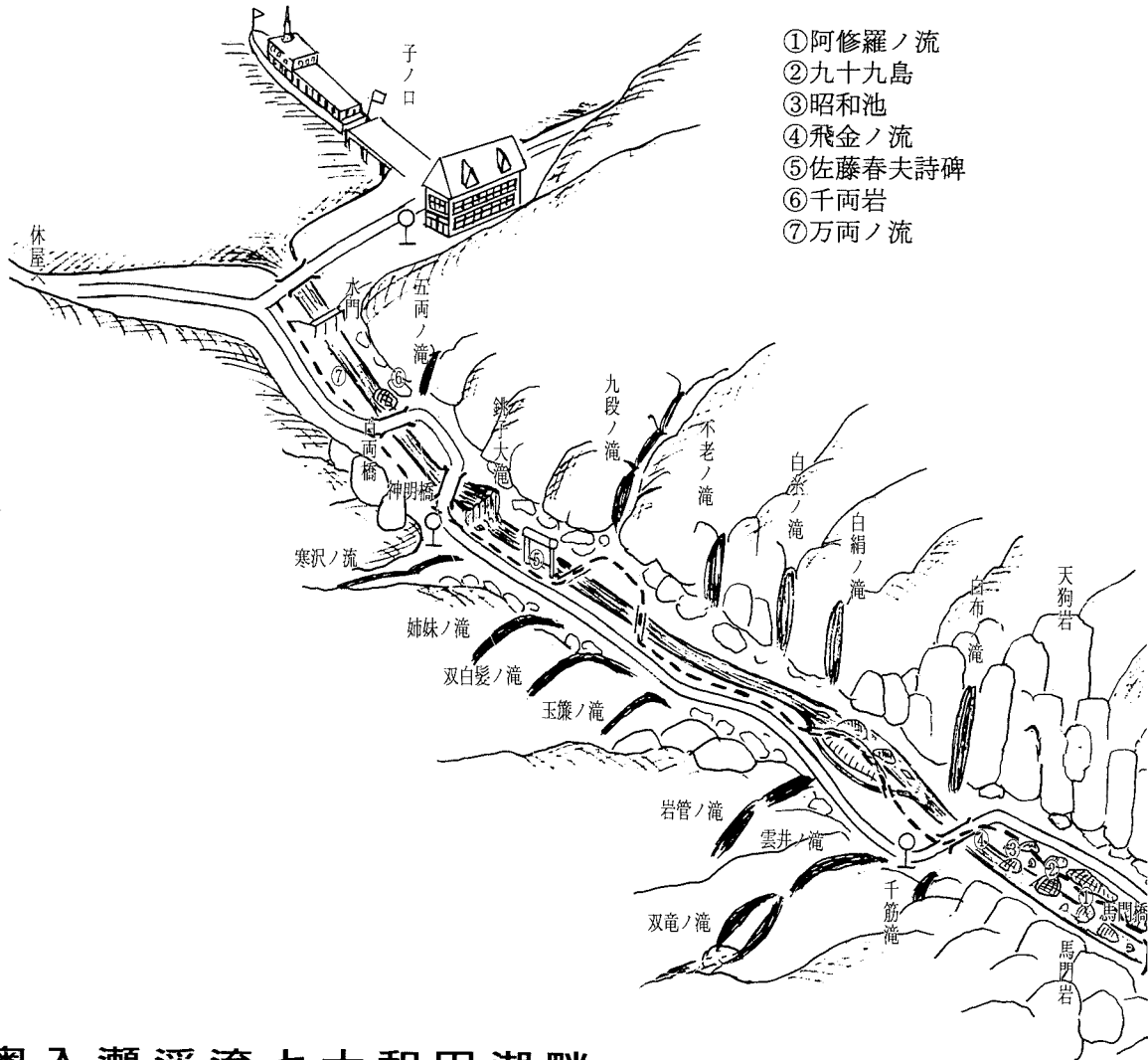
頂上から三ツ岳方面への縦走路は西側登山道直下に、北へ真っすぐ延びる分岐がある。案内板はないがチシマザサの刈り払われた一本道で、45分でアグリ坂交叉のT字路に達する。アグリ坂からの緊急下山、大文字山・三ツ岳方面へのコースについては既に述べた。なお、このコースをとるときは、下山地点に車を回しておいた方がよい。

◆メモ アグリ坂コース及び縦走コースはチシマザサの茂る難コースだったが、昭和63年7月に三戸営林署、新郷村役場及び林業関係者がササを刈り払った。今後2～3年は、一般の登山者にとっても道は分かるであろうが、時間には余裕をもって行くこと。



奥入瀬溪流 ガイド図

十和田湖



- ①阿修羅ノ流
- ②九十九島
- ③昭和池
- ④飛金ノ流
- ⑤佐藤春夫詩碑
- ⑥千両岩
- ⑦万両ノ流

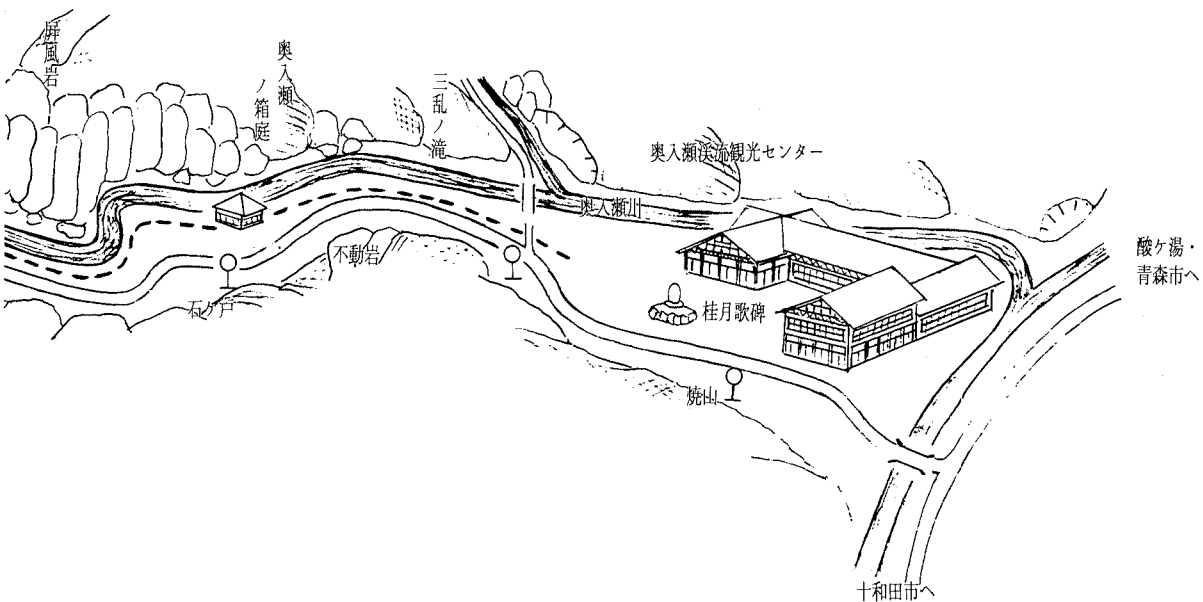
奥入瀬溪流と十和田湖畔

奥入瀬溪流と十和田湖畔は、草木の伐採が禁ぜられ自然がよく残っている。溪流はほどよい広さで流れがゆるやかなため、溪畔に繁茂する植物は変化に富む。樹齢200～300年のブナ、カツラ、サワグルミ、トチ、ミズナラ、ケヤキ、ドロノキ、イタヤカエデなどの高木、オオカメノキ、オオバクロモジ、マルバマンサク、タニウ

ツギ、ムラサキヤシオツツジ、エゾアジサイなどの低木、マイヅルソウ、チゴユリ、ユキザサ、トリアシショウマ、ヤグルマソウ、モミジガサ、ギンリョウソウなどの下草、ランとしてはオニノヤガラ、ショウキラン、アケボノシュスラン、コケイラン、コイチヨウラン、キソチドリ、オオヤマサギソウ、アオチドリ、それに多くのシダ類は春の芽吹き、夏の濃緑、秋の紅葉を彩り、こけむした岩、清冽な流れとともに大自然の妙を展開している。

奥入瀬は空中湿度が高く、老木が多いので着生植物も多い。ミヤマノキシノブ、ホテイシダ、オシャグジデンド、イワオモダカ、シノブ、ビロードシダなどのシダ類が見られ、寄生木のヤシャビシャクもまれでない。さらに注目されるのは、フガクスズムシ、フジチドリ、ヒナチドリなどの着生ランが見られることである。これらのランは巨木の高所に着生するので、人目にはつきにくい。しかし森林の伐採が進むなか、ここだけはいつまでも残される原生林であり、貴重な植物は生き続けることができるのである。

◆メモ 「歩け奥入瀬三里半」の遊歩道散策は、流れに遡って歩くのが面白い。全部で4時間ほどかかる。焼山～石ヶ戸間は省き、石ヶ戸～子ノ口間(8.4km、2時間30分)を歩く人が多い。





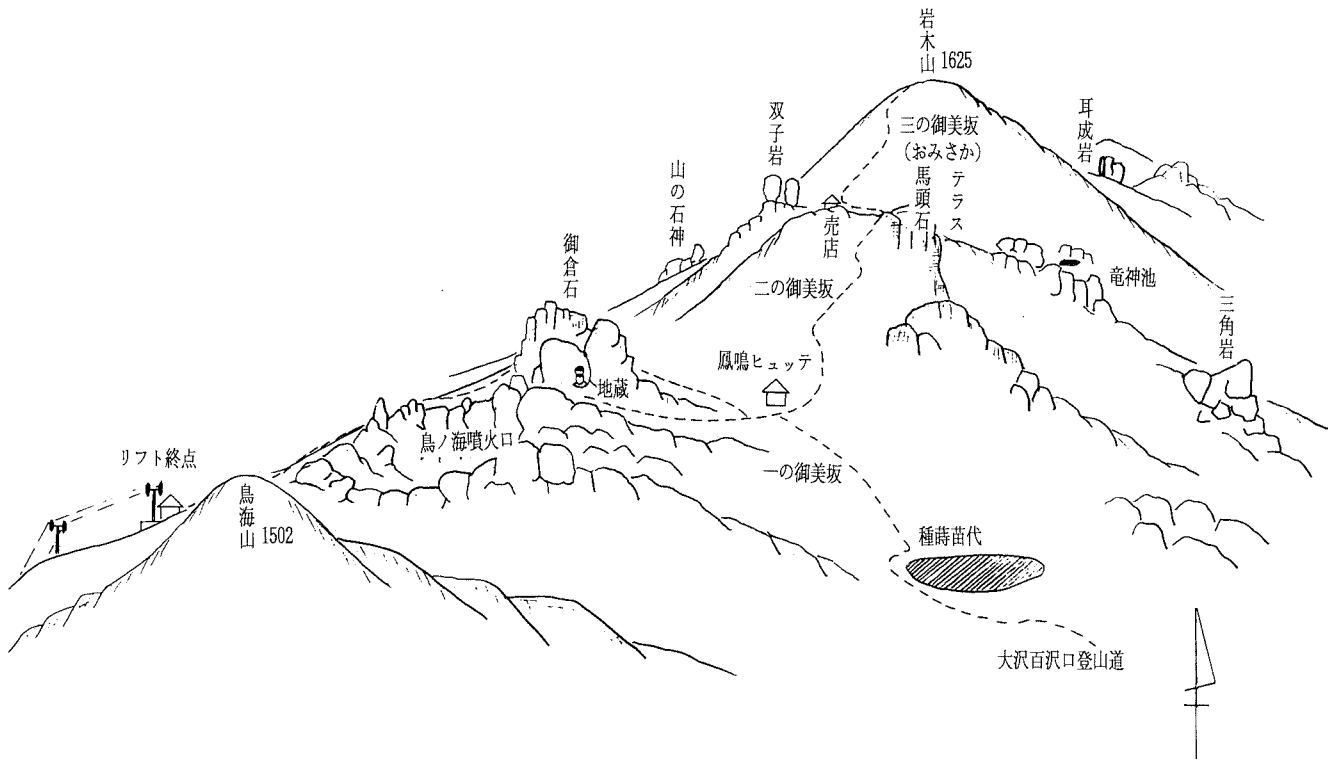
弘西地区の山

岩木山

岩木山（1625m）は、岩木スカイラインができてすっかり一般化し、誰でも登れる山となった。スカイラインの終点が八合目。リフトを乗りつぐと一気に九合目まで行ける。リフトを降り山頂へ向かって手前が鳥ノ海噴火口で、登山道は噴火口を左にまいている。噴火口周辺にはイワヒゲ、イワウメ、イワオトギリ、コメバツガザクラ、ナガバツガザクラなどが生えている。

ミヤマキンバイ、ヤマガラシの生えている登山道を登ると、すぐ鳳鳴（ほうめい）ヒュッテに着く。ここは百沢口からの登山道と合流している。以前はこの付近にも名花ミチノクコザクラがたくさん見られたが、今は踏まれたり、採られたりして、すっかり影が薄くなってしまった。ミチノクコザクラを見るには、百沢口を種蒔苗代（たねまきなわしろ）から錫杖清水（しゃくじょうしみず）の方へ少し下るとよい。雪どけを追って、次々と美しい花を咲かせている。付近はお花畑が広がり、ミヤマキンバイ、シラネニンジン、ウコンウツギ、アカモノ、ゴゼンタチバナ、イ

岩木山ガイド図



ワツツジ、ハクサンチドリなども見られる。岩木山の高山性ランとしては、ハクサンチドリのほかにフタバラン、ミヤマフタバラン、アリドオシラン、ヒメミヤマウズラなどもあるが、登山道からは見つけにくい。

鳳鳴ヒュッテの上は、急な岩山の道（御美坂・おみさか）が続く。植物はガンコウラン、マルバシモツケ、シラネニンジン、コケモモ、ミヤマキンバイ、ヤマハハコ、ミヤマアカバナ、ヒメアカバナ、イワウメなどが見られる。リフト終点から頂上まではゆっくり登って約40分で着く。山頂には岩木山神社奥宮がある。独立峰で眺望をさまざまげるものはなく、360度の展望が素晴らしい。このコースでミチノクコザクラを見るには、6月上～中旬がよい。

暗門の滝

津軽の母・岩木川の上流にかかる三段の長飛「暗門の滝」は、かつては容易に人をよせつけぬ秘境だった。しかし昭和56年、県立の自然公園に指定されてから溪流ぞいにコンクリートの遊歩道がつくられ、簡単に行けるハイキングコースとなった。現在、弘西林道（今は県道・岩崎・西目屋・弘前線）は目屋から暗門大橋に向かって舗装工事がすすめられている。

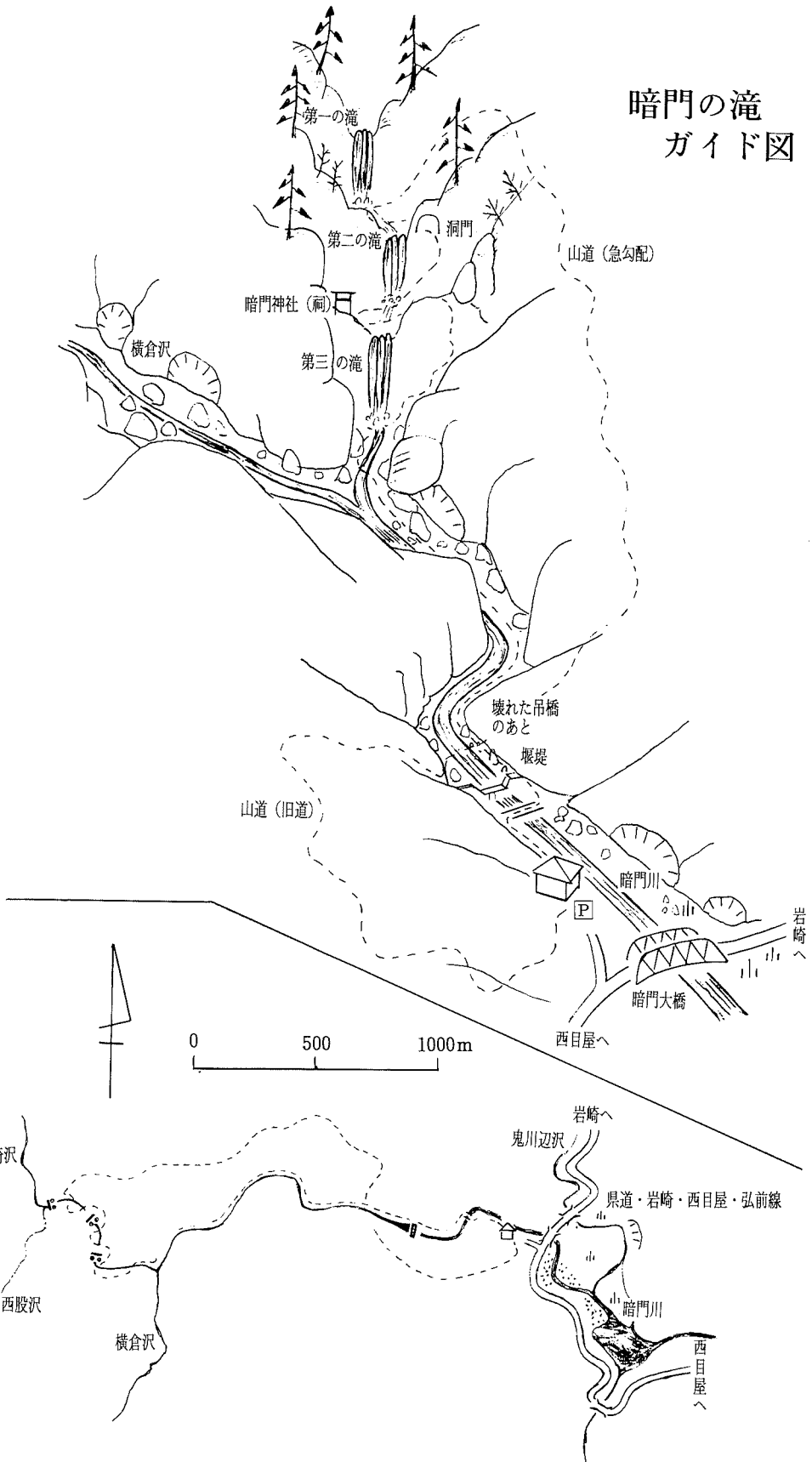
暗門大橋駐車場から最初の滝（第三の滝）までは40分前後である。滝の左手に魚止めの滝、赤樋（あかとい；遅くまで雪崩が残る急峻な沢）を眺め、以下第二の滝をへて第一の滝まで、1時間少して誰でも行ける。第三の滝と第二の滝の間には、暗門神社（祠）がある。一番下の滝を第三とは奇異に思うかもしれないが、地図では源流から1、2、3と呼び、上流から下流を見て右岸、左岸というのが決まり。

ごうごうと響びかせて次々にあらわれる三段の滝、もうもうたる滝しぶき、岩上に生えるキタゴヨウ、ナナカマド、ブナ、懸崖するヤマモミジ、ハウチワカエデなど、男性的溪流美は訪問者を魅了する。一帯はウチョウラン、コアニチドリ、ショウキラン、トンボソウ、オオヤマサギソウ、オキノヤガラ、エゾスズラン、アケボノシュスラン、コイチヨウラン、イワウチワ、アオモリマンテマ、ツガルミセバヤ、チャボゼキショウ、ミヤマママコナの生育地だが、手近なところは採られて見られないのが残念。

暗門の滝はハイキングコースとなったが、深山の秘境であることにはかわりはない。水量の多いときは溪流の水をこぐこともある。また土砂崩れや増水の危険も伴うので、油断してはならない。ここの訪問は納涼看瀑としゃれて、梅雨明けの7月下旬から、台風のまだこない8月下旬をおすすめしたい。

◆メモ 遊歩道のなかったときは、往きは川こぎ、帰りは山道をとる人が多かった。しかし山道は急勾配で疲れる。遊歩道のできた現在、通る人はほとんど見かけない。

暗門の滝 ガイド図



十二湖

安らぎの森・十二湖は、秋田県境に近い西津軽郡岩崎村の海岸から山あいを2 kmほど入ったところにある。東西2 km、南北3 kmの台地となっていて、その中には「青森県私たちの名水」の一つ沸壺（わきつぼ）ノ池をはじめ、神秘のコバルトブルー・青池、日暮（ひぐらし）ノ池など大小33の湖沼が点在している。ビジターセンター、養魚場また遊歩道やキャンプ場も整備されていて、新緑から紅葉まで美しい自然と森林リクリエーションを求める人々がたえない。

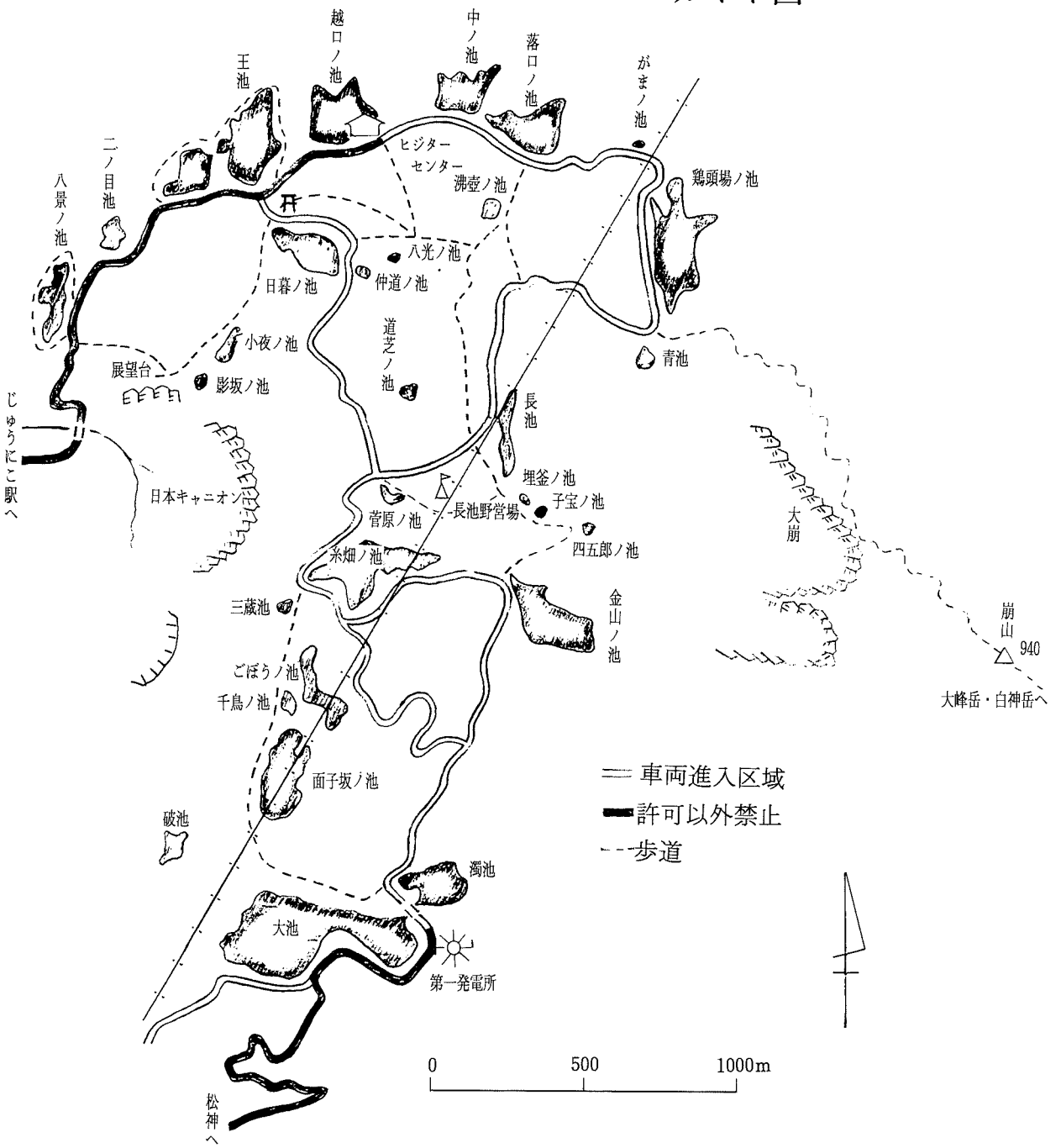
十二湖の森は、自然休養林・国立公園として原生林が保護されている。湖沼の周囲にはヒバ、ブナ、カエデ、ミズナラ、カツラ、サワグルミ、トチノキ、ホオノキ、ナナカマドなどの高木をはじめ、エゴノキ、ガマズミ、オオカメノキ、ムラサキヤシオツツジ、エゾアジサイ、ヒメアオキ、タニウツギなどの低木、またシダ類も多く、暖地性のイイギリ、アワブキ、カラスザンショウも見られ非常に変化に富んでいる。

ランの種類も多く、山地一帯にはノビネチドリ、トンボソウ、キソチドリ、オオヤマサギソウ、ササバギラン、カキラン、トキソウ、ネジバナ、コケイラン、アケボノシュスラン、ミヤマウズラ、クモキリソウ、ジガバチソウ、サルメンエビネ、サワランなどの他、ミヤマモジズリ、ツチアケビ、ベニシュスラン、ヒトツボクロ、ナツエビネ、ハクウンランなどの珍しいランが生えている。

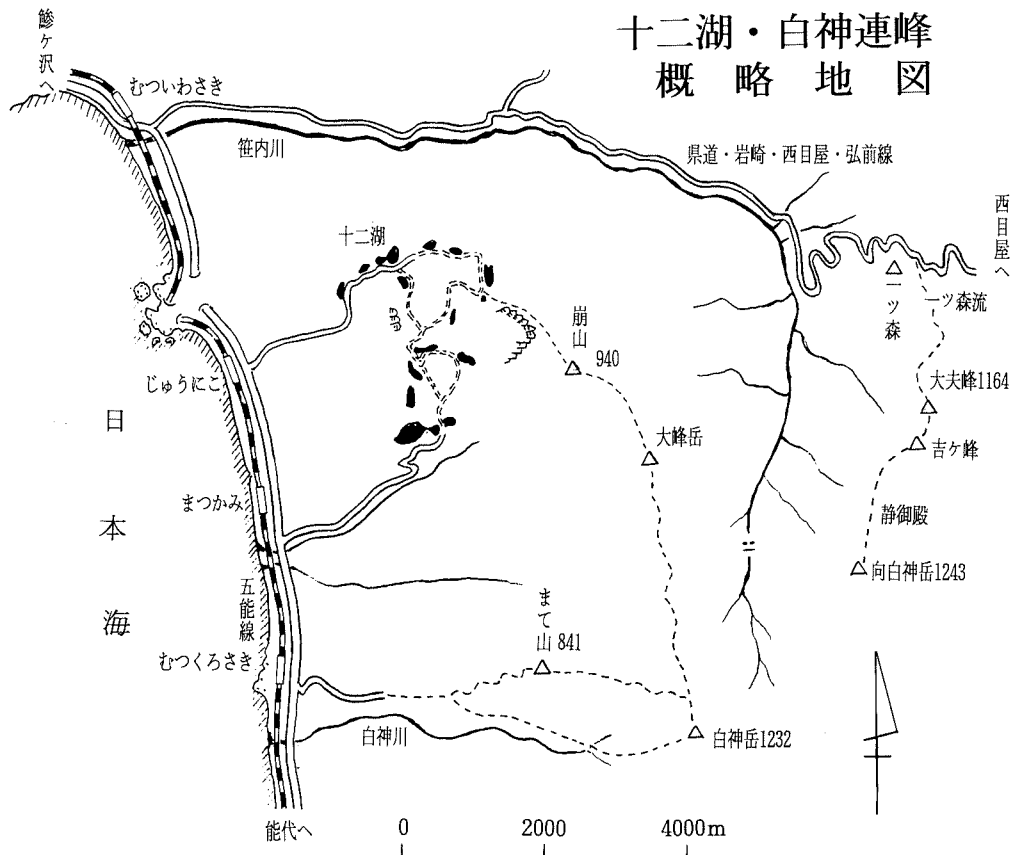
十二湖の目玉の一つに奇勝・日本キャニオンがある。シラスの崩壊侵食による断崖は高さ100～150m、幅は約400mある。また日暮ノ池、鶏頭場（けとば）ノ池などからよく見える大きな崩れが大崩である。高さ400m、幅は約500mある。青池に登山道があり、1時間ほどで崩壊壁頂上（山陵の肩）に着く。頂上に立てば足がすくむが、一度は登りたい絶景である。崩山（940m）まではさらに1時間かかり（眺望はきかない）、大峰岳をへて白神岳への登山道がある。

◆メモ 一般車両進入可能はビジターセンターのある越口ノ池まで。なお、十二湖周囲のヤブにはマムシが多いのでくれぐれも注意すること。もっともマムシが多いということは、それだけ自然度が残っている証拠でもある。

十二湖 ガイド図



十二湖・白神連峰 概略地図



白神連峰

●登山道の概要

白神連峰とは日本海側の秋田県境に近い青森県第三の高峰で、白神岳(しらかみだけ・1232m)、向白神岳(むかいしらかみだけ・1243m)および幾つかの無名のピークからなっている山の総称である。しかし単に白神岳といえば、向白神を含めない。

白神岳への登山道としては、鯉山(まてやま)コース、二股コース、大峰コースの3つがある。昭和56年再整備の大峰コースは距離があり一般的とはいえない。ここでは最もポピュラーな鯉山コースと、健脚者向き二股コースを紹介する。

向白神岳への登山道は昭和39~40年に全山縦走路として一度整備された。しかし距離があること、また水場がないため登山者が少なく、その後年々荒れチシマザサやダケカンバが覆い茂り、道はほとんど消えてしまった。現在向白神岳へは簡単には行けないが植物学的に興味深いので、イツ森から静御殿(しずかごてん)までの概要を参考として紹介したい。

● 蛭山(まてやま)コース

岩崎村黒崎口より入る。国道101号線の黒崎バイパスに（五能線むつくろさき駅の南）登山口への標識がある。国道より約3km入ったところが登山口で、駐車場もあり10台くらいは置ける。この付近は白神平と言われる高原で、昭和25年頃までは牛や馬の草刈場であったというが、今はマツ、スギが植林されている。

ツガルフジ、ヤマブキノユマ、トチバニンジン、ウゴツクバネウツギ、ガマズミ、ヤマボウシを眺めながら進むと、15分ほどで小さな崩壊地に出る。ヒバと雑木の混交林をイワナシ、イワウチワ、キソチドリ、コアツモリソウ、アケボノシユスラン、ミヤマウズラなどを探しながら進むと、35～40分で案内板の立っている蛭山・二股分岐に着く。

ここからは二股コースと蛭山コースに分かれる。二股コースは健脚者コース。道も荒れているので、初めての人は迷わず蛭山コースに行く。蛭山コースが一番新しいコースで道がよく整備されている。ヒバ・ブナ混交林を、右手の沢をトラバース気味に行くと、約20分で水場がある。キャンプも可能。この上はジグザグの急な登りで、ヒバが消えブナ純林となり、さらに60分ほどで蛭山分岐に達する。蛭山の頂上へは2～3分で行ける。ただし樹木のために眺望はきかない。

蛭山分岐を右折、尾根づたいにブナ林をさらに1時間40分ほど行くと、十二湖からの大峰コースと合流する。あとはお花畑となっている稜線の草原を15分ぐらい進むと頂上だ。頂上直下（50mほど下る）には水場がある。お花畑には、ニッコウキスゲ、エゾイブキトラノオ、トウゲブキ、チシマフウロ、オオシュロソウ、コケモモ、ゴゼンタチバナ、ツリガネニンジン（ツリガネニンジンは地域により変異が多いがフクシマシャジンに近いという）、キオン、ミヤマセンキュウ、ウメバチソウなどが見られる。

頂上には昭和60年、岩崎村と地元および全国の山仲間たちのカンパで建てられた立派な避難小屋がある。頂上からは東に秋田県境の山なみと向白神岳、そして岩木山や八甲田連峰が望まれ、西には日本海とその海岸線がはてしない。遙か水平線に沈む夕日は美しく、泊まりがけで登る人もいる。

◆メ モ 白神岳のお花畑は雪田がなく、範囲も規模も小さい。火山性の山で地層の新しい八甲田山や岩木山を見なれた人にとっては、物足りないかもしれない。しかし、ここは地層が古いということをお頭において理解されたい。

●二股コース

鯉山・二股分岐を直進、ヒバ・ブナ混交の原生林を行く。昔、木炭を運搬するのに作られたレール状の朽ちた^{かけはし}棧が珍しい。鯉山より派生する小さな沢2つを越え、35分ほどで一ノ沢（上木戸沢）に着く。道は沢を渡り右下に続く。さらに15分で中ぐらゐの沢を1つ越え、10分で二ノ沢（フナノ沢）に沿う。小さな崩壊地をトラバース、二ノ沢を渡る。さらに20分で、右手に白神川本流への分岐がある。この分岐は見落とししやすいので注意を要する（見落として進むと、70～80mで沢に出、崩壊地となり道は消える）。分岐を下り白神川本流を右手に、サワグルミの木の赤いスプレーを目印に小さな沢を越え直進すると、すぐ二股に着く。ここより上は頂上まで水場がないので、必ず水を補給すること。

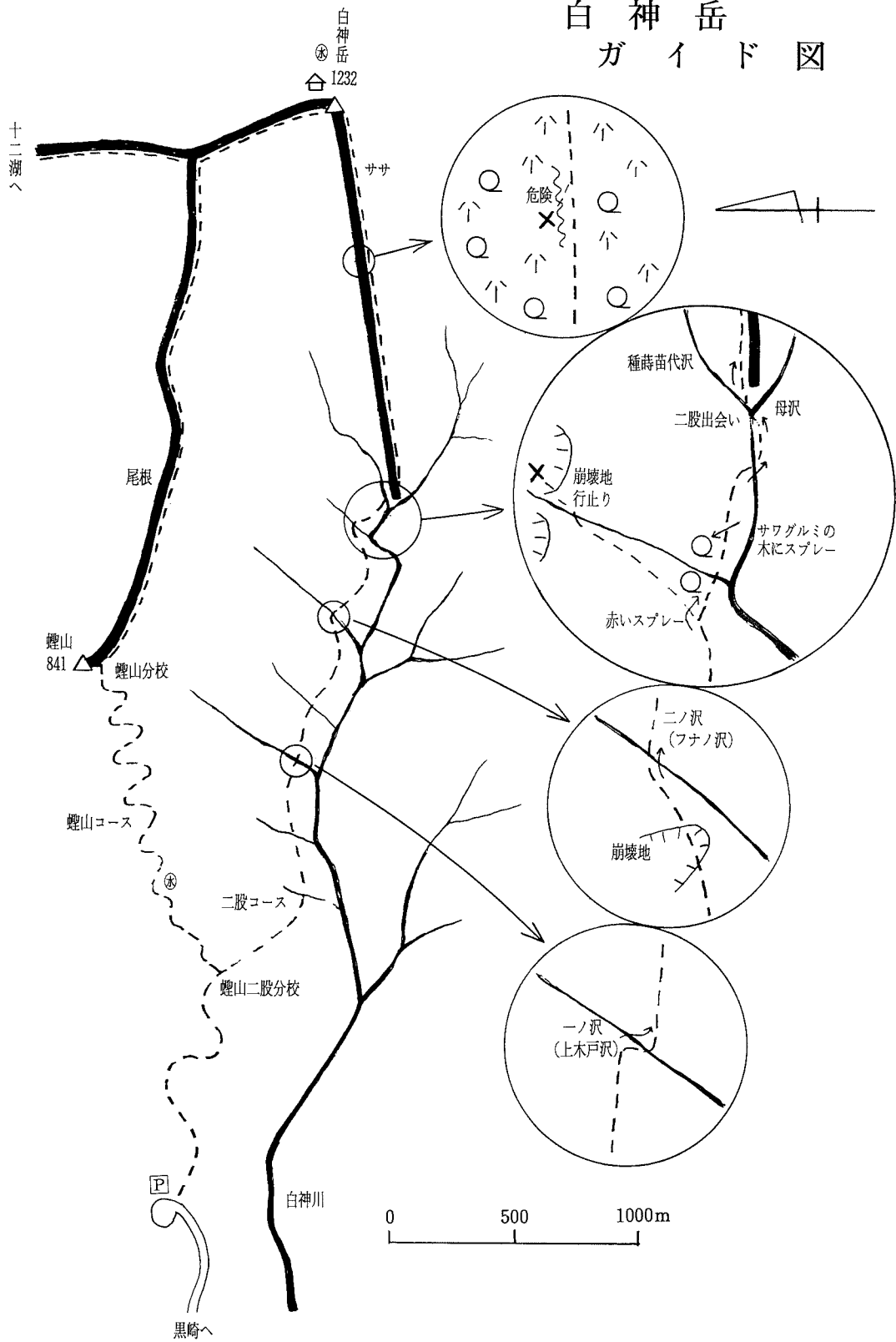
いよいよ平均斜度30度（急なところは70度）、標高差約750mの直登が始まる。ロープの取り付けられた急峻なヤセ尾根を、一步一步登る。ヒバ・ブナ混交林の足もとには、イワウチワの見事な群落が続く。標高約600mでヒバは少なくなりブナ帯となる。イワウチワの群落はまだ延々と続く。約800mでチシマザサが出現、とたんにイワウチワは消える。チシマザサをかき分け、しっかりと握り、足もとを確かめ前進する。体力を消耗するので、急いではならない。高度を増すにしたがってブナも小振りとなり、かわってミネカエデ、ミヤマナラ、ミネヤナギ、ミヤマハンノキ、ハクサンシャクナゲ、イチイ、ナナカマド、ミヤマホツツジなどの低木が多くなる。木々の間に見えかくれする衝立状の山なみ、眼下の日本海方面を振りかえって登るうち、次第に視界も開けロープの取り付けられた頂上に躍り出る。二股から2時間～2時間30分かかる。登頂の満足感は、全身くたくたの疲れを忘れさせてなお余りある。

●向白神岳（静御殿）

向白神岳（むかいしらかみだけ・1243m）へ登るには、旧弘西林道（現在、県道岩崎・西目屋・弘前線）の一ツ森から入る。岩崎側から入ると、一ツ森の峠を越して200mほどの左手に、東北電力の避難小屋があり目印となる。登山口はさらに100mほど進んだ右側にある。岩崎中学校で立てた小さい標識（杭）があるが、ササが茂っているので注意しないと見落としてしまう。

この登山道は昭和39年～40年に、一ツ森～向白神岳～白神岳～大峰岳～十二湖への縦走路として整備された。昭和41年には国体登山の予選会を開催、また昭和42年にはインターハイの白神縦走路ともなっている。しかしその後、全く手入れがされ

白神岳 ガイド図



ず、また水場がないため入山者も少なく、年々荒れてチシマザサが覆い茂ってしまった。以下、以前の山行記録から紹介する。

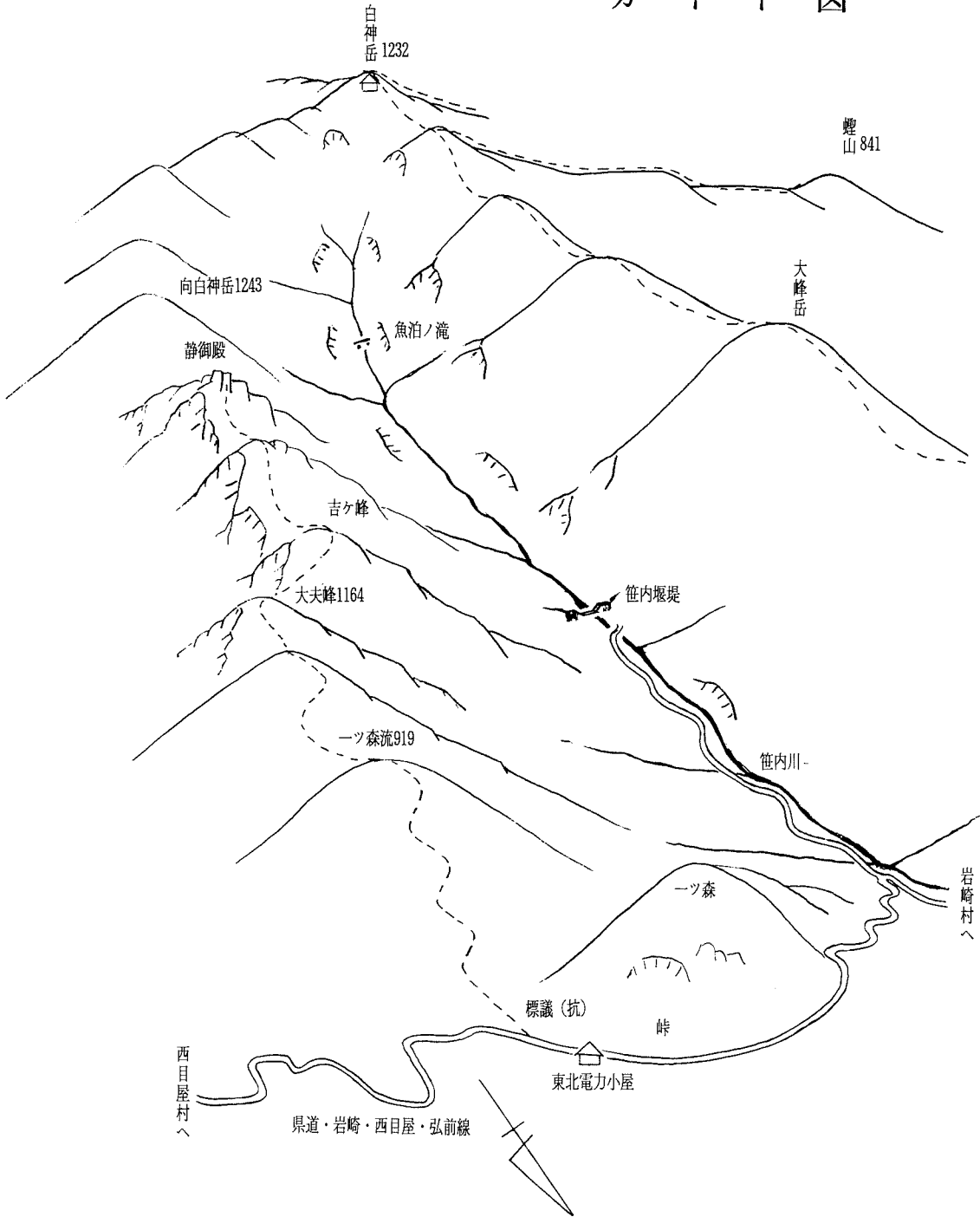
キソチドリ、オオヤマサギソウ、クモキリソウ、コイチヨウランなどを見ながら、ミヤマノキシノブ、ホテイソダ、フガクスズムシも着生しているブナ原生林に行く。チシマザサが茂り、沢ぞいの起伏と勾配がきつい。また倒木も多く相当な難路だ。登ること約3時間で大夫峰（“だふみね”、また“たっふほう”とも）に着く。大夫峰から静御殿（しずかごてん）までの尾根は、所々ガレ場となっていて、センジュガンピ、タカネナデシコ、ツリガネニンジン、タテヤマウツボグサ、ハクサンサイコ、ヒメナツトウダイ、オニシオガマ、エゾシオガマ、ハクサンチドリ、ハクサンシャクナゲ、ミヤマホツツジ、オオタカネバラなどが生えている。しかしチシマザサと矮性低木が密生し、静御殿まではさらに3時間かかった。

静御殿は向白神岳の少し手前にある岩場をいう。「静かな時は御殿にいる心地」という意味で、いつも霧がわいてめったにその姿を現わさないが、ひとたび晴れると最も眺望がよく、咲き誇る花が目を楽しませることから、呼ばれるようになったという。南北は吹き通し、東西は断崖状となっている。面白いことに頂上だけは平らで幅（東西）1.5～2m、長さ（南北）15～20mある。ここにはエゾハナシノブ、シコタンソウ、イワキンバイ、ミヤマキンバイ、リシリシノブ、アオモリマンテマ、ミヤママンネングサ、イブキジャコウソウ、ノハラクサフジ、モイワシャジン、ヤママルリトラノオ、ツガルミセバヤ、ミヤマアズマギク、ウチョウランなどが見られた。

この道はササが茂り道がはっきりせず、きついヤブこぎで相当の体力を要する。距離もあり、時間も長くなる（往復12時間以上かかる）。また熊が出るので案内人なしでの入山は危険である。

◆メ モ その後このコースはますますササが茂り、今ではほとんど道が消えたのは残念。なお吉ヶ峰とは、昭和47年東北大学の吉岡邦二氏がここまで踏破・調査されたので、呼ばれるようになった見晴らしよいピークをいう。このコースについては、竹越恵蔵氏（弘前クライマーズクラブ同人）に負うところが多かったことを付記する。

向白神岳（静御殿） ガイド図



下北半島の山

縫道石山

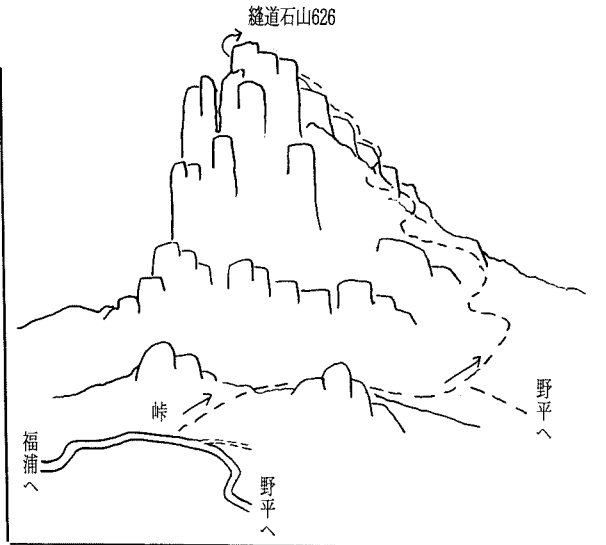
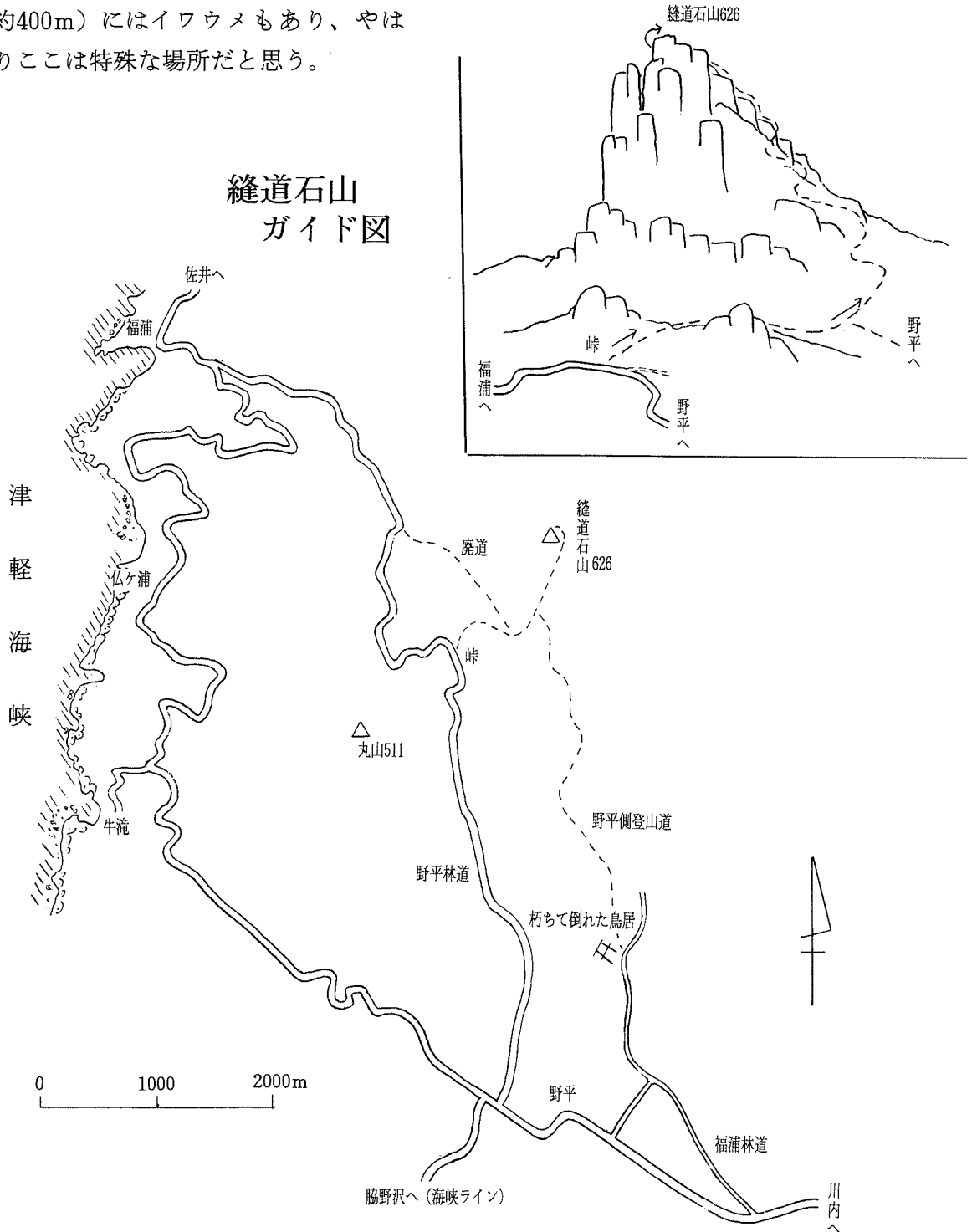
下北半島の西海岸、名勝仏ヶ浦の東にそびえる縫道石山（ぬまどういしやま・626m。古名は入道岩）は、国の天然記念物「特殊植物群落」の山として知られている。縫道石山は石英班岩の“岩塊”で、頂上付近の岩には地衣類の「オオウラヒダイワタケ」が、他のイワタケ類と共にへばりついている。オオウラヒダイワタケはシベリア、アラスカ、アリューシャンに分布することから、氷河時代の生残りと考えられているもので学術的に貴重である。現在、採集はもちろん、ロッククライミングも禁止されている。

縫道石山へ登るには、野平（のだい）口が使われていたが、野平部落からの入り口が分かりにくい。むしろ野平林道の峠にある登山道から入るのが分かりやすい。峠は少し広がっていて駐車スペースもある。営林署の山火事注意の標識（布幕）が目印となる。右下への伐採道路をさけて左の小道を20分ぐらい行くと、いったん沢越えとなり、まもなく野平からの道と合流する。そこを左折し進むとすぐ岩壁東南下に出る。2～3か所岩下への踏み跡があるが、まどわされずに右手へ進む。最後は岩壁北東肩の矮小ヒバに沿ってよじると頂上に着く。峠の登山口より、テリハタチツボスミレ、イワナシ、マイヅルソウ、ギンリョウソウ、ヒメイチゲ、ツクバナソウ、ズダヤクシュ、ツルアリドウシ、トチバニンジン、クルマバソウ、オオサクラソウ、オオヤマサギソウ、エゾスズラン、フタバラン、アオフタバラン、ツチアケビ、ハクウンラン、ミヤマウズラ、アケボノシュスラン、イチヨウラン、ジガバチソウ、サルメンエビネ、ヒメホテイランなどを探しながら、ゆっくり登って1時間30分ぐらいかかる。標識や案内板はいっさいないが、よく注意すれば一本道なので迷うことはない。頂上付近には、ゴゼンタチバナ、コメツツジ、コケモモ、ミヤマダイコンソウ、ホザキナナカマド、ネズ、ノギラン、ミネザクラ、ミヤマビャクシン、コタヌキランなどが生えている。

縫道石山に登れば、特殊植物群落の「特殊」の意味が分かる。この岩山は登山道のある北東の肩を除けば、あとはすべて直立200mの断崖である。頂上は比較的平らで、平たい岩が6～7枚ある。岩以外にあるのは、へばりついたオオウラヒダイワタケと他の2～3種のイワタケ類、そして炎天だけだ。じりじりと岩をも焦がす夏の炎天、万物を氷結する冬の寒風、そして石英班岩。特殊な環境だからこそ、特

殊なオオウラヒダイワタケが生きながらえてきたのだろう。北側の沢（海拔約400m）にはイワウメもあり、やはりここは特殊な場所だと思う。

縫道石山 ガイド図



恐山と釜臥山

恐山（おそれざん。古くは、おそれやま）は、イタコの口よせの霊場として全国に名高いが、恐山という山はない。ここで目につくのはイソツツジ、ハクサンシャクナゲ、ウラジロヨウラク、アカミノイヌツゲで、ことにイソツツジの大群落は見事である。菅江真澄が初めて恐山を訪れたのは、寛政四年（1792年）旧10月30日であった。「檜（ヒバのこと）、石楠花（ハクサンシャクナゲ）の生ひまじり、雪浅きかたには、つげ（アカミノイヌツゲ）、ゆづる葉（エゾユズリハ）、高野つゝじ（イソツツジ）、真辟葛（マサキノカズラ、ツタの類）しげう生ひ茂りたり」と、克明に観察している。ツツジ科の植物は酸性土壌を好み、硫気を噴出して異様なムードを漂わせる霊地には、よくマッチしていると思う。

霊場境内付近の説明は省く。ここでは宇曾利湖（うそりこ。国土地理院の地図では宇曾利山湖となっているが、地元では昔から山をつける人はいない）一周の夏の散策について述べてみる。霊場手前の湯坂温泉「石楠花荘」向いの駐車場から、旧軌道跡の遊歩道が湖畔に沿って延びている。ヒバ、サワグルミ、ヤチダモ、バツコヤナギ、ヤマモミジ、ノリウツギなどの茂る混交林を進む。無数の小さな沢が湖に流れ込み、両側はミズバショウの群落が続く。早春にはさぞ見事であろう。足もとに生えるニッコウシダは、県内では珍しい。ただこのニッコウシダは、下部に付く羽片があまり短くならないのが基本種と違う。20分ほど進むと左手が低い岩盤状となり、ハリガネワラビが一面に生えていた。50分で林道は終わり湯坂上の山門脇から延びる林道と合流する。（林道は5月下旬から6月一杯、ウグイの産卵期に閉鎖される。車は特別許可が必要なので注意）。

この辺から林道が湖岸を離れ、湖の眺望がきかなくなる。小尽（こづくし）沢を越えると、三角形にそそり立つ大尽山が眼前に迫る。オオウバユリ、モミジカラマツ、シラネワラビなどを眺めながら進む。駐車場から1時間20分～30分で大尽沢橋に着く。ここから10分ほどで大尽山林道分岐。湖畔一周には右手の古い林道に行く。さらに20分ほどで、大きな沢・頭無（かしらなし）沢の橋である。この付近は植林20数年のスギ林となり単調。振りかえれば大尽山は背となり、林道が時計方向に回転しているのが分かる。20～30分でスギ植林が終わり、ブナを中心とした混交林となる。そして正面に鶏頭山（けいとうざん）が見えてくる。林道もここまで来れば、通る人がほとんどないとみえ、夏草がぼうぼう。ワラビやウツボグサも妙にわびしく、一瞬不安になるろうが、道はしっかりしているので大丈夫。さらに20分ほどで視界がパット開け、賽河原西端の湖畔に出る。駐車場から3時間かかる。

宇曾利湖湖畔および周辺の山には、ヒバ林に多いテリハタチツボスミレ、スミレサイシン、イワナシ、ムラサキヤシオツツジ、ヒメアオキなどのほかヒメカイウも見られる。ランとしてはトンボソウ、キソチドリ、オオヤマサギソウ、オニノヤガラ、ササバギラン、エゾスズラン、フタバラン、アケボノシュスラン、ミヤマウズラ、アリドオシラン、ヒメホテイラン、コケイラン、コイチヨウラン、クモキリソウ、ジガバチソウ、サルメンエビネ、キンセイラン、そしてギボウシランも生えている。

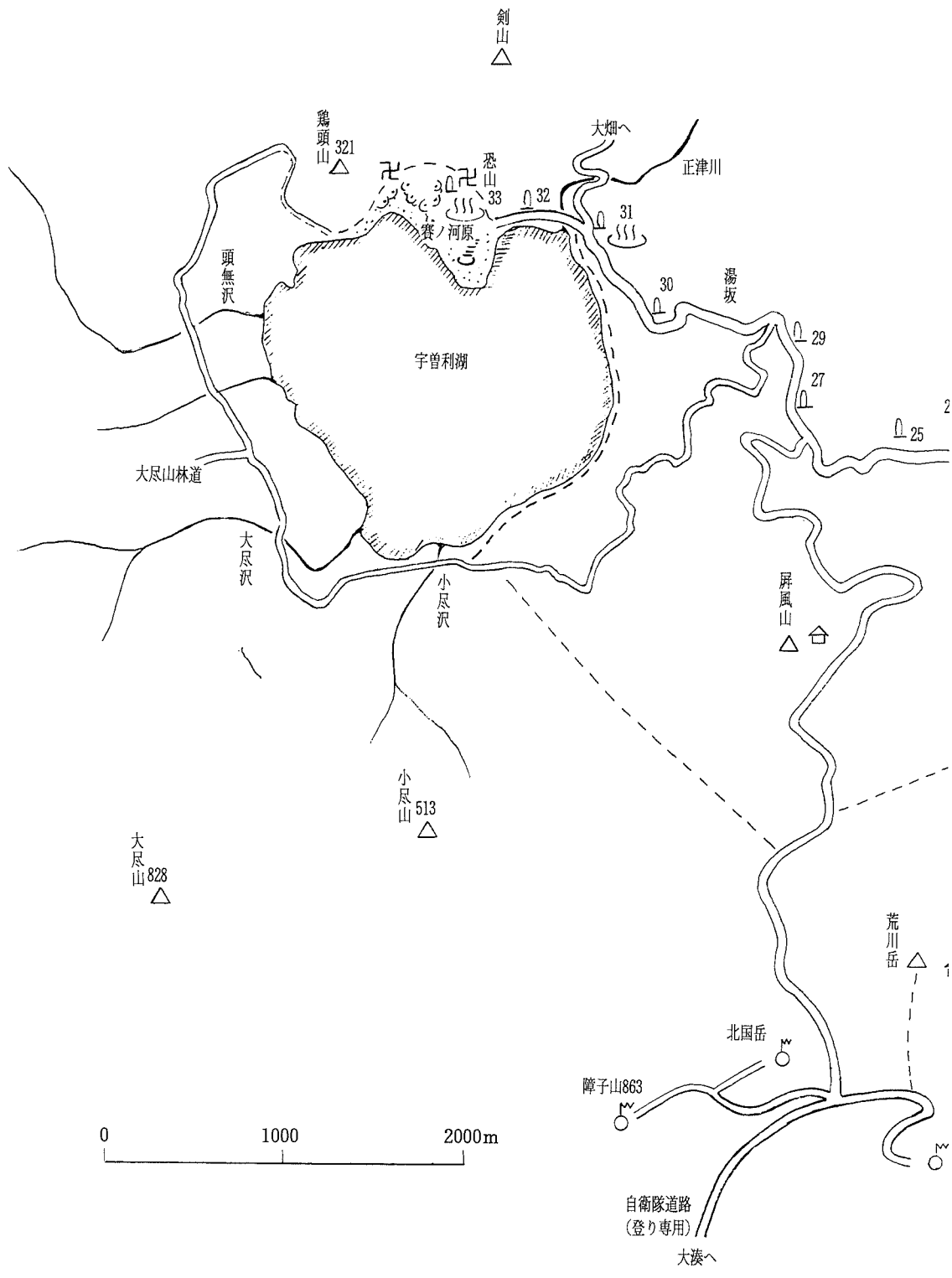
帰りは下北半島の最高峰釜臥山（かまぶせやま・879m）に寄ってみたい。恐山からむつ市へ向かって湯坂を登りつめると、釜臥山への右折路がある。砂利道を車で15分ほど進むと、展望台のある駐車場に着く。釜臥山は900mたらずの山だが、頂上付近がコメツツジの群生地となっている。他にマルバシモツケ、アカミノイヌツゲ、コケモモ、ミヤマキンバイ、ハクサンチドリなども見られる。しかし、ハイマツやアオモリトドマツはない。本来の頂上は海上自衛隊のレーダーサイトとなっている。展望台からは足もとに大湊湾、東に尻屋崎と太平洋、また津軽海峡をはさんで北海道が望まれ、本州北端の情緒が味わえる。

◆メ モ 菅江真澄（すがえ・ますみ）

三河の国生まれの紀行家。30歳のとき木曾路から日本海側に出て北上、主にみちのく、蝦夷地の風俗を書きつづった。当時、天明の大飢饉の後だったがよく歩き、青森県内至らぬところはないくらいである。1829年（文政12年）、秋田県角館で客死。76歳。

◆メ モ 大湊参道三十三番観世音菩薩

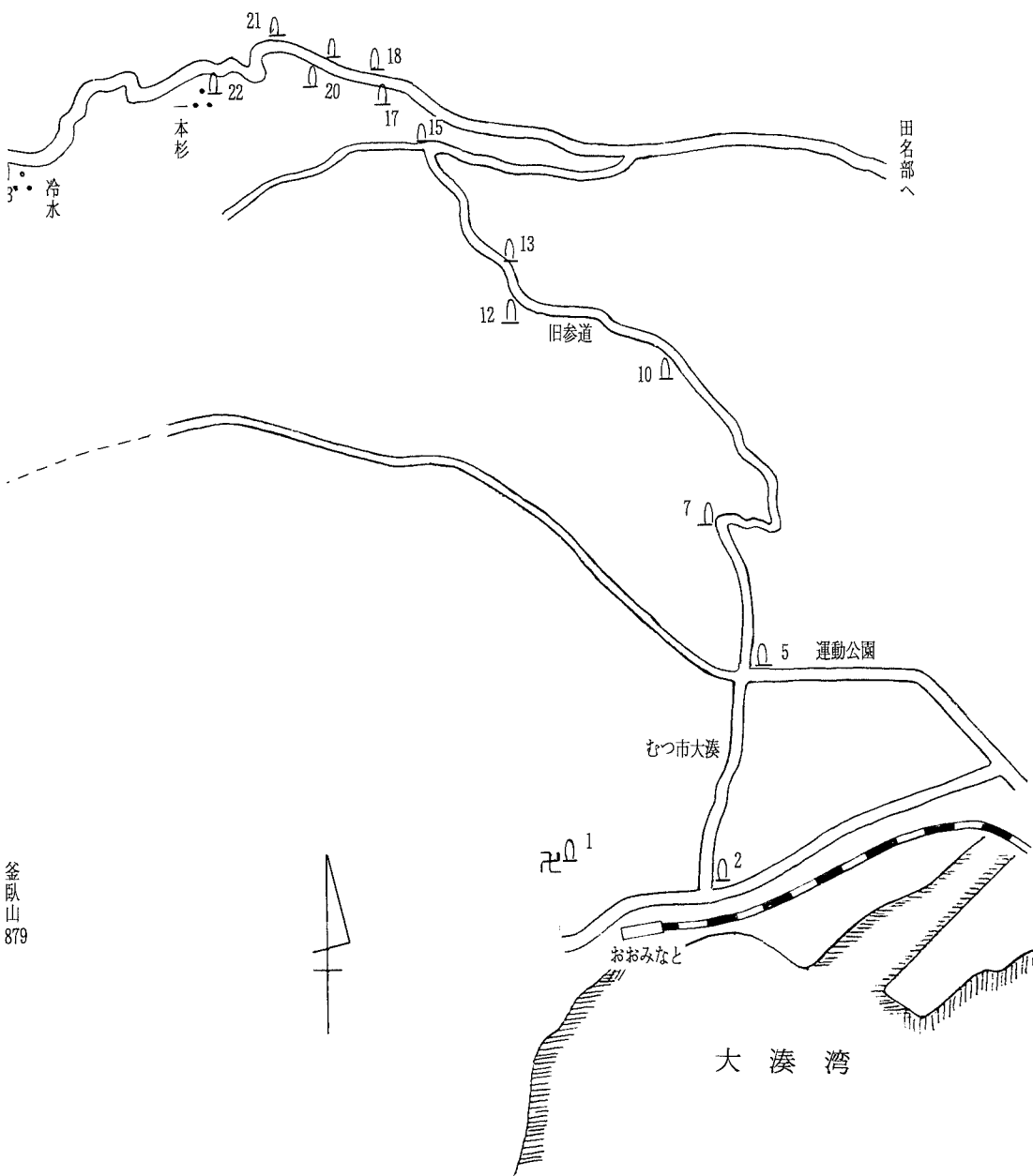
慈覚大師開山千年（文久元年・1861年）に寄進されたという三十三観音は、大湊常楽寺を起点とし旧大湊参道に沿ってある。時間のある方は、苔むした石像を探訪されるのも一興。



恐山と釜臥山

ガイド図

(番号は旧参道の観音)



釜臥山
879

「花と山のガイド」の参考資料

- 1) 小笠原松次郎：南八甲田山に遊ぶの記(上).風景, 6巻1号, 29~30頁, 1939.
- 2) 小笠原松次郎：南八甲田山に遊ぶの記(下).風景, 6巻3号, 30~35頁, 1939.
- 3) 沼田俊三：向白神岳を探る.青森県医師会報, 233号, 510~512頁, 1980.
- 4) 竹越恵蔵：日本の名山2.ぎょうせい, 82~83頁, 1983.
- 5) 笹森秀雄：わが山みち.あおもり草子, 24号, ぷりずむ, 1984.
- 6) 久本欽也：花の山旅紀行.山と溪谷社, 1985.
- 7) 青森ワンダーフォーゲルクラブ：自然と共に.青森ロータリークラブ, 1986.
- 8) 青森銀行山岳会：青森県の山.東奥日報社, 1987.
- 9) 西口正司：白神岳.岩崎村教育委員会, 1988.

植物写真を はじめたい人のために



キバナノコマノツメ(八甲田山)

植物写真の手引き書は沢山出版されています。ここでは書物にあまり書いていないことを、これからはじめたい人へのアドバイスとして、2～3述べてみます。

●ストロボ撮影について

植物の撮影にストロボを使用するかしないかは好みの問題である。再現された色に問題があるので嫌う人もいる。しかしランは自然光の不足なところに生えているものが多い。ストロボを使用した方がより効果的なこともあるので、私の使用方法に一言ふれてみたい。今キソチドリを例にとって撮影の方法を述べる。

キソチドリはうす暗い林内に生え、花が小さく色は地味な黄緑、しかも下向きに咲き花茎がたえず風にゆれる。風は撮影上最大の敵で、止むまで待つか一瞬の息づきをねらうしかない。しかし林内の露光不足と花の輪郭は、ストロボを補助光とすることによりカバーできる。

キソチドリのような植物の生態撮影には、なるべくこじんまりした個体で、斜面に生えているのを探すとよい。そしてやや下からねらうように三脚を固定、露出を花にあわせる。露出を花にあわせるのは、背景を入れると TTL がしばしば背景に一致し露出がアンダーとなるからである。今、自然光の露出が $f 8$ 、 $1/8$ 秒としよう。ストロボ撮影に先だち、自然光による撮影をまず行なう。露出計の値は絶対ではない。シャッタースピードは $1/8$ 秒とし、絞りを $1/2 \sim (1)$ 絞りずつ増減露光し何枚か撮る。

次にストロボ撮影に移る。私はガイドナンバーを 8.5 から 24 まで、マニュアルで調節できる小型ストロボを携帯使用した。ストロボをマニュアル、ガイドナンバー 8.5 の最低露光とし、延長コードを用いてやや斜め上方 60~70cm から（必ずしも上方のみとは限らないが）照射し撮影する。この場合自然光が右なら補助光は左と工夫する。シャッタースピードは一段早め、 $1/16$ 秒とし絞りだけを増減して何枚か撮る。シャッタースピードをストロボ同調指示のハイスピードにはしない。つまり自然光による露出を主とし、ストロボは花の陰影が少し出るぐらいの補助光とするのである。これがコツで自然光だけによるものとは一味違った、花の輪郭が浮き上がった写真が得られる。被写体とストロボの距離はいつも一定とし、ストロボの照射光量を経験的に体得するようにする。その適正距離はストロボメーターであらかじめ測定すればよいのだが、何度かやっているうちに直感でわかるようになる。

その他補助光にはレフ板、アンブレラ、多灯照射などあるが、山のなかでこれ等を一人でこなすのはたいへんだ。山ではなるべく器具を少なくし、しかも軽量であること、そして何よりもスピーデーに操作できることが望ましいわけで、一人で撮影する場合の一手段として述べてみた。

●絞りとシャッタースピード

よい写真を撮るにはよいレンズを使うこと。植物写真（花の造形的アップのことではない）も生育環境を生かすためには、よいレンズが必要。そしてある程度の絞り込みが必要となる。明るい山頂などで、よく目立つ花の場合は絞り込み、背景に山岳を入れるとシャープで、臨場感あふれる美しい写真が得られる。しかし植物撮影は、絞り込み必ずしもよい写真とはならない。とくに花が地味で、他の植物に囲まれている時は要注意。このような場合、植生を生かそうと構想を大きくしたり、欲張って大群落をねらったりすると失敗する。欲張るとどうしても絞りたくなり、絞り込むと周囲もシャープとなり、肝腎の植物が浮き上がらないのである。あくまでもケース・バイ・ケースだが、絞り込み必ずしも良結果を得ない場合のあることを、つねに念頭におくこと。しかし実際にはやってみないと実感として身につかず、私も失敗をくり返してやっと納得した。

次にシャッタースピードと手ブレについて。花の接写を手持ちで写すのは、熟練した人でもシャッタースピード1/250秒以上でないとは完全に止まらないという。しかも山では自然保護や足場の関係で、三脚を使えないこともある。私はシャッタースピードと手ブレについて、山へ行った際いろいろな場所で実験してみた。その結果1/15では、使いものになる写真は一枚も無かった。1/30では80%以上使いものにならない。個人差はあろうが、山での疲労度・足場の悪さを加味すれば、フリーハンドは1/60秒が限度と思う。

●大型カメラと小型カメラ

山の花の写真に凝りだすと、先人や大家の作品を参考にするようになる。先人への真似は進歩への第一歩だと思う。大いに真似をし、さらに自分の工夫、感覚を加味すれば一段の進歩につながるであろう。ただ誰でも少しは気になるのは、大型カメラとの比較ではないだろうか。先人大家との違いは、カメラが違うからではないかと考えるのは人の常か。私もハッセルブラッド、ゼンザブロニカ、ペンタ6×7と使ってみたが、期待したほどの成果は得られなかった。むしろ労多くして、功少なしが本音である。これらのカメラは、かさばり、重く、そして操作が煩雑である。三脚も重く頑丈になるし、付属品のかさばりもばかにならない。人跡まれな奥山の撮影には小回りがきかないのだ。現在私は特別の目的でもないかぎり、35mmの一眼

レフで多くを撮っている。野生ランの撮影にはこれで何の不足もない。

●その他

沢すじは腐しょく物質が厚く地盤が弱いので、三脚のおさまりが悪くなる。このような場所から着生ランを望遠レンズで撮影すると、リリースに加わる少しの力でもブレてしまう。いそがずあわてず、自動シャッターで撮るのも一つの手段。

山でレンズキャップを外したり、被せたりは意外に煩わしい。どこへやったか忘れる。紛失も時々ある。スプリング式キャップの場合は、縁に小さなあなをあけ（ぬい針のさきをガスバーナーで焼いてあける）、丈夫な糸（テグスなど）を通し、本体と結んでおくと好都合。

カメラと三脚の接続も簡単で素早いことが絶対。私はワンタッチ連結器としてクイックシューを常用しているがたいへん便利である。

以上私の体験を述べてみました。私は写真のプロではないので、間違っているかもしれません。その点をお含みのうえ参考にして頂ければ幸いです。

出会いということ



ヒロハツリシュスラン

広葉吊襦子蘭

汗顔攀喬樹

蜜葉隔炎塵

正是仙遊裏

宜迎狂氣人

広葉吊襦子蘭

汗顔喬樹を攀れば

密葉炎塵を隔つ

正に是仙遊の裏

宜しく狂氣の人を迎えるべし

私は昭和50年4月弘前大学医学部を辞め、生まれ故郷の青森市で開業しました。それまでは医学の教育、臨床および研究生活に追われ植物とはまったく無縁でした。しかし開業してからは多少とも自分の時間を持てるようになり、以前より興味があった山草園芸を52年頃から始めました。その頃から自分の健康を考えて山歩きを始めていましたが、植物の写真撮影にも興味を持つようになったのです。なかでも強くひかれたのが野生ランです。開発と乱掘でどんどん数が減っていくのが残念でならず、ぜひ記録に残したいと思うようになりました。

昭和55年、まったく偶然のことから私のラン写真撮影を左右する、大きな二つの出会いがありました。その一つは、青森県のフロラを調べている細井幸兵衛氏と、その友人角田充氏との出会いです。私は植物については知識がなかったので、ご二人から知らないことを、いろいろ教えてもらいました。そしていま一つの出会いは、野の花・山の花を一生懸命撮影されていた八戸市の久本欽也氏との出会いです。氏は54歳になってから「何かにひかれるようにして」このみちに入ったと自著『山の花旅紀行』（山と溪谷社）に書いておられますが、植物学者でもなければ、写真家でもありません。しかし氏の自然に対する敬虔な態度、花にそそがれる深い愛情、そして新しいものを求める人一倍の努力は、私を強く感動させました。この二つの出会いは、私を勇気づけ野生ラン撮影へとかりたてたのです。

私が青森県内のランを本格的に撮り始めたのは、昭和56年からです。最初から茨の道の連続でしたが、8年で一応の区切りをつけることができました。この短期間にここまでこぎつけることができたのは、ひとえに友人たちの援助、協力があったからこそです。植物の撮影には人それぞれに考え方があり、みな独自の芸術的理論を持っていると思います。私が今回の写真撮影で特に心を配ったのは、芸術性以前に記録性ということであり、生育環境を生かしたいということでした。しかし私自身の勉強不足と経験の浅さ、さらに植物の特殊性から、その感じを十分再現できなかったものが多かったのは残念です。

さて、佳人薄命という言葉があります。今これを植物になぞらえるなら、趣味家の異常なまでの対象となっているランは、まさにぴったりではないでしょうか。変化に富む花の形、やわらかでつやのある姿、そして「蘭」という言葉の響きが、人々の心をひきつけるのでしょう。なまじ魅惑的なため、ランはやはり自らの意思とは関係なく滅びつつあると思うのですが……。

憐野生蘭

壯齡尋山野

八年倏忽過

美林都伐採

湖沼半消磨

艷草葩相戚

行人淚独多

可憐將滅矣

蘭也奈何而

平成元年春

野生蘭を憐れむ

壯齡にして 山野を尋ね

八年 倏忽として過ぐ

美林 都て伐採

湖沼 半ば消磨す

艷草 葩相戚いて

行人 涙独り多し

憐れむべし 將に滅びんとす

蘭や 而を奈何せん

これをもって、あとがきにかえたいと思います。

おわりに、いろいろ助言をいただいた細井幸兵衛氏、調査撮影にいつも同行してくださった田辺秀治氏、角田充氏その他ご援助をいただいた多くの人々に深甚の謝意を表します。

さくいん

(一般の植物名は除きました。人名は故人のみ)

ア		花式図	138
アオキラン	135	花序	141
アオジガバチ	116	ガッサンチドリ	57
アオチドリ	35	花粉塊	141
アオスズラン	69	花粉塊柄	141
アオテンマ	59	花卉	140
アオフタバラン	74	カモメラン	135
アケボノシュスラン	87	仮雄ずい	141
アサヒラン	108		
アツモリソウ	9	キ	
アリドオシラン	94	菊地政雄	36
		木下友三郎	25
イ		キソチドリ	51
イイヌمامカゴ	43	キバナノアツモリソウ	135
イシヅチラン、イシヅチ	126	キボウシラン	114
イチヨウラン	105	距	140
イトザキトキソウ	79	偽鱗茎	142
		キンセイラン	123
ウ		キンラン	60
ウズラバハクサンチドリ	17	ギンラン	61
ウチョウラン	21		
		ク	
エ		クゲヌマラン	65
エゾスズラン	69	クシロチドリ	36
エビネ	125	工藤祐舜	67
		クマガイソウ	7
オ		クマリン	135
オオミズトンボ	135	クモキリソウ	109
オオヤマサギソウ	56		
オクシリエビネ	121	コ	
オゼノサワトンボ	15	コアツモリソウ	11
オニノヤガラ	59	コアニチドリ	24
		コイチヨウラン	106
カ		郡場 寛	83
カキラン	68	コケイラン	102
萼片	140		
花茎・花軸	140		

コバノトンボソウ.....55
コフタバラン.....73
根茎..... 142

サ

サイハイラン..... 131
サカネラン.....81
サギソウ..... 135
ササバギンラン.....63
佐藤 蒨.....60
サルメンエビネ..... 119
サワラン..... 108

シ

ジガバチソウ..... 116
子房..... 141
ショウキラン.....71
小嘴体..... 142
種子..... 144
受精..... 143
種皮..... 145
受粉..... 143
シュンラン..... 134
シロバナウチョウラン.....21
シロバナハクサンチドリ.....16
シロテンマ.....59
ジンバイソウ.....50

ス

ずい柱..... 141
菅江真澄..... 193
スズムシソウ、スズムシラン..... 110

セ

セイトカスズムシソウ..... 111

ソ

素心..... 119

タ

タカネトンボ.....57
単子葉植物..... 138

チ

チャボチドリ.....18
柱頭..... 141

ツ

ツチアケビ.....76
ツレサギソウ.....47

ト

トキシソウ.....79
トケンラン..... 133
トンボソウ.....42

ナ

ナツエビネ..... 121

ネ

ネジバナ.....82
粘着体..... 141

ノ

ノビネチドリ.....31

ハ

胚..... 145
胚乳..... 144
ハクウンラン.....95
ハクサンチドリ.....16
ハシナガヤマサギソウ.....57
服部静男.....65
ハマカキラン.....70
原 寛.....15
半腐生植物.....67

ヒ

ヒトツボクロ..... 103
ヒナチドリ.....18

ヒノキチオール	148
ヒメホテイラン	97
ヒメミズトンボ	15
ヒメヤマウズラ	91
ヒロハツリシュスラン	84
ヒロハトンボソウ	135

フ

フィトンチッド	150
フォーリー神父	25
フガクスズムシ	112
フジチドリ	27
フジバカマ	135
腐生ラン	59
フタバラン	73
フナシトケンラン	133
ブラキストンライン	93
プロトコルム	100

へ

ベニシュスラン	93
---------	----

ホ

苞	141
ホクロ	135
ホソバノキソチドリ	53

マ

マイサギソウ	57
牧野富太郎	25

ミ

ミスズラン	41
ミズチドリ	49
ミズトンボ	13
ミヤマウズラ	88
ミヤマフタバラン	75
ミヤマモジズリ	30

ム

ムカゴ	24
ムカゴソウ	33
無性繁殖	144
村井三郎	86

モ

モジズリ	82
------	----

ヤ

葯	141
葯隔	143
葯帽	143
ヤチラン	107
ヤマサギソウ	52
ヤマトキソウ	88

ユ

ユウシュンラン	67
有性繁殖	144

ヨ

葉鞘	143
葉柄	143

ラ

ラン菌	144
-----	-----

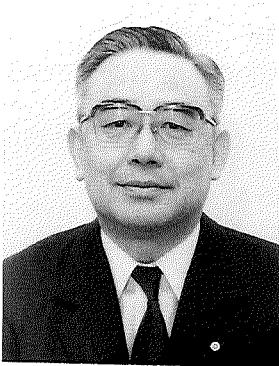
参 考 文 献

- 1) 原 寛：植物研究雑誌，9巻，520頁，1933.
- 2) 村井三郎・渡辺由規夫：青森博物研究会会報，2巻，44～46頁，1935.
- 3) 村井三郎：青森博物研究会会報，10・11巻，53～55頁，1940.
- 4) 細井幸兵衛：青森林友，243巻，20頁，1953.
- 5) 原子一男・柿崎敬一：青森県生物学会誌，6巻，13～15頁，1964.
- 6) 原子一男・柿崎敬一：青森県生物学会誌，7巻，9～11頁，1965.
- 7) 中沢 潤：青森県植物誌. 東奥日報社，1968.
- 8) 前川文夫：原色日本のラン. 誠文堂新光社，1971.
- 9) 細井幸兵衛：北陸の植物，24巻，2号，1976.
- 10) 長野正紘・三枝敏郎：野生らん. 文化出版局，1980.
- 11) 伊藤五彦：エビネ. 日本放送出版協会，1980.
- 12) 小田倉正圀：ホーム園芸 日本の野生ラン. 主婦と生活社，1980.
- 13) 角田 充：青森県生物学会誌，18巻，11～15頁，1980.
- 14) 角田 充：青森県生物学会誌，19巻，4～7頁，1981.
- 15) 北村四郎・村田 源・小山鉄夫：原色日本植物図鑑 草本編〔Ⅲ〕・単子葉類. 保育社，1981.
- 16) 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎他：日本の野生植物 草本 単子葉類. 平凡社，1982.
- 17) 橋本 保・神田 淳：原色 野生ラン. 家の光協会，1982.
- 18) 西津軽の植物編集委員会：西津軽の植物. 西津軽郡教職員組合，1982.
- 19) 相馬昭夫：六ヶ所の植物（その一）＝ラン科＝. 青森県上北郡六ヶ所村教育委員会，1983.
- 20) 中島邦雄：「幻のラン」100年ぶりの再発見ー“街の植物学者”の20年がかりの探索. フォーカス，4巻15号，32～33頁，新潮社，1984.
- 21) 正宗巖敬：日本の自生蘭 写真と図 第一集. 限定版，1984.
- 22) 正宗巖敬：日本の自生蘭 写真と図 第二集. 限定版，1986.
- 23) 山田常雄・前川文夫・江上不二夫他：岩波 生物学辞典. 第3版，1986.
- 24) 正宗巖敬：日本の自生蘭 写真と図 第三集. 限定版，1987.
- 25) 正宗巖敬：日本の自生蘭 写真と図 第四集. 限定版，1988.
- 26) 季刊園芸雑誌“らん”. 11号～12号，池田書店，1988.
- 27) 正宗巖敬：日本の自生蘭 写真と図 第五集. 限定版，1988.

カメラとフィルム

使用したカメラは主に35mm判のニコンFE、FE2（ニッコール35mm、マイクロニッコール55mm）である。それにプロニー判のハッセルブラッド500C/M（プラナー80mm、デスタゴン50mm）、ブロニカSQ-A（ゼンザノンS80mm）、ペンタ6×7（タクマー6×7 105mm）を併用した。フィルムは主としてコダック社のEPR、KRだが時にEN、EPD、EL、RD（フジ）も用いた。

ストロボはサンパックauto24SR（ガイドナンバー8.5～24）を常時携帯、光源量を調節して使用した。



著者略歴

沼田 俊三（ぬまた・としぞう）

昭和11年 青森市に生まれる

昭和36年 弘前大学医学部卒業

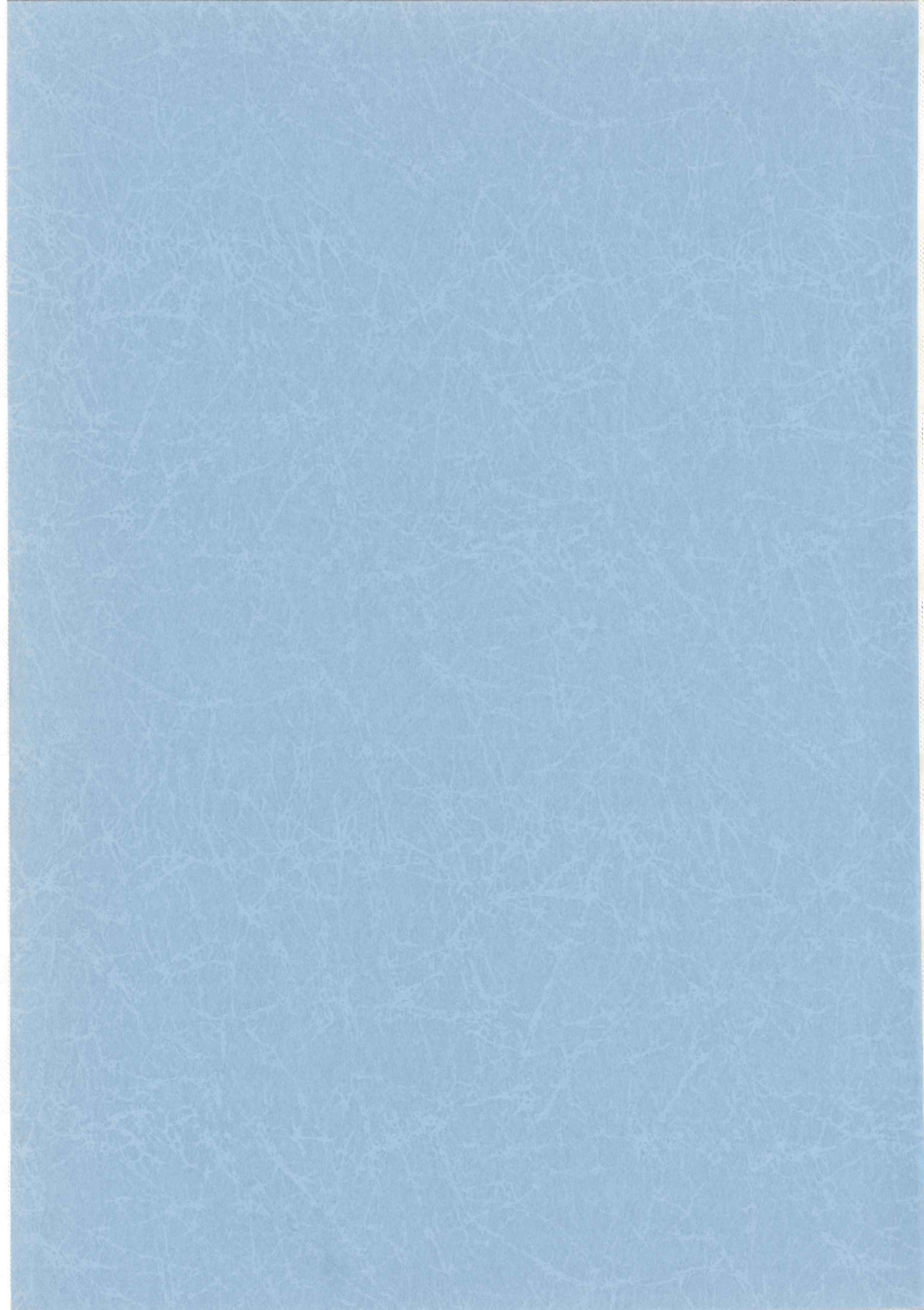
同大学講師（外科学）を経て

昭和50年 現在地開業

青森市医師会会員、青森南ロータリークラブ会員、青森山草会会長

現住所 青森市花園一丁目5-9

TEL0177 (43) 0421



写真と記録

青森県のラン

・花と山のガイド

定価 3,000円

平成元年4月20日発行

著 者 沼田 俊三

発 行 者 沼田 俊三

〒030 青森市花園1丁目5-9

電 話 0177 (43) 0421

・印 刷 青森コロニー印刷